

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（202）

国道 270 号（宮崎バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

なか つ の い せき
中津野遺跡
台地部編

（南さつま市金峰町）



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(202)

中津野遺跡 台地部編

二〇二〇年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2020年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（遺跡南側上空から：台地部）

序 文

この報告書は、国道270号（宮崎バイパス）改築工事に伴って、平成18～21・25～29年度に実施した南さつま市金峰町に所在する中津野遺跡の発掘調査の記録です。

昭和25年、本報告書調査箇所約500m東側の畑地（標高約30m）から、堅穴住居状の遺構が発見されました。調査を担当したのは、当時、鹿児島市立玉龍高等学校教諭であった河口貞徳先生（1909～2011）でした。遺構の中からは、ほぼ完全な形の土器が多量に見つかりました。これらの土器は、その形状が弥生時代から古墳時代への転換期に位置付けられることから、発見地名をとって「中津野式土器」と命名され、考古学史に残る標式遺跡の一つとなっております。

本報告書では、台地部で発見された旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代等の遺物・遺構の成果を報告しています。これらの時期の遺物・遺構の調査成果は、南九州の当該時期を考える際の貴重な資料となりました。

県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

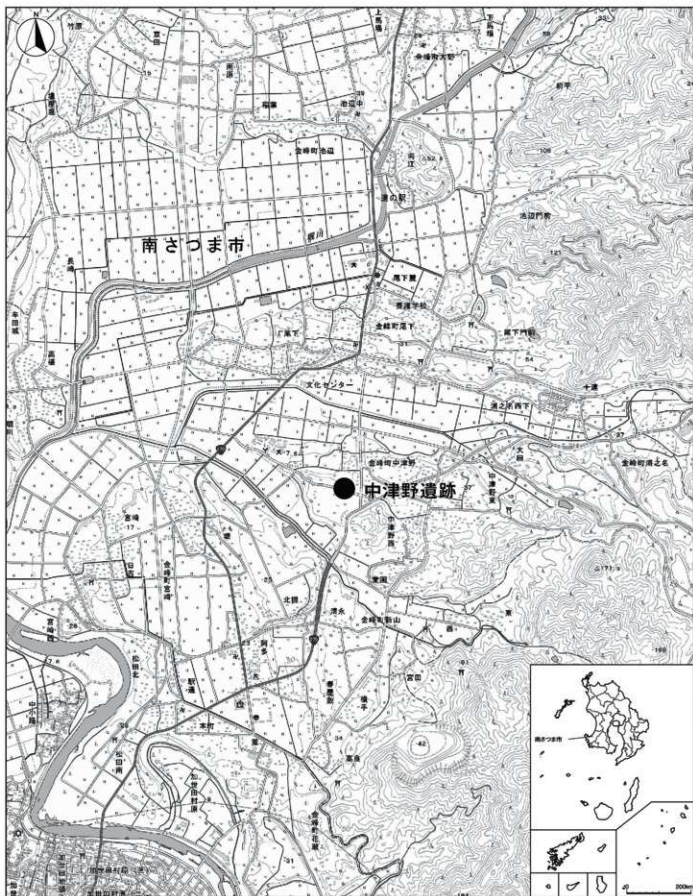
最後に、調査にあたり御協力をいただいた、南さつま市金峰町中津野の地域の方々、鹿児島県土木部道路建設課、南さつま市教育委員会をはじめとする関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

令和2年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 前 迫 亮 一

報告書抄録

ふりがな	なかつのいせき だいちぶへん							
書名	中津野遺跡 台地部編							
副書名	国道270号(宮崎バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	202							
編集者名	鮫島えりな 湯嶋崎辰巳 大保秀樹							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月	2020年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
中津野遺跡	鹿児島県 南さつま市 金峰町 中津野	46220	220-218 (旧35-15)	31° 27' 0"	130° 20' 37"	確認・本調査 2006. 7. 3～2006.12.27	7,800	国道270号(宮崎バイパス)改築工事に伴う記録保存調査
						本調査 2007. 5. 7～2008. 2.27	4,700	
						2008. 9. 1～2010. 2.25	7,500	
						2008.10. 4～2009. 2.24	5,260	
						2013. 6. 5～2013.10.31	3,900	
						2014. 8. 4～2014.12.24	410	
						2015.11. 2～2016. 3.25	2,100	
						2016.11. 1～2017. 3.15	1,400	
						2017. 5.15～2018. 3.16	9,300	
						所収遺跡名	種別	
中津野遺跡	集落	旧石器	礎群7基、土坑2基	ナイフ形石器、スクレイパー、石錐、石核				
	散布地	縄文草創期		石器				
	集落	縄文早期	集石2基	吉田式土器、平筒式土器、打製石鏃、二次加工剥片、打製石斧、磨製石斧、磨石、蔽石				
	集落	縄文前期	集石3基、土器集中1か所	管廬式土器、深浦式土器、案板文系土器				
	散布地	縄文中期		春日式土器、船元式土器				
	集落	縄文後期	集石2基、土坑3基、石器製作跡1か所	指宿式土器、松山式土器、市来式土器、西平式土器、打製石鏃、異形石器、石匙、スクレイパー、石錐、打製石斧、磨製石斧、磨石、蔽石、礫器、石皿、舟型鯨石製品				
	散布地	縄文晩期		石器				
	集落	弥生	竪穴住居跡1軒	高橋式土器、入来式土器、石鏃、スクレイパー				
	散布地	古墳		成川式土器、線刻土器				
	散布地	古代		土師器、須恵器				
遺跡の概要	<p>本遺跡は、金峰山地中岳の北西麓から延びる標高約30mの舌状台地(中津野台地)上と境川の氾濫により形成された沖積地に位置する、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。地形によって舌状台地上の台地部と沖積地に位置する低地・低湿地部の2地点に分けられる。本書では、台地部分の報告を行う。</p> <p>台地部では、旧石器時代の礎群や、縄文時代早期～後期の集石、石器製作跡、弥生時代前期の竪穴住居跡、中近世の掘立柱建物や炉跡等、当時の生活をうかがえる遺構を検出した。</p> <p>また、旧石器時代～近世までの各時代の土器や石器などが出土した。特に縄文時代前期の土器集中をなす案板文系土器や縄文時代中期に該当する全面に縄文を施す土器、5つの山状突起をもつ土器などがほぼ完全な形で出土している。</p>							



遺跡位置図 (1 : 25,000)

例 言

- 1 本書は国道270号（宮崎バイパス）改築工事に伴う中津野遺跡台地の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県南さつま市金峰町中津野に所在する。
- 3 発掘調査は鹿児島県土木部道路建設課の依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は平成18～21、25～29年度に実施し、整理・報告書作成作業は平成24・26・30・令和元年度（平成31年）に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。掲載した遺構番号は、遺構の種類ごとに付し、本文、挿図、表、図版の遺構番号と一致する。
- 6 縮尺は挿図ごとに示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は海抜絶対高である。
- 8 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 9 発掘調査における測量業務の一部については、株式会社埋蔵文化財サポートシステム（平成29年度）に、空中写真の撮影は有限会社スカイサーベイ九州（平成20・28年度）及び、株式会社ふじた（平成29年度）に委託した。
- 10 遺構の埋土や土器の色調、土層断面の土色は『新版標準土色帖』（1970年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 11 遺構図等の作成・トレースは、湯場崎が整理作業員の協力を得て行った。
- 12 出土遺物の実測・拓本・トレースは、湯場崎と鮫島が整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の一部は株式会社パスコと株式会社イソックに委託した。
- 13 整理作業におけるデジタル作業の効率化・迅速化を図るため、株式会社イソックにデジタル作業業務委託を行い、遺物分布図、接合図や遺物トレース図等を作成した。
- 14 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて、鮫島と大保が行った。
- 15 本書に係る自然科学分析について、放射性炭素年代測定はパリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 16 本書の編集は鮫島、湯場崎、大保が担当し、執筆の分担は次のとおりである。
第1～3章 湯場崎
第4章 鮫島・湯場崎
第5章 湯場崎・榎パリオ・サーヴェイ
第6章 鮫島
- 17 本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。遺物注記等で用いた記号は「ナカツノ」である。
- 18 遺物は年度ごとに遺物番号が付してあったため、重複があった。また、平成28年度は、調査地点ごとに1番から遺物番号を付している。そこで、整理作業にて遺物番号が通しになるように変更した。観察表に記載してあるのは、整理作業にて変更した遺物番号である。調査時の遺物番号は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの遺物とともに、遺物番号変更台帳を作成し保管している。

遺物番号変更新旧対応表

年度	調査時の遺物番号	整理作業時の新遺物番号 (注記・観察表等)
18～21	1～10,990	1～10,990 (調査時と同一)
25	1～11,236	H25_1～H25_11,236 (H25と記載)
26	1～353	20,001～20,353
27	1～5,313	30,001～35,313
28	市道A 1～1,345	40,001～41,345
	市道B 1～1,088	42,001～43,088
	C地点 1～2,411	44,001～46,411
	D地点 1～34	46,412～46,443 (C・D地点は通し番号とした)
29	1～15,423	100,001～115,423

凡例

1 遺構について

- (1) 各遺構の略号及び縮尺は原則以下に示すとおりである。なお、大型の遺構についてはこの限りでない。それぞれの図中にスケールを示してある。

遺構名	縮尺	略号
堅穴住居跡	1/40	S I
土坑	1/40	SK
炉跡	1/20	S L
竃群・集石	1/20	SS
掘立柱建物跡	1/60	S B
溝状遺構・古道	1/160	S D
石器製作跡	1/160	S G
柱穴	1/10	S P

- (2) 遺構番号は遺構ごとに通し番号を付した。

2 遺物について

- (1) 掲載遺物の縮尺は原則以下に示すとおりである。

遺物名	縮尺
土器・土製品・陶磁器	1/3
石鏃	1/1
スクレイパー類	1/1 ~ 1/2
石斧・石皿・砥石・磨石・敲石等	1/3
石器	1/3

- (2) 掲載遺物番号は通し番号を付した。

3 観察表の表記凡例は次のとおりである

- (1) 「法量」において、括弧内に記載している数値は復元径の値である。
 (2) 「胎土」における記号の表現は次のとおりである。
- …微量含む △…少量含む
 ○…含む ◎…多量含む

4 本書で用いた陶磁器・土器等の網掛けは以下のとおりである。

	内黒土師器
	赤色土器
	炭化物付着範囲
	赤色顔料付着範囲

5 本書で用いた石材の分類は下表（石材分類表）のとおりである。

石材分類表

石材1	石材2	概要	
黒曜石 (OB)	1	不純物を含み、濃黒で光を通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市平木場、いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。	上牛鼻・平木場・宇都系
	2	光を通し、不純物を大量に含むものを包括した。鹿児島市三船、伊佐市日東、五女木の原産地資料に類似する。	三船・日東系
	3	紺色～黒色を基調として、不純物をほとんど含まない良質や自然面が磨りガラス状を呈するものを包括した。えびの市桑ノ木津留、伊佐市上青木の資料に類似する。	桑ノ木津留・上青木
	4	黒色で不純物をほとんど含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市腰岳産の資料に類似する。	腰岳系
	5	青灰色で不純物が少ないものを包括した。長崎県針尾や長崎県深堀等西北九州の原産地資料に類似する。	西北九州系（針尾・深堀）
	6	不純物をあまり含まない灰色のものを包括した。椎葉川周辺のものも原産地とするものに類似する。	椎葉川系
	7	乳白色を基調としており、微細な不純物を含むものを包括した。佐賀県延島を原産地とするものに類似する。	延島系
	8	霞島系	霞島系
安山岩 (AN)		色調は、黒灰色～青灰色系である。石まを質の不純物を含み、基調は滑らかでガラス質に富む質感のもの。不純物を含み、基調はややざらついた質感のもの。	サスカイト含む
チャート (CH)		色調は、白色～灰色系、青灰色～緑色系、黒色系と様々である。珪質分に富み、光沢感を有するもの。珪質分にやや乏しく、透明感や光沢感がほとんどないもの。	
ホルンフェルス (HF)		色調は、黒～暗灰色系、茶色～ベージュ系、白色系と様々である。熱変成した泥岩～頁岩質のもので粒子が比較的に細かいもの。	
頁岩 (SR)		色調は、暗灰色～灰色系、黒色～暗灰色系と様々である。珪質分に非常に富み、光沢のあるもの。珪質分がほとんどなく、無光沢で、節理が発達せず、緻密で良質なものである。	
砂岩 (SA)		色調は、暗灰色～灰色系である。砂粒、石英粒が集合して固まった堆積岩の一種である。熱くと粘着性が高いものを本類に含めた。	
めのう系 (OC)		めのう・玉髓・石英・蛋白石・燧石・水晶などを総称して、本類に含めた。	

本文目次

第1章	発掘調査の経過	1
第1節	調査に至るまでの経緯	1
第2節	確認調査・本調査	1
第3節	整理・報告書作成	11
第2章	遺跡の位置と環境	13
第1節	地理的環境	13
第2節	歴史的環境	13
第3節	事業路線内遺跡の概要	17
第3章	調査の方法と層序	20
第1節	調査の方法	20
第2節	層序	23
第4章	調査の成果	33
第1節	旧石器時代の調査	33
第2節	縄文時代草創期・早期の調査	41
第3節	縄文時代前期・中期の調査	45
第4節	縄文時代後期・晩期の調査	57
第5節	弥生時代・古墳時代の調査	79
第6節	古代・中近世の調査	83
第5章	自然科学分析	117
第1節	自然科学分析の種類と目的	117
第2節	中津野遺跡出土試料の放射性炭素年代測定	117
第6章	総括	119
第1節	旧石器時代について	119
第2節	縄文時代前期～後期について	119

挿図目次

遺跡位置図 (1:25,000)		第58図	土坑 3号	59
第1図 調査区全体範囲	6	第59図	土坑 4号	59
第2図 平成18・19年度調査範囲	7	第60図	土坑 5号	59
第3図 平成20・21年度調査範囲	8	第61図	石器製作跡	60
第4図 平成25・26年度調査範囲	9	第62図	石器製作跡出土遺物	61
第5図 平成27・28年度調査範囲	9	第63図	縄文時代後期の土器 (1)	62
第6図 平成29年度調査範囲	11	第64図	縄文時代後期の土器 (2)	63
第7図 中津野遺跡周辺地形分類図	16	第65図	縄文時代後期の土器 (3)	64
第8図 上空から見た中津野遺跡周辺地形	16	第66図	縄文時代後期の土器 (4)	65
第9図 宮崎バイパス関連遺跡位置図	17	第67図	縄文時代後期の土器 (5)	66
第10図 周辺遺跡地図 (1:25,000)	18	第68図	縄文時代晩期の土器	67
第11図 台地部調査範囲	22	第69図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器分布図 (1)	68
第12図 土層断面図 (1)	24	第70図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器分布図 (2)	69
第13図 土層断面図 (2)	25	第71図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (1)	70
第14図 土層断面図 (3)	26	第72図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (2)	71
第15図 土層断面図 (4)	27	第73図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (3)	72
第16図 土層断面図 (5)	28	第74図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (4)	73
第17図 土層断面図 (6)	29	第75図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (5)	74
第18図 土層断面図 (7)	30	第76図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (6)	75
第19図 土層断面図 (8)	31	第77図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (7)	76
第20図 土層断面図 (9)	32	第78図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (8)	77
第21図 旧石器時代調査範囲	33	第79図	Ⅱ・Ⅲ層出土石器 (9)	78
第22図 旧石器時代遺構配置図	34	第80図	弥生時代遺構配置図	79
第23図 雑群 1号	35	第81図	竪穴住居跡	80
第24図 雑群 2号	36	第82図	竪穴住居跡遺物出土状況及び出土遺物	81
第25図 雑群 3号	36	第83図	弥生時代・古墳時代の土器	82
第26図 雑群 4号	36	第84図	中近世遺構配置図 (1)	84
第27図 雑群 5号	37	第85図	中近世遺構配置図 (2)	85
第28図 雑群 6号	37	第86図	中近世遺構配置図 (3)	86
第29図 雑群 7号	37	第87図	中近世遺構配置図 (4)	87
第30図 土坑 1号	38	第88図	掘立柱建物跡 1号及び出土遺物	88
第31図 土坑 2号	38	第89図	掘立柱建物跡 2号	89
第32図 旧石器時代石器分布図	38	第90図	掘立柱建物跡 3号	90
第33図 旧石器時代の遺物 (1)	39	第91図	掘立柱建物跡 4号	91
第34図 旧石器時代の遺物 (2)	40	第92図	掘立柱建物跡 5号	91
第35図 縄文時代早期遺構配置図	41	第93図	掘立柱建物跡 6号	92
第36図 集石 1号	42	第94図	炉跡 1号	93
第37図 集石 2号	42	第95図	炉跡 2号	94
第38図 縄文時代早期遺物分布図	43	第96図	炉跡 3号	94
第39図 縄文時代草創期の遺物	44	第97図	土坑 6号	95
第40図 縄文時代早期の遺物	44	第98図	土坑 7号	95
第41図 縄文時代前期遺構配置図	45	第99図	土坑 8号	95
第42図 集石 3号	46	第100図	土坑 9号	95
第43図 集石 4号	46	第101図	土坑 10号	95
第44図 集石 5号	47	第102図	土坑 11号	95
第45図 土器集中	48	第103図	溝状遺構 1・2号	96
第46図 土器集中の土器	49	第104図	溝状遺構 2号及び出土遺物	97
第47図 縄文時代前期中期土器分布図 (Ⅰ類～Ⅴ類) (1)	50	第105図	溝状遺構 3号	98
第48図 縄文時代前期中期土器分布図 (Ⅰ類～Ⅴ類) (2)	50	第106図	溝状遺構 4・5・6号及び埋土内出土遺物	99
第49図 縄文時代前・中期の土器 (1)	51	第107図	溝状遺構 7号	100
第50図 縄文時代前・中期の土器 (2)	52	第108図	溝状遺構 8号及び出土遺物	100
第51図 縄文時代前・中期の土器 (3)	53	第109図	古道跡 1号	101
第52図 縄文時代前・中期の土器 (4)	54	第110図	古道跡 2号	102
第53図 縄文時代前・中期の土器 (5)	55	第111図	古道跡 3号	103
第54図 縄文時代前・中期の土器 (6)	56	第112図	古道跡 4号	103
第55図 縄文時代後期遺構配置図	58	第113図	古道跡 5号	103
第56図 集石 6号	59	第114図	古道跡 6号	103
第57図 集石 7号	59	第115図	古道跡 7号	104

第116図	古代の遺物	105
第117図	中世の遺物	106
第118図	近世の遺物 (陶磁器)	107
第119図	中近世の遺物 (陶磁器・土製品・石製品・古銭)	108
第120図	曆年校正結果	118
第121図	縄文時代土器出土状況図	119
第122図	縄文時代中期土器接合図	120
第123図	中津野遺跡台地部縄文時代前期末～中期中葉の土器	121
第124図	縄文時代後期晩期土器分布図 (VI類～晩期)	122

表目次

石材分類表		
第1表	周辺遺跡地名表	19
第2表	中津野遺跡台地部基本層序	23
第3表	旧石器時代遺物観察表	109
第4表	縄文時代草創期土器観察表	109
第5表	縄文時代早期土器観察表	109
第6表	縄文時代早期石器観察表	109
第7表	土器集中観察表	109
第8表	縄文時代前期～中期土器観察表	109
第9表	石器製作跡出土石器観察表	111
第10表	縄文時代後期土器観察表	111
第11表	縄文時代晩期土器観察表	112
第12表	Ⅱ・Ⅲ層出土石器観察表	112
第13表	竪穴住居内出土遺物観察表	114
第14表	弥生時代・古墳時代出土遺物観察表	114
第15表	中近世遺構内出土遺物観察表	114
第16表	中近世遺構内出土遺物観察表	114
第17表	古代・中近世出土遺物観察表(土器・土製品)	115
第18表	古代・中近世出土遺物観察表(陶磁器)	115
第19表	中近世の遺物(石製品・古銭)	116
第20表	放射性炭素年代測定結果	118

写真目次

写真1	E-67～71区西壁土層断面	23
写真2	C-E-48区北壁土層断面	23

図版目次

巻頭図版 遺跡遠景		
図版1	遺跡遠景	123
図版2	調査状況(1)	124
図版3	調査状況(2)	125
図版4	旧石器時代	126
図版5	縄文時代早期・前期	127
図版6	縄文時代後期	128
図版7	弥生時代	129
図版8	中近世(1)	130
図版9	中近世(2)	131
図版10	中近世(3)	132
図版11	中近世(4)	133
図版12	旧石器時代・縄文時代(1)	134
図版13	縄文時代(2)	135
図版14	縄文時代(3)	136
図版15	縄文時代(4)	137
図版16	縄文時代(5)	138
図版17	縄文時代(6)	139
図版18	縄文時代(7)	140
図版19	縄文時代(8)	141
図版20	弥生時代～古代	142
図版21	中近世(1)	143
図版22	中近世(2)	144

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）は国道270号（宮崎バイパス）改築工事に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。

これを受けて、文化財課が平成15年11月に事業予定地内の分布調査を実施したところ、事業区域内に、周知の埋蔵文化財包蔵地である小中原遺跡、中津野遺跡、田布施遺跡、南下遺跡の4遺跡が所在することが判明した。分布調査の結果を受けて、道路建設課、文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者で協議した結果、小中原遺跡は平成16年度に本調査を行うこととし、調査は埋文センターが実施した。田布施遺跡については、平成18年1月30日に文化財課が試掘調査を行い、事業区域内については遺物包含層が削平されていることを確認した。中津野遺跡、南下遺跡については、平成18年度以降に確認調査及び本調査を埋文センターが実施することとした。

第2節 確認調査・本調査

本報告書は、中津野遺跡台地部編であるが、調査経過を記録するために台地部と低地・低湿地部の調査を併記して記載した。

1 平成18年度 確認調査・本調査

平成18年度は、中津野遺跡B-E-40～47区の本調査と残り約3,500㎡の確認調査と、隣接する南下遺跡の本調査を行った。調査体制は、職員2名、発掘作業員35名で、調査期間は、平成18年7月3日から平成19年12月27日までである。調査体制および調査経過の詳細については以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長(平成18年7月31日まで) 今川 常雄
	所長(平成18年8月1日から) 宮原 景信
調査企画	次長兼総務課長 有川 昭人
	次長兼南の縄文調査室長 新東 晃一

調査第一課長	池畑 耕一
主任文化財主事兼第一調査係長	
兼南の縄文調査室室長補佐	長野 眞一
調査担当	文化財主事 寺原 徹
	文化財研究員 西園 勝彦
事務担当	総務係長 寄井田正秀
	主査 蒲地 俊一

(2) 調査経過

発掘調査の経過については、月報・日誌抄等を月ごとに集約して記載する。

7月

台地部 環境整備・重機による表土剥ぎ
B-E-40～47区 II・III A層調査

8月

台地部 B-E-40～47区 調査終了
9月以降は南下遺跡本調査中心で調査を行う。

2 平成19年度 確認調査・本調査

平成19年度は、平成18年度に引き続き中津野遺跡の確認調査・本調査及び南下遺跡の本調査を行った。表面積10,800㎡を対象に、5月～12月は職員2名、発掘作業員37名体制、1・2月は職員4名、発掘作業員69名体制で平成19年5月7日から平成20年2月27日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の詳細については以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長 宮原 景信
調査企画	次長兼総務課長 有川 昭人
	次長兼南の縄文調査室長 新東 晃一
調査第一課長	池畑 耕一
主任文化財主事兼第一調査係長	
兼南の縄文調査室室長補佐	長野 眞一
主任文化財主事	井ノ上秀文
調査担当	文化財主事 吉井秀一郎
	文化財主事 中村幸一郎
	文化財研究員 西園 勝彦
	文化財研究員 辻 明啓
事務担当	総務係長 寄井田正秀
	主査 五百路 真
調査指導	鹿児島大学法文学部教授 森脇 広
	鹿児島大学法文学部准教授 本田 道輝
	福岡市教育委員会文化財部

埋蔵文化財第一課課長 山口 謙治

(2) 調査経過

5月～7月

南下遺跡の本調査を中心に行う。

8月

台地部 なし

低地・低湿地部 1 トレンチ (以下, T) (E-18区)・
2 T (B・C-15・16区) 確認調査

9月

台地部 なし

低地・低湿地部 3 T (D-10・11区)・4 T (C-
10・11区)・5 T (C-5・6区)・6
T (C-3区)・7 T (C-5区) 確認
調査, Z～E-7～11区 II層調査

10月

台地部 なし

低地・低湿地部 5 T (C-5・6区)・6 T (C-3区)・
7 T (C-5区) 確認調査, Z～E-
7～11区 II層調査, A～F-2～
7区確認調査の結果, 調査終了

11月

台地部 1 T (B-56・57区)・2 T (D-56区)・3 T
(E-56区)・4 T (F-54区)・5 T (E-55区)
確認調査

低地・低湿地部 Z～E-7～11区 II層調査

5日: 県立薩南工業高等学校都市工学科1年生32名遺
跡見学

12月

台地部 7 T (B-64・65区)・8 T (E・F-60・61区)
確認調査

低地・低湿地部 Z～E-7～11区 II層調査

1月

台地部 C～F-72～80区 II・III層調査

低地・低湿地部 Z～E-7～11区 II層調査

23日: 福岡市教育委員会 山口謙治氏現地指導
国立歴史民俗博物館今村肇雄氏・藤尾慎一郎氏
来跡

2月

台地部 C～F-72～80区 IV・V・IX層調査
C～F-72～80区調査終了

低地・低湿地部 Z～E-7～11区 II層調査

南下遺跡調査終了

6日: 鹿児島大学法文学部本田道輝准教授現地指導

12日: 鹿児島大学法文学部森脇広教授現地指導

空撮 有限会社スカイサーベイ九州

3 平成20年度 本調査

平成20年度は、表面積7,500㎡を対象に、職員2名、
発掘作業員35名体制で、平成20年9月2日から平成

21年2月25日まで調査を実施した。調査体制および調
査経過の詳細については以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県埋蔵文化財センター

所 長 宮原 景信

調査企画 次長 兼 総務課長 平山 章

次長 兼 南の縄文調査室長 池畑 耕一

調査第一課長 青崎 和憲

主任文化財主事兼第一調査係長

兼南の縄文調査室室長 補佐 長野 眞一

調査担当 文化財主事 中村幸一郎

文化財主事 日高 勝博

文化財研究員 西園 勝彦

事務担当 総務係長 紙屋 伸一

主 査 鳥越 寛晴

調査指導 鹿児島大学

埋蔵文化財調査室准教授 中村 直子

(2) 調査経過

9月

台地部 B・C-55～61区 II・III層調査

低地・低湿地部 なし

10月

台地部 B・C-55～61区 III・IV・IX層調査

低地・低湿地部 事前準備

11月

台地部 B・C-55～61区 III・IV・IX層調査終了

D・E-55～61区 III・IV・IX層調査

低地・低湿地部 事前準備

12月

台地部 D・E-54～56区 IX層調査

B・C-62～66区 II・III・IV層調査

低地・低湿地部 A～E-7～11区 I・II層調査

1月

台地部 D・E-54～56区 IX層調査

B・C-62～66区 IX層調査

C・E-62～65区 II層調査

低地・低湿地部 A～E-7～11区 II層調査

2月

台地部 C・E-62～65区 III・IV・IX層調査

B～G-54～66区調査終了

低地・低湿地部 A～E-7～11区 II層調査終了

5日: 空撮 有限会社スカイサーベイ九州

6日: 南さつま市立金峰中学校生徒遺跡見学

9日: 奈良文化財研究所 黒坂貴裕氏来跡

16日: 黎明館東和幸主事芸専門員来跡

17日：鹿児島大学中村直子准教授現地指導

南九州市教育委員会上田耕氏・坂元恒太氏来跡

25日：日本保存学会（ベンガラ研究会）一行来跡

4 平成21年度 本調査

平成21年度は、表面積 6,300 m²を対象に、職員2名、発掘作業員35名体制で、平成21年10月5日から平成22年2月24日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の詳細については以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 山下 吉美
調査企画 次長兼総務課長 斎藤 守重
次長兼南の縄文調査室長 青崎 和憲
調査第一課長 中村 耕治
主任文化財主事兼第一調査係長
兼南の縄文調査室室長補佐 井ノ上秀文
調査担当 文化財主事 岩屋 高広
文化財主事 井口 俊二
事務担当 総務係長 紙屋 伸一
査 査 池越 寛晴

(2) 調査経過

10月

台地部 C～F-68～72区 II・III層調査

U～W-54～56区 II・III層調査

低地・低湿地部 調査なし

23日：南さつま市立阿多小学校12名遺跡見学

11月

台地部 C～F-68～72区 II・III層調査

B～E-66～68区 II・III層調査

U～W-54～56区 II・III層調査

低地・低湿地部 調査なし

12月

台地部 A-65～67区 1T・2T確認調査

Z～B-63～68区 確認調査の結果、調査終了

V～Z-54・55区 3～6T確認調査

Y・Z-54・55区 溝状遺構検出

U～B-54～56区 確認調査の結果、調査終了

B～F-66～72区 III・IV層調査

低地・低湿地部 B～F-12～16区 環境整備・表土剥ぎ・II層調査

1月

台地部 E-67～71区 III・IV層調査

Y・Z-54・55区 溝状遺構調査

B～F-66～72区 調査終了

低地・低湿地部 B～D-13・14区 II・III層調査終了

E・F-12～14区 II・III層調査終了

5 平成25年度 本調査

平成25年度は、表面積 3,900 m²を対象に、職員2名、発掘作業員34名体制で、平成25年6月5日から平成25年10月28日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の詳細については以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井ノ上秀文
調査企画 次長兼総務課長 新小田 穠
調 査 課 長 堂込 秀人
第二調査係長 大久保浩二
調査担当 文化財主事 光永 誠
文化財主事 尾川 満
事務担当 主幹兼総務係長 有馬 博文
査 査 池之上勝太

(2) 調査経過

平成25年度は台地部調査なし

6月

低地・低湿地部 B～E-24～29区 II層調査

7月

低地・低湿地部 B～E-24～29区 II・III層調査

8月

低地・低湿地部 B～E-24～29区 II・III層調査

9月

低地・低湿地部 B～E-24～29区 III層調査

10月

低地・低湿地部 B～E-24～29区 III層調査

B～E-24～29区 調査終了

6 平成26年度 本調査

平成26年度は、表面積 790 m²を対象に、職員2名、発掘作業員26名体制で、平成26年8月4日から平成26年12月24日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の詳細については以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井ノ上秀文
調査企画 次長兼総務課長 中島 治
調 査 課 長 前迫 亮一
第二調査係長 今村 敏照
調査担当 文化財主事 尾川 満
文化財研究員 西野 元勝

事務担当主幹兼総務係長有馬博文
主 査 池之上勝太

(2) 調査経過

平成26年度は台地部調査なし

8月

低地・低湿地部 E・F-7～11区 近代水路を検出・
Ⅱa層調査
D・E-13～16区 農道による削平
のため、Ⅱc・Ⅱd層から調査

18日：日置市立和田小学校廣崎教諭発掘調査体験
19日：南さつま市立小・中学校社会科部会12名遺跡見学
27日：日置市立和田小学校教諭10名遺跡見学

9月

低地・低湿地部 E・F-7～11区 Ⅱa層調査
D・E-13～16区 環境整備

10月

低地・低湿地部 E・F-7～11区 Ⅱa・Ⅱb層調査
Ⅲa層足跡状遺構検出
D・E-13～16区 環境整備

11月

低地・低湿地部 E・F-8・9区 Ⅱa層調査・
Ⅲa低地・低湿地部層積蓋原調査
E・F-9・10区 Ⅱb・Ⅲa層足跡
状遺構調査
E・F-10区 Ⅱb層暗渠遺構調査
E・F-7・10区 下層確認調査

13日：平成26年度南薩地域農村整備事業協会遺跡見学
18日：県議会企画建設委員会現地視察

12月

低地・低湿地部 E・F-8・9区 Ⅱa・Ⅱb層調査
E・F-8～10区、D・E-13～15区
は次年度以降調査に備え養生

7 平成27年度 本調査

平成27年度は、表面積2,100㎡を対象に、職員2名、
発掘作業員25名体制で、平成27年11月2日から平成
28年3月25日まで調査を実施した。調査体制および調
査経過の詳細については以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 福山 徳治
調査企画 次長兼調査課長 前迫 亮一
総務課長 有馬 博文
第二調査係長 今村 敏照
調査担当 文化財主事 尾川 満
文化財研究員 黒木 梨絵

事務担当総務係長脇野幸一
(2) 調査経過

11月

台地部 1T (U-57～59区) Ⅱ層調査, 10T (H・
I-51区) Ⅶ層調査, 2T (D-51区) Ⅲb
層調査, 3T (C-51区) Ⅲb層調査, 8T
(G・H-54区) Ⅱ層調査, 9T (H・I-54区)
Ⅱ層調査, 4T (D-50区) Ⅱ・Ⅲ層調査, 5
T (C-50区) Ⅱ・Ⅲ層調査, 6T (D-48・
49区) Ⅱ・Ⅲ層調査, 7T (C-48・49区) Ⅱ・
Ⅲ層調査

低地・低湿地部 調査なし

12月

台地部 1T Ⅱ層調査, 10T Ⅸ層調査,
2T拡張部 Ⅱ層調査, 3T拡張部 Ⅱ層調査,
8T拡張部 Ⅱ層調査, 9T拡張部 Ⅱ層調査,
5T Ⅲb・Ⅳ・Ⅶ層調査,
7T Ⅲb・Ⅳ・Ⅶ層調査

低地・低湿地部 調査なし

4日：南さつま市立阿多小学校家庭教育学級9名遺跡
見学

1月

台地部 U・T-57～59区 Ⅱ・Ⅲ層調査,
B～D-48～50区 Ⅱ・Ⅲ層調査

低地・低湿地部 B～E-21～24区 Ⅱ層調査

2月

台地部 U・T-57～59区 Ⅱ・Ⅲ層調査,
B～D-48～50区 Ⅱ・Ⅲ層調査
T～X-57～60区・G～J-54・55区・A～
I-48～53区調査終了に伴い平成27年度で
台地部調査完了

低地・低湿地部 D・E-22・23区 Ⅱb層調査
C・D-22・23区 Ⅱa層調査

3月

台地部 調査なし

低地・低湿地部 B～E-21～24区 Ⅱ層調査
B～E-21～24区は次年度以降調査に備え養生

8 平成28年度 本調査

平成28年度は、表面積500㎡を対象に、職員2名、
発掘作業員33名体制で、平成28年11月1日から平成
29年3月15日まで調査を実施した。調査体制および調
査経過の詳細については以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 福山 徳治

調査企画	次長兼調査課長	前迫 亮一
	総務課長	高田 浩
	第二調査係長	今村 敏照
調査担当	文化財主事	尾川 満
	文化財研究員	鮫島えりな
事務担当	総務係長	脇野 幸一
調査指導	鹿児島大学名誉教授	森脇 広

(2) 調査経過

11月

B～F-12区 II・III層調査, C～E-29区 II層調査

12月

B～F-12区 IV層調査, C～E-29区 II層調査
D～E-13～15区 II層調査

1月

C～E-29区 II層調査, D～E-13～15区 III・IV層調査

2月

C～E-29区 III層調査, D～E-13～15区 IV層・砂層調査

1日: 南日本新聞取材 山田天真記者
2日: 空撮 有限会社スカイサーベイ九州
4日: 現地説明会 (来場者 348名)
15日: 鹿児島大学森脇広名誉教授現地指導

3月

D～E-13～15区 IV層・砂層調査
B・C-16区 II・III層調査

9 平成29年度 本調査

平成29年度は、表面積4,000㎡を対象に、職員3名、発掘作業員42名・整理作業員6名体制で、発掘作業を平成29年5月15日から平成30年3月16日まで、整理作業を平成29年11月1日から平成30年3月16日まで調査を実施した。なお、調査の効率化・迅速化を図るために、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに測量業務委託を行い、遺構実測・遺物取上を実施した。

(1) 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所	長 堂込 秀人
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二
	総務課長	高田 浩
	第二調査係長	宗岡 克英
調査担当	文化財主事	尾川 満
	文化財主事	湯嶋崎辰巳
	文化財研究員	鮫島えりな
事務担当	総務係長	草水美穂子

(2) 調査経過

5月

D・E-12～15区 III層調査,
B～E-21～23区 II層調査
9日: 発掘調査概要説明地域住民説明会

6月

D・E-12～15区 III層調査,
B～E-21～23区 II層調査
1日: 谷口 県教育次長現地視察
13日: 南さつま市立金峰中学校1年生26名遺跡見学

7月

D・E-12～15区調査終了,
B～E-21～23区・D・E-19～21区 II層調査
7日: 株式会社パレオ・ラボ、AMS・樹種同定分析
試料現地採取

8月

B～E-21～23区 III層上面調査, 調査終了
D・E-19～21区・D・F-6～11区 II層調査
8日: 南さつま市教育委員会10名遺跡見学
25日: 埋蔵文化財養成中級講座8名現地研修

9月

B・E-19～21区・D・F-6～11区 II・III層調査
13日: 文化庁原田昌幸主任文化財調査官現地指導

10月

B～E-19～21区 II・III層調査
B～F-12・13区 II層調査

11月

B～E-19～21区 III層調査, 調査終了
B～E-16～18区・B～F-12・13区 II層調査
10日: パリノ・サーヴェイ株式会社自然科学分析試料
現地採取
21日: 阿久根市郷土史会12名遺跡見学
25日: 現地説明会 (来場者 121名)

12月

B～E-16～18区・B～F-12・13区 II層調査

1月

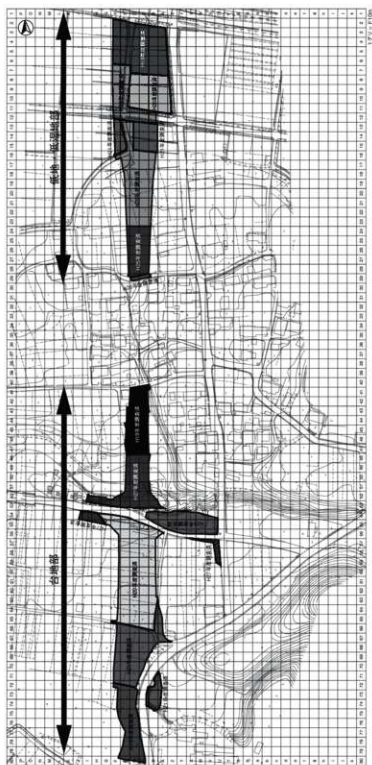
B～E-15～18区 II・III層調査
B～F-11～13区 II層調査
9日: パリノ・サーヴェイ株式会社自然科学分析試料
現地採取

2月

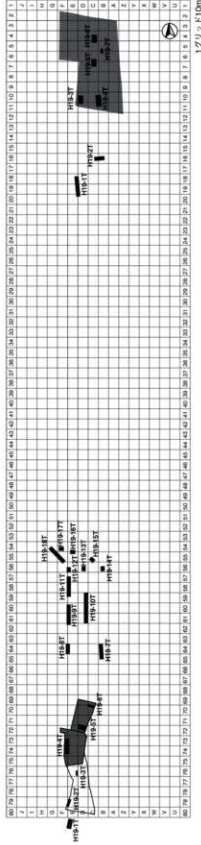
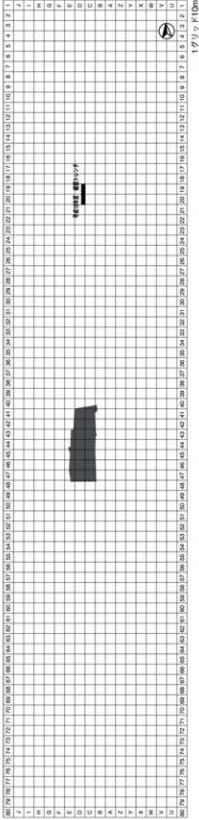
B～E-15～18区 III層調査
B～F-11～13区 II層調査
16日: 空撮 株式会社ふじた

3月

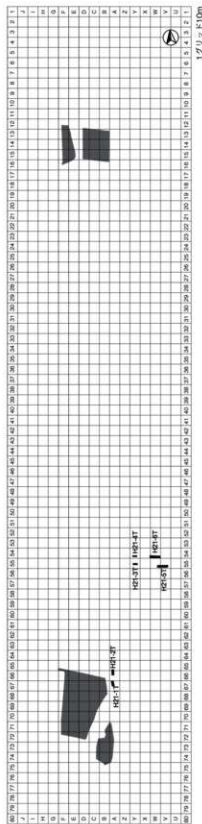
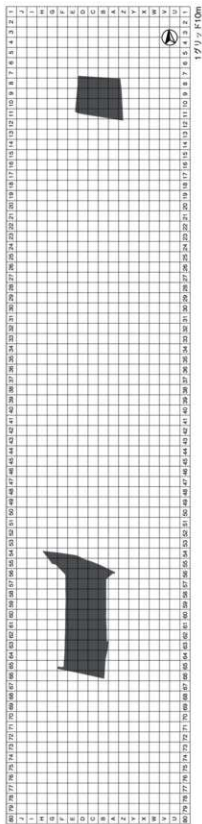
B～F-11～13区 II層調査
国道270号(宮崎バイパス)改築工事に伴う発掘調査
終了。ただし、低地・低湿地は湧水の影響及び安全対策



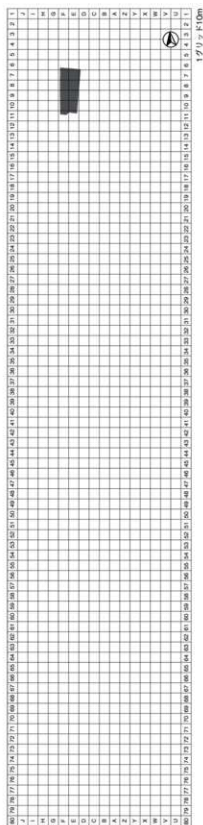
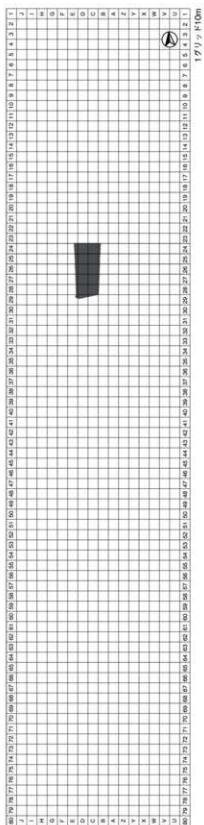
第 1 图 副塔区全体范围



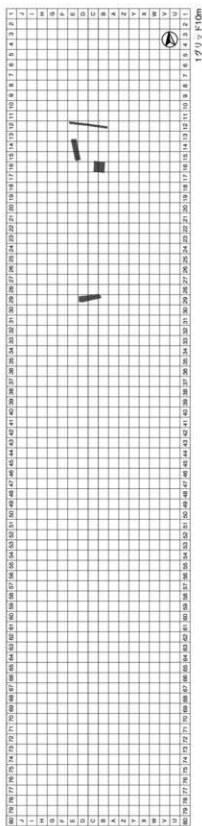
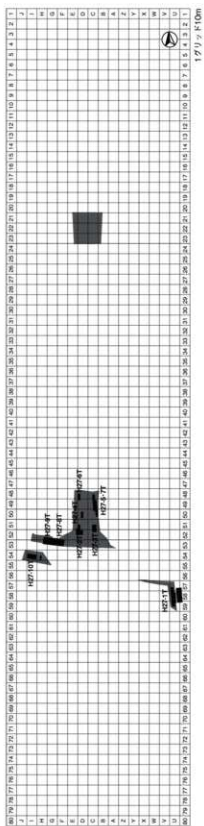
第2圖 平成18・19年度調査範囲



第3圖 平成20・21年度調査範囲

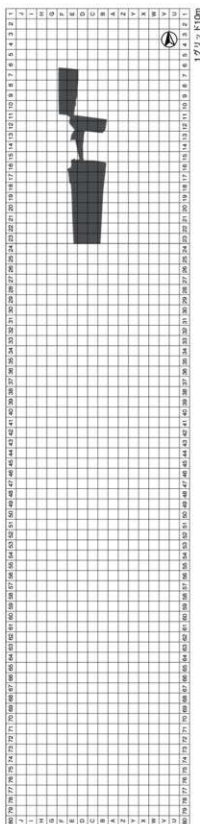


第4回 平成25・26年度観音稲田



第5圖 平成27・28年度調査範囲

等で調査区内と外の境には、1～2m安全帯を残した。



第6図 平成29年度調査範囲

第3節 整理・報告書作成

第1・第2節と同様に本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成24年度・平成26年度・平成30年度・令和元（平成31）年度にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

整理・報告書作成作業に関する調査体制及び作業経過は以下のとおりである。ここでは低地・低湿地部の作業も合わせて記載する。

1 平成24年度 整理作業

(1) 作成体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所	長 寺田 仁志
調査企画	次 長 井ノ上秀文
	次 長 兼 総 務 課 長 新小田 穰
	調 査 課 長 堂込 秀人
	第 二 調 査 係 長 大久保浩二
調査担当	文 化 財 主 事 西園 勝彦
	文 化 財 主 事 益山 郁恵
	(3月～ 相美 郁恵)
事務担当	主 幹 兼 総 務 係 長 大園 祥子
	主 査 池之上勝太

(2) 整理作業の経過

平成24年度の整理作業は、平成18～21年度の遺物の水洗い、注記、土器接合、土器・石器・木器の分類、石器の実測を行った。

- 4 月 図面整理、遺物水洗い
- 5～8月 図面整理、遺物水洗い、遺物注記、土器接合、木器分類
- 9 月 図面整理、遺物注記、石器接合・実測、土器接合、木器分類
- 10 月 図面整理、遺物注記、石器接合・実測、土器接合
- 11 月 図面整理、石器接合・実測、土器接合、石器実測委託、自然科学分析委託
- 12 月 図面整理、石器接合・実測、土器接合
- 1・2月 図面整理、石器接合・実測、土器接合、木器点検
- 3 月 図面整理、石器接合・実測、土器接合、収納

2 平成26年度 整理作業

(1) 作成体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課

調査統括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター
所	長 井ノ上秀文
調査企画	次長兼総務課長 中島 治
調査	調査課長 前迫 亮一
第二調査課	係長 今村 敏照
調査担当	文化財主事 尾川 満
文化財研究員	西野 元勝
事務担当	主幹兼総務係長 有馬 博文
主	査 池之上勝太

(2) 整理作業の経過

平成26年度整理作業は、平成25年度の遺物の水洗い、注記、土器接合、土器・石器・木器分類、石器の実測を行った。

4～7月 遺物水洗い、遺物注記、土器接合

8月 遺物注記、土器接合、遺物分類、木器選別

11・12月 土器接合、遺物分類

1月 土器接合、遺物分類、土器実測

2・3月 遺物実測

※ 平成27年度に、公益財団法人鹿兒島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(社) 明啓文化財専門員の助言・協力のもと、平成18～21年度の発掘調査の図面・遺物等のデータ整理を行った。

3 平成30年度 整理作業

(1) 作成体制

事業主体	鹿兒島県土木部道路建設課
調査主体	鹿兒島県教育委員会
企画・調整	鹿兒島県教育庁文化財課
調査統括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター
所	長 堂込 秀人
調査企画	次長兼調査課長 大久保浩二
第二調査係	長 宗岡 克英
調査担当	文化財主事 湯場崎辰巳
文化財研究員	鯉島えりな
事務担当	総務係長 草水美穂子
整理指導	文化庁文化財部美術学芸課 主任文化財調査官 原田 昌幸 京都橋大学文学部教授 一瀬 和夫

(2) 整理作業の経過

平成30年度整理作業は、平成26～29年度の遺物の水洗い、注記や台地部の遺構・遺物の選別・分類、遺物の実測を中心に行った。

4月 遺物水洗い、遺物注記、図面整理

5月 遺物水洗い、遺物注記

6・7月 遺物水洗い、遺物注記、土器接合

8月 遺物注記、土器接合、遺物分類、木器選別

9月 土器実測、遺物分類、遺物注記

10・11月 土器実測、遺物注記、石器分類

12月 土器実測、拓本、遺物注記

1月 土器実測、拓本、遺物分類、石器実測

2月 土器実測、拓本、石器実測、台帳作成

3月 文章作成、レイアウト

※ 石器実測委託 9月

自然科学分析委託 10月

4 令和元(平成31)年度 整理・報告書作成作業 (1) 作成体制

事業主体	鹿兒島県土木部道路建設課
調査主体	鹿兒島県教育委員会
企画・調整	鹿兒島県教育庁文化財課
調査統括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター
所	長 前迫 亮一
調査企画	次長兼総務課長 野間口 誠
調査	調査課長 中村 和美
第一調査係	長 宗岡 克英
調査担当	文化財主事 大保 秀樹
文化財主事	湯場崎辰巳
文化財研究員	鯉島えりな
事務担当	主幹兼総務係長 草水美穂子
整理指導	天理大学客員教授 深澤 芳樹 (公財) 広島県教育事業推進事務局 埋蔵文化財調査室 伊藤 実 愛媛大学准教授 柴田 昌晃
報告書作成指導委員会	令和元年11月26日ほか4回 中村調査課長ほか6名
報告書作成検討委員会	令和元年11月27日ほか4回 前迫所長ほか7名

(2) 整理作業の経過

令和元(平成31)年度整理作業は、台地部の遺物の実測・トレース、報告書作成に係る写真撮影、レイアウト作成等の作業や低地・低湿地部の図面整理や遺物の接合・復元、遺物分類、実測を中心に行った。

4月 土器実測、拓本、土器接合、遺物分類

5月 土器実測、拓本、土器接合、遺物分類

6・7月 トレース、レイアウト、図面整理、接合・分類

8月 トレース、レイアウト、写真撮影、図面整理、接合・分類

9月 トレース、図面整理、接合・分類

10月 レイアウト、写真撮影、図面整理、遺物分類

11月 レイアウト、文章作成、図面整理、遺物分類、土器復元

12・1月 校正、遺物分類、土器実測、土器復元

2月 収納作業、遺物分類、土器実測、土器復元

3月 遺物整理

※ 石器実測委託 7月、9月、10月

木器実測・保存処理委託 9月

自然科学分析委託 7月、9月、10月

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中津野遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町に所在する。同市は薩摩半島の南西部、東経130°20′、北緯31°27′に位置し、北は鹿児島市・日置市、東は枕崎市・南九州市に隣接し、南側及び西側は東シナ海に面している。平成17年11月に加世田市、笠沙町、大浦町、金峰町、坊津町の1市4町が合併し、人口約3.4万人（2018年）である。面積は283.59㎢で鹿児島県全体の3.1%を占め、面積の58.9%が森林で山々が連なり、平野は薩摩半島有数の河川である万之瀬川をはじめとする中小河川の流域に沿って開けている。海岸線の西北部は砂丘地帯が発達している。南西部は変化に富んだリアス式海岸が続いており、国の名勝「坊津」及び坊野開県立自然公園の指定を受けた景勝地を有している。気象は温暖多雨な気候で、年平均気温20.7℃、年間平均降水量2,155㎜である。

遺跡の立地する金峰町は同市の北部に位置する。西は万之瀬川河口から白砂青松の吹上浜を介して東シナ海に面している。東は森林地帯で金峰山（636m）を主峰とする山々が南北に走り小峯の起伏が多く、わずかに耕地が点在している。金峰山系は、主に白亜系の砂岩・泥岩から構成される四万十層群であり、各所で第三紀花崗岩閃緑岩が貫入し、金峰山西麓に露出している。南には南薩平野と呼ばれる沖積平野が広がり、万之瀬川が流れ、比較的緩やかな丘陵地帯が続く地形である。北には二級河川万之瀬川水系堀川支流の境川が流れている。堀川は長谷川とともに、金峰町域を貫流し、鹿児島市鶴山付近を源流とする万之瀬川と合流し、東シナ海に注いでいる。その流域を含めた流域一帯は超早稲米「金峰コシヒカリ」で有名な水田地帯になっている。本遺跡から北東方向に約7kmの位置にある金峰山は、町名の由来ともなっており、薩摩半島中央部における最高峰で、古来から信仰の対象になっている。また、金峰山から南西方向に約22km先にある標高591mの円錐状の野間岳とともに、海上交通の重要な指標とされてきた。

本遺跡は、金峰山地中岳の北西麓から伸びる標高約30mの舌状を呈する中津野台地上と境川の河川氾濫により形成された沖積地に位置する。遺跡北西側には平野が一望でき、かつては一部に入り江が展開していたことが推測できる。

平野には中津野台地の他にも舌状台地が多く立地しており、各時代の遺跡が多く存在する。境川を挟んだ中津野台地北側には尾下台地があり、松木遺跡や山原遺跡が所在する。また、中津野台地西側には、宮崎台地があり、下堀遺跡や上焼田A・B遺跡が所在する。

第2節 歴史的環境

南さつま市金峰町には、約130か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しており、鹿児島県の考古学研究上欠かすことのできない遺跡が多数存在する。さらに、万之瀬川の中小河川改修事業に伴う発掘調査によって、特幹松遺跡や芝原遺跡など、縄文時代から近世にかけての大規模な複合遺跡が複数発見されている。また、農業開発総合センター遺跡群や山原遺跡からは旧石器時代の遺構・遺物も発見され、この地域の先史・古代の様相がさらに明らかになりつつある。ここでは、周辺の地域とあわせて主な遺跡を時代別に概観していく。

1 旧石器時代

南さつま市の東に広がる山地に位置する祝原遺跡（加世田）からナイフ形石器と細石器が出土し、周辺には細石器とともに縄群1基が検出された平田尻遺跡（加世田）がある。市南部に位置する春ノ山遺跡（加世田）からは、ナイフ形石器や台形石器などの遺物とともに縄群9基が検出されている。山原遺跡（金峰町）では、赤色頁岩製の厚手の薄片を素材とした細石刃1点と細石刃2点が出土している。

2 縄文時代

草創期

椿ノ原遺跡（加世田）は、万之瀬川と加世田川の合流地点西側にある標高約30mの独立台地上に立地している。連穴土坑（煙道付き炉穴）や集石などの各種の遺構とともに多くの隆帯土器や石器が発見されている。中でも、「椿ノ原型石斧」と呼称される丸ノミ形石斧は、刃部の形状から木材加工に利用されたと考えられており、縄文時代草創期における南九州の先進性を示す遺跡として、平成9年に国指定史跡に指定され、遺跡の一部は保存されている。志風頭遺跡（加世田）でも連穴土坑とともに隆帯土器や石鏃・石皿などが発見されている。

早期

椿ノ原遺跡では、昭和52（1997）年の発掘調査で出土した土器の中で6類と分類された資料は、早期前葉の土器型式を設定する上で重要な資料となった。志風頭遺跡では、全体を研磨して形作った石鏃が出土している。全磨製の石鏃は一般的には弥生時代に見られる遺物であり、縄文時代早期前半のものはきわめて珍しい。小中原遺跡（金峰町）では、前平式土器の円筒形・角筒形土器がまとめて出土している。特に、角筒形に関しては、上半分は角筒形・下半分は円筒形を呈しており、角筒形の出現を考える上で重要な資料となっている。

前期

阿多貝塚(金峰町)、上焼田遺跡(金峰町)、上水流遺跡(金峰町)がある。阿多貝塚から出土した資料の一部は「阿多V類土器」(西津津式土器)と称され、九州の縄文時代前期土器研究に欠かすことのできない資料である。上焼田遺跡では、球状耳飾が出土している。上水流遺跡からは管状土器が単独で出土しており、石器組成も含めて良好な資料となっている。

中期

上水流遺跡から大型の集石と春日式土器が出土しており、河川隣接地での生活のあり方を考える上で極めて重要な遺跡である。また、前期末から中期初頭とされる深浦式土器も多量に出土している。

後期

芝原遺跡(金峰町)では、多量の指宿式土器や南福寺式土器と鋸歯状尖頭器や石鋸など、特徴的な石器が出土している。また、本県では類例のない足形を呈する土製品が出土しており、隣接する渡畑遺跡(金峰町)出土の土製品と接合したことが注目される。

晩期

上加世田式土器の標式遺跡である上加世田遺跡(加世田)がある。この遺跡からは、大型の土坑、祭祀をうかがわせる土偶や軽石製土偶・石棒や勾玉・管玉・小玉などの垂飾品など、様々な遺構・遺物が発見されている。なお、上加世田式土器については、縄文時代後期に位置づける説もある。下原遺跡(金峰町)では、縄文時代晩期終末から弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って朝鮮半島系の無文土器・粉痕土器・石包丁が出土している。干河原遺跡(加世田)では、黒川式土器干河原段階と呼ばれる土器が出土している。

3 弥生時代

弥生時代から古墳時代にかけて、市内では多くの遺跡が発見されている。高橋貝塚(金峰町)は、弥生時代前期を主体とする貝塚で、万之瀬川の支流、堀川右岸の、標高11mの洪積土砂丘上にある。昭和37(1962)年・38(1963)年に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代晩期の夜臼式土器と高橋I式土器の共存関係が確認されたことや、南海産のゴホウラ貝を素材とした貝輪や南海産貝が出土したことなど、学史的に重要な遺跡である。平成18(2006)年には、鹿児島国際大学が隣接地の高橋遺跡発掘調査を実施し、弥生時代中期の可能性の高い木棺墓が3基報告されている。また、下小路遺跡(金峰町)は、弥生時代中期の須玖式土器を用いた甕棺が検出された埋葬遺跡で、棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されている。松木藪遺跡(金峰町)では弥生時代後期の環濠の可能性のあるV字形の大溝が松木藪式土器を伴って発見されている。中

津野遺跡は、昭和25(1950)年に河口貞徳氏によって調査されている。本報告書調査範囲から東に約700m、標高30mの台地上の中津野集落の県道20号に沿った個人宅の敷地の調査を行っている。その際に、床面が3段構造になる竪穴住居跡が発見され、最下段である3段目からは完形品が40個体出土している。また、中津野式土器の標式遺跡でもある。中津野式土器は、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として認識されている。

4 古墳時代

古墳時代の遺跡には、小湊(加世田)にある奥山古墳(六堂会古墳)が特筆される。この遺跡は、昭和6(1931)年に発見され、石棺の内部には赤色顔料が塗られており、ガラス玉や長さ180cmの鉄剣、刀子が副葬されていた。平成17(2006)年に実施された鹿児島大学の再調査の結果、周溝の一部と考えられる遺構が発見され、4世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。白糸原遺跡(金峰町)では、竪穴住居跡が19軒検出され、辻堂原式土器から葎貫式土器にかけての集落とされている。上水流遺跡(金峰町)からは竪穴住居跡が11軒検出されている。遺構内から初期須恵器の出土がみられた。また、中津野遺跡に隣接する南下遺跡では、2条の杭列に伴い、木製品(二又鎌・三又鎌・ナスビ形)が出土している。「ナスビ形」の鋸については、着柄した形態で出土し、古墳時代の貴重な資料が得られている。

5 古代

小中原遺跡(金峰町)では多くの掘立柱建物跡と「阿多」という文字がへら書きされた土師器などが発見されている。これらのことから阿多郡衙の可能性が考えられている。山野原遺跡(金峰町)でも、多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。また、祭祀遺構や土師器焼成遺構の可能性が考えられる遺構が発見されており、在地豪族に関わる施設であった可能性が考えられている。加治屋遺跡(加世田)では、土師甕を用いた埋設遺構と竪穴住居跡とされる遺構が確認されている。芝原遺跡(金峰町)、特林松遺跡(金峰町)、上水流遺跡(金峰町)でも黒書土器をはじめ多数の遺物が発見されている。中岳山麓古窯跡群(金峰町)は、9世紀(平安時代)ごろの須恵器窯跡群で、須恵器窯跡としては日本列島でもっとも南に位置している。この窯で製作された須恵器は、南西諸島まで分布していることがわかっており、当時の地方窯としては広域的で、古代日本の国の境界域を横断して流通していた可能性が指摘されており、熊本県荒尾市荒尾窯跡群の製品との類似性が高いことから、人的・物的な交流があったと考えられている。近年では、平成26(2014)年・平成28(2016)年・平成29(2017)年・平成30(2018)年度に中村直子氏(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)が中心に調査を行っている。

6 中世

中世には、ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国において、阿多郡は唯一、大宰府領であった。その後13世紀前半には、金峰町が属する阿多郡は阿多氏・鯨島氏などによる支配を受け、加世田が属する加世田別府は別符氏・塩田氏などによって支配を受けることとなる。城館跡・山城跡も多く所在しており、上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻崎城跡などで発掘調査が行われている。白糸原遺跡（金峰町）では、中世末から近世の土坑墓が24基検出された。この中からは、南海産の夜光貝が出土している。加えて、竪穴建物跡や双鱼文青磁なども発見されている。

古代から中世においては、万之瀬川流域の遺跡群が特に注目される。全国各地の窯で焼かれた陶器類や、中国からの輸入陶磁器類などが多量に出土した持鉢松遺跡や芝原遺跡を中心に、広範な交流の拠点であった遺跡群であり、万之瀬川下流域の中世的景観を明らかにする貴重な資料である。

7 近世

近世においては、前述の上水流遺跡の大溝から16・17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼（苗代川系）等が、福建・広東及びベトナム産の甕・密類といった貯蔵器とともに出土している。また、万之瀬川河口付近を含む吹上浜海岸では、東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている（橋口1999）。外城制度（天明4〔1784〕年、外城から郷に改称）に関しては、行政の中心である地頭仮屋が阿多と田布施の2か所、武士の居住区である籠集落はその周辺にあった。渡畑周辺に点在した阿多籠集落は、享保13（1728）年の新田川掘削工事の完成後に台地上に移転している。新田開発のため、万之瀬川上流の南九州市川辺町腰ヶ原から宮崎の台地に16kmに及ぶ水路を引く難工であった。この時の工事監督は、後の木曾川の宝曆治水で奉行を務めている。商人の居住区である野町は、金峰地域では阿多公民館付近と池辺の2か所にあった。また、藩の浄土真宗禁制に対し、かくれ念仏講により信仰が続けられた。

8 近現代

薩摩半島を縦貫する近世街道の「伊作筋」と旧南薩鉄道が、渡畑遺跡（金峰町）で現在の国道270号線と併走していた。「伊作筋」は加世田の村原渡口で渡船し、渡畑を斜行し上宮寺前、伊作峠、谷山を経由して鹿児島と結んでいた。南薩鉄道は枕崎市から日置市伊集院を経由し、国鉄線と繋がり鹿児島市と連絡していた。大正3（1914）年に始まり、昭和58（1983）年の豪雨災害の影響を受けて翌年廃線となっている。第二次世界大戦では、加世田の唐仁原・高橋に、陸軍飛行戦隊知覧分遣隊

の万世基地がおかれ、戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となっている。

【引用・参考文献】

- 橋口 匡 1999 「薩摩出土の滑石磁器」『貿易陶磁研究』19号
日本貿易陶磁学会
- 鹿児島大学総合研究博物館 2009 「薩摩加世田奥山古墳の研究」
『鹿児島大学総合研究博物館研究報告』No. 4
- 鹿児島国際大学 2008 『鹿児島県 高橋貝塚の学術調査 - 薩摩半島西部に所在する弥生時代の墓地』鹿児島国際大学考古学研究室
鹿児島県教育委員会
- 1977 『指宿・横峯・中世・上境田遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 1991 『小中原遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書(57)
- 2006 『先史古代の鹿児島』資料編
- 鹿児島県立埋蔵文化財調査センター
- 2007 『上水尻遺跡1』埋蔵文化財発掘調査報告書(113)
- 2007 『持鉢松遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書(120)
- 2008 『上水尻遺跡2』埋蔵文化財発掘調査報告書(121)
- 2009 『上水尻遺跡3』埋蔵文化財発掘調査報告書(136)
- 2010 『芝原遺跡1』埋蔵文化財発掘調査報告書(149)
- 2010 『上水尻遺跡4』埋蔵文化財発掘調査報告書(150)
- 2011 『南下遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書(157)
- 加世田市教育委員会
- 1985 『上加世田遺跡1』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 1987 『上加世田遺跡2』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 1995 『平田原遺跡・祝原遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 1995 『千ノ山遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
- 2002 『春ノ山遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)
- 金峰町教育委員会
- 1978 『阿多貝塚』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 1998 『上水流遺跡-第1次調査-』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- 2005 『下堰遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
- 南さつま市教育委員会
- 2015 『上加世田遺跡』南さつま市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 2017 『市内遺跡2』南さつま市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 南さつま市役所 2018 『南さつま市HP』



第7図 中津野遺跡周辺地形分類図 (縮尺任意・鹿児島県1990「鹿児島県の地質」改変)



第8図 上空から見た中津野遺跡周辺地形1974年～1978年頃 (国土画像情報国土交通省より)

第3節 事業路線内遺跡の概要

国道270号線は、鹿児島県枕崎市からいちき串木野市に至る一般国道であり、南さつま市金峰町の一部区間に約4.5kmの宮崎バイパス改築工事を計画した。この計画一体は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、中津野遺跡、小中原遺跡、市園遺跡が所在している。小中原遺跡は平成元年～5年度に、市園遺跡は平成8年度に当時の金峰町教育委員会が発掘調査を実施している。

平成15年度の分布調査の結果、新たに南下遺跡、田布施遺跡の所在が判明した。田布施遺跡については、平成18年1月30日に確認調査を行い事業区域内については遺物包含層が削平されていた。以下、発掘調査を行った4遺跡の概略を記載する。

1 南下遺跡

南さつま市金峰町尾下に所在し、境川付近の低地・低湿地に位置している。境川を挟んで中津野遺跡に隣接している。平成18年度・19年度に中津野遺跡と並行して、約9,100㎡の確認調査及び本調査を行っている。

古墳時代の2条の杭列に伴い、木製品（組み合わせ二又鍬等）が土器と共に出土している。木製農耕具は、基本的には弥生時代後期～古墳時代における木製農耕具の発達・変遷過程の中に位置づけられ、在地色の強い三叉

鍬も出土している。また、「ナスビ形」鍬については、着柄した形態で出土しており、本県で初めての例となった。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(157)

2 中津野遺跡

本報告書

3 小中原遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在する。中岳から伸びる舌状台地に位置する。平成11年度4月～6月、平成12年度4・5月、平成16年度6月の3次にわたり約6,000㎡の調査を行っている。

調査の結果、縄文時代晩期の土坑5基と土器や石器、古墳時代の竪穴住居跡1軒と遺物、古代の溝状遺構1条、掘立柱建物跡9軒、竪穴建物跡1基、焼土5基、土坑3基と共に土師器、須恵器が発見されている。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(142)

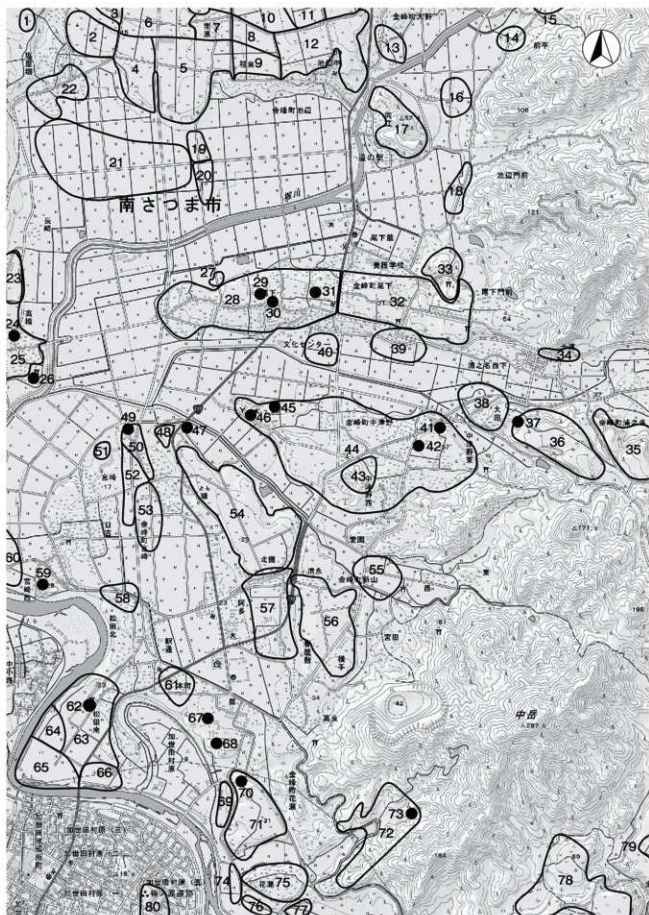
4 市園遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在する。中岳から伸びる舌状台地に位置する。平成10年10月に約500㎡の調査を行い、古代から中世までの柱穴が発見されている。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(142)



第9図 宮崎バイパス関連遺跡位置図



第10図 周辺遺跡地図 (1:25,000)

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡計画番号	遺跡名	所在地	地種	石室	竪穴	古墳	古代	中世	近世	備考
1	220	260	伊達	南かつま市金峰町大野	畑地		●	●			鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(70)
2	220	251	小瀬	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●			平成11年 遺跡分布調査
3	220	222	成田	南かつま市金峰町大野	畑地	●	●	●			平成11年 遺跡分布調査
4	220	223	地蔵原	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
5	220	261	五郎原	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		平成10年 遺跡分布調査
6	220	262	伊達原	南かつま市金峰町大野	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
7	220	226	大瀬	南かつま市金峰町大野	畑地	●	●	●			平成11年 遺跡分布調査
8	220	228	福地内庭	南かつま市金峰町大野	畑地		●	●	●		平成10年 遺跡分布調査
9	220	224	塩原	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
10	220	265	福地内庭	南かつま市金峰町大野	畑地	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(112)
11	220	284	加治原	南かつま市金峰町大野	畑地	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(112)
12	220	225	浦口	南かつま市金峰町大野	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
13	220	217	寺下	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
14	220	215	本郷	南かつま市金峰町大野	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
15	220	216	前平	南かつま市金峰町大野	畑地	●	●	●			平成11年 遺跡分布調査
16	220	214	草ノ前	南かつま市金峰町北田	平地	●	●	●			平成11年 遺跡分布調査
17	220	224	草ノ前城跡	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(4)、中世城跡跡
18	220	213	長谷野	南かつま市金峰町北田	平地	●	●	●			平成11年 遺跡分布調査
19	220	266	福地原下	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		平成10年 遺跡分布調査
20	220	269	島下	南かつま市金峰町高橋	畑地		●	●	●		平成10年 遺跡分布調査
21	220	219	高野	南かつま市金峰町高橋	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
22	220	220	前ノ上	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
23	220	228	早田城跡	南かつま市金峰町高橋	平地		●	●	●		「鹿児島考古学」11号
24	220	241	下ノ島	南かつま市金峰町高橋	畑地		●	●	●		「鹿児島考古学」11号
25	220	225	高橋	南かつま市金峰町高橋	平地		●	●	●		「鹿児島考古学」11号
26	220	213	高橋貝塚	南かつま市金峰町高橋	畑地		●	●	●		「九州考古学」18号
27	220	268	磯田	南かつま市金峰町下野	畑地		●	●			
28	220	215	下野	南かつま市金峰町下野	畑地	●	●	●			
29	220	216	松ノ木	南かつま市金峰町下野	畑地		●	●	●		「鹿児島考古学」第14号、「鹿児島大学学報」第29号
30	220	211	山崎原	南かつま市金峰町下野	畑地	●	●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(51)(7)
31	220	226	島芝原	南かつま市金峰町下野	畑地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
32	220	251	伊達原	南かつま市金峰町下野	畑地		●	●	●		平成2年 発掘調査
33	220	225	島ノ岡城跡	南かつま市金峰町下野	畑地		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(4)、中世城跡跡
34	220	212	藤原田	南かつま市金峰町下野	畑地		●	●	●		平成10年 遺跡分布調査
35	220	261	内城	南かつま市金峰町下野	畑地	●	●	●	●		平成6年 発掘調査
36	220	227	藤原田城跡	南かつま市金峰町下野	畑地	●	●	●	●		南かつま市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)、古墳、城跡跡
37	220	220	上原	南かつま市金峰町下野	畑地	●	●	●	●		
38	220	211	長谷野	南かつま市金峰町中野	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
39	220	217	藤ノ下	南かつま市金峰町下野	平地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(17)
40	220	229	下野	南かつま市金峰町下野	畑地		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(157)
41	220	242	三浦城跡	南かつま市金峰町中野	畑地		●	●	●		
42	220	217	藤ノ下	南かつま市金峰町中野	平地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
43	220	220	中津野城跡	南かつま市金峰町中野	畑地		●	●	●		本報告書「鹿児島県考古学学芸紀要」2号
44	220	218	中津野	南かつま市金峰町中野	畑地	●	●	●	●		本報告書「鹿児島県考古学学芸紀要」2号
45	220	241	早瀬	南かつま市金峰町中野	畑地		●	●	●		平成10年 発掘調査
46	220	222	中津野下瀬	南かつま市金峰町中野	畑地	●	●	●			
47	220	228	長野城跡	南かつま市金峰町中野	畑地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(1)
48	220	205	阿多貝塚	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●			「鹿児島考古学」第10号
49	220	243	阿多貝塚	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●			鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(15)
50	220	210	上原田	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●			鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
51	220	209	天瀬原	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
52	220	208	下瀬	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●			鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
53	220	262	上原立	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		
54	220	212	島芝原	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		
55	220	210	三石田	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
56	220	209	立原	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		平成11年 遺跡分布調査
57	220	240	中ノ原	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(37)
58	220	208	下瀬	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(36)
59	220	227	大瀬	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		
60	220	264	上ノ原	南かつま市金峰町北田	平地		●	●	●		
61	220	271	市原	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		
62	220	234	上宮寺跡	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		筑前一宮院の系年
63	220	248	松原南	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		
64	220	227	持輪松	南かつま市金峰町北田	平地		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)
65	220	277	渡瀬	南かつま市金峰町北田	平地		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(151)(152)
66	220	278	芝原	南かつま市金峰町北田	平地		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(148)(156)(170)(178)
67	220	226	阿多城跡	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
68	220	223	藤ノ下城跡	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		新多分組系年
69	220	223	大瀬	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		阿多城の出現の可能性
70	220	222	中津野	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
71	220	245	花崎今瀬	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		
72	220	244	中山山鹿古志跡群	南かつま市金峰町北田	山地		●	●	●		平成27・28・29年度 鹿児島大学発掘調査報告書(14)
73	220	223	尻平古瀬跡	南かつま市金峰町北田	山地		●	●	●		中山山鹿古志跡群の研究(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター-2015-3)
74	220	296	森山	南かつま市金峰町北田	平地	●	●	●	●		平成12年 発掘調査
75	220	246	島下	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		
76	220	291	上木立	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(119)(120)(136)(138)
77	220	294	上木立	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
78	220	295	早瀬	南かつま市金峰町北田	畑地	●	●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
79	220	205	白野原	南かつま市金峰町北田	畑地		●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
80	220	13	柳ノ原	南かつま市加治原町	畑地	●	●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(11)(6)(15)(17)(20)

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記載する。なお、台地部の調査方法と層序を記す。低地・低湿地部の調査方法と層序については、次年度以降刊行(中津野遺跡・低地・低湿地部編)の報告書に記載予定である。

1 発掘調査の方法

中津野遺跡台地部の調査は、平成18・19・20・21・27年度に確認調査及び本調査を実施した。調査対象表面積約14,800㎡である。

本遺跡の調査区割り(グリット)は、平成18年度の確認調査及び本調査において、工事用基準杭(センター杭)Na154～Na185を結ぶ直線を基に10×10mの調査区割り(グリット)を設定した(第11図参照)。

調査範囲が長大で、調査期間が長期に渡ったため、年度ごとに座標値の原点が違う事態が発生した。座標値の整合性をとるために、台地部はU・T-60・61区境を原点(0,0)として、縦軸をX、横軸をYとし整理作業を行った。なお、Uから東は一座標、60から南は一座標として観察表等に記載している。センター杭及び座標値原点(0,0)の位置は、第11図に記しているので参照して欲しい。

発掘調査は、基本的に重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき、人力にて遺物包含層の掘り下げを行った。無遺物層や火山灰一次堆積層は、重機を使い慎重に掘り下げた。遺構は移植ゴテ等の遺構調査に適した道具を使用し、実測、写真撮影等を行い、遺物は平板とトータルステーションを使用して取り上げを行った。

各年度の発掘調査方法及び概要は以下のとおりである(詳細は第1章日誌抄等に記載)。

平成18年度

B～E-40～47区の本調査と30～40区の確認調査を行った。その結果、事業区域内の30～40区については、調査の必要なしと判断して調査を終了した。B～E-40～47区は、表土を重機で除去したのち、II層からIII a層までを人力にて掘り下げ、調査を行った。II層は調査範囲の一部に存在しているのみであった。その後、調査区の一部III b・III c層を重機で掘削し、IV層(縄文時代早期)とIX層(旧石器時代)の調査を行った。両層とも遺物の出土量は少量で、散漫な出土状況を呈していたため、遺物の広がりやなくなった時点で、調査を終了した。

遺物は平板にて位置とレベルを記録し、小破片はグリットごと一括して取り上げた。

平成19年度

B～G-54～79区の確認調査を行い、全面についての本調査が必要であると判断した。平成19年度は、C～F-69～75区の本調査を行った。

当該グリットの表土を重機で除去したが、ほぼ全面にわたりIII b層まで、削平を受けていた。III b層にて縄文時代後期～中近世までの調査を行った。その後、調査区のIII b・III c層を重機で掘削し、IV層(縄文時代早期)IX層(旧石器時代)の調査を行った。両時期とも遺物の出土量は少量で、散漫な出土状況を呈していたため、遺物の広がりやなくなった時点で、調査を終了した。遺物は平板にて位置とレベルを記録し、小破片はグリットごと一括して取り上げた。D～F-72～75区については、X層状上面にて地形測量を行った。

なお、事業区域内の75～80区(調査区南端部)は確認調査の結果、調査の必要はないと判断した。それ以外の58～70区については、次年度以降の調査とした。

平成20年度

平成19年度の確認調査の結果を受け、A～H-54～66区の本調査を行った。調査区を6つに区分して、一調査区ごとに調査を行った。54～60区付近は、中津野遺跡の台地部の縁辺部にあたる場所である。

各調査区の表土を重機で除去したあと、II層からIII a層までを人力にて掘り下げ、調査を行った。その後、調査区のIII b・III c層を重機で掘削し、IV層(縄文時代早期)とIX層(旧石器時代)の調査を行った。遺物の出土量は少量で、散漫な出土状況を呈していたため、遺物の広がりやなくなった時点で、調査を終了した。遺物は平板にて位置とレベルを記録し、小破片はグリットごと一括して取り上げた。

平成21年度

平成19年度と平成20年度調査の間であるB～F-66～72区の本調査とV～Y-54・55区の確認調査を行った。

B～F-66～72区の表土を重機で除去したあと、II層からIII a層までを人力にて掘り下げ、調査を行った。特に、E・F-66～72区はIII層の残存が良好であり、III b層上面で多数の遺構が検出できた。遺構調査後、III b層上面にて地形測量を行った。その後、調査区の一部III b・III c層を重機で掘削し、IV層(縄文時代早期)とIX層(旧石器時代)の調査を行った。両時期とも、遺物が確認されなかったため、調査を終了した。V～Y-54・55区の確認調査の結果、遺物が確認できたので、次年度以降に調査を行うこととした。

遺物は平板にて位置とレベルを記録し、小破片はグリットごと一括して取り上げた。

平成27年度

4つの調査地点に分けて確認調査及び本調査を行った。

A地点（U～X-56～59区）・B地点（G～J-54・55区）・C地点（A～I-51～53区）・D地点（B～E-48～50区）とした。

A地点は、確認調査の結果、遺物が確認されたため本調査を行った。表土を重機で除去したのち、Ⅱ層からⅢa層までを人力にて掘り下げ、調査を行った。Ⅲa層上面で柱穴を検出し、調査区東側の現道下にも広がり認められたので、土木部道路建設課・文化財課と協議の上、T-56～59区の調査も行った。現道下の部分は、道路建設の際に、Ⅲb層まで削平されていた。

B地点は、確認調査を行った結果、遺物は確認されなかったため調査を終了した。

C地点は、台地の最縁辺部から北側に向かって下る丘陵部である。縁辺部・丘陵部2か所の調査を行った。表土を重機で除去したのち、Ⅱ・Ⅲ層を人力にて調査した。丘陵部は、削平されて平坦面を形成していたことから、B～E-51・52区を中心に調査を行った。

D地点は、丘陵部から低地に向かう緩やか斜面部に位置する。B～E-50区付近は、Ⅶ層付近まで斜面が削平されていた。

各地調査地点では、遺構調査後、Ⅲb層上面にて地形測量を行った。その後、調査区の一部Ⅲb・Ⅲc層を重機で掘削し、Ⅳ層（縄文時代早期）とⅤ層（旧石器時代）の調査を行った。両層とも遺物が確認されなかったため、調査を終了した。遺物はトータルステーションにて位置とレベルを記録し、小破片はグリットごと一括して取り上げた。

2 遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構の認定

検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、調査担当者で検討した上で遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居跡は、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土などから総合的に判断した。溝状遺構は、底面に硬化面を有するもの、硬化面はないが溝状に明らかな掘り込みをもつものとした。土坑及びピットについては、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土などから総合的に判断した。検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが、埋土の色調の違いや時期の違う遺物が混在するものについては、詳細な時期判定ができなかった。また、掘立柱建物跡の時期認定は、埋土の状況や出土遺物の状況を総合的に検討した。なお、発掘調査時の認定を整理作業の際に再度検討して、遺構の認定や時期を変更したものもある。

(2) 遺構の検出方法

遺構の検出及び調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に、黒色土に掘り込まれた遺構埋土が黒色系になることが多い中近世の遺構については、掘り過ぎるものもあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので、調査のあり方を再検討し、今後の調査に生かしていきたい。また、住宅や畑・雑木林があった場所の調査では、攪乱を受けている箇所があり、遺構の検出をはじめ調査が難しかった。この場合、ミニトレンチの設定、攪乱部分の埋土除去等最善の調査方法を調査担当で検討し、遺構の推定ラインも含め残存物の記録保存に努めた。

3 整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

水洗作業の方法は、土器や石器の一部に関しては、ブラシを用いたが、黒曜石や剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は、水洗い終了後順次行った。注記を行う際、薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり、遺跡名を表す記号を「ナカツノ」とした。その後に出土区層、取り上げ番号等が記してある。作業の効率化を図るためにジェットマーカーを用いて注記した遺物もある。

分類・接合作業は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については、土器の胎土や文様等で時期ごとに分別し、接合する方法をとった。

石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため、実測委託を行った。

遺物出土分布図は、平板で取り上げたものをデータとして取り込み、トータルステーションで取り上げたデータを統合し、図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は、実測図や写真等を用いて、発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。

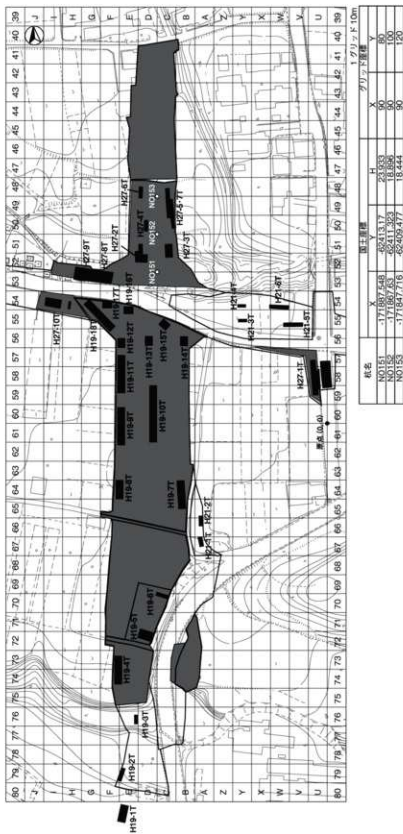
土層断面や遺構の原因データの点検・修正後、デジタルトレースを行った。

平成24年度…水洗い・注記・遺物分類接合

平成26年度…水洗い・注記・遺物分類接合

平成30年度…水洗い・注記・遺物分類接合・図面整理・台帳整理

令和元(平成31)年度…遺物実測・トレース・写真撮影・文章作成・報告書作成



第 11 圖 台地部調査範圍

第2節 層序

本遺跡は、金峰山地中岳の北西麓から伸びる標高約30mの舌状を呈する中津野台地上・河岸段丘と境川の河川氾濫により形成された沖積地に位置する。

基本層序は、地形に沿って台地・河岸段丘と低地・低湿地部の2つに大別した。本報告書は台地部のみの層序を記載する。台地部は54～80区の調査南側、河岸段丘は40～53区の調査北側にあたる。台地部と河岸段丘の基本層序違いは少なかつたため、同一の基本層序とした。

本遺跡台地部は、住宅地や長年の耕作の影響で、削平・盛土・攪乱の影響が見られ、Ⅱ層が大きく削平を受けている部分もあった。包含層や遺構・遺物の年代を把握する手がかりの1つとなる火山等は以下のとおりである。

第2表 中津野遺跡台地部基本層序

層位	色調等	火山灰	時代
表土			
Ⅱ層	黒色土		近世・中世・古代 古墳時代・弥生時代
Ⅲa層	茶褐色～黄褐色火山灰土	アカホヤ火山灰二次堆積土	弥生時代・縄文時代前期～晩期
Ⅲb層	黄褐色火山灰土	アカホヤ火山灰	
Ⅳ層	茶褐色土		縄文時代早期
V層	黒褐色土		
Ⅵ層	混黄色火山灰黒褐色土	藤摩火山灰	
Ⅶ層	明茶褐色土		
Ⅷ層	茶褐色土（砂粒混じる）		
Ⅸ層	茶褐色土		旧石器時代
X層	シラス二次堆積土	シラス	



写真1 E-67～71区西壁土層断面

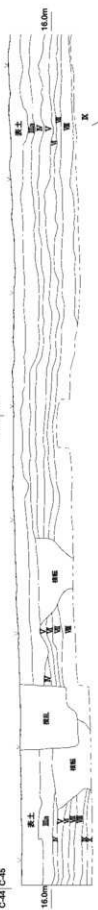


写真2 C～E-48区北壁土層断面

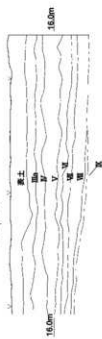
①

C-44 | C-45

C-46 | C-46

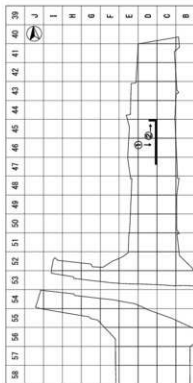


C-46 | C-47



②

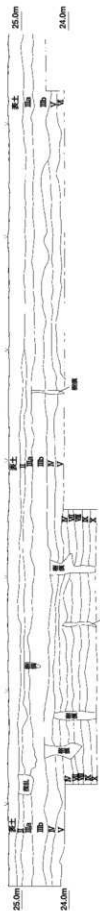
D-45 | C-45



第12図 土層断面図(1) D-45 東側北側

①

C-61 C-61

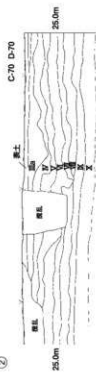


C-60 C-59

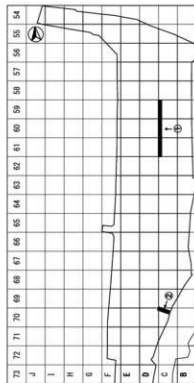


C-58 C-58

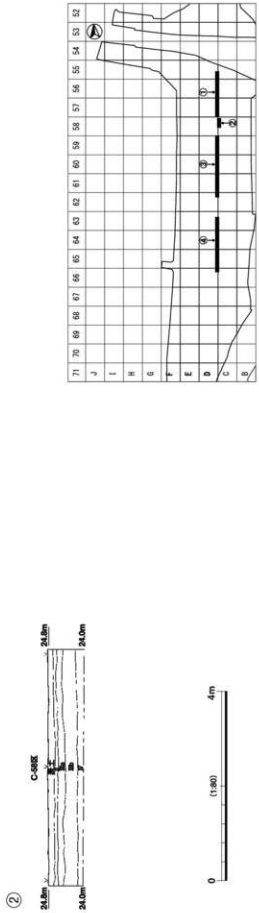
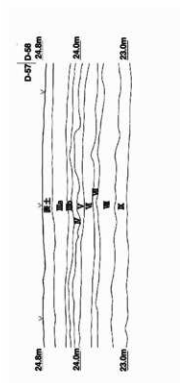
②



C-70 D-70

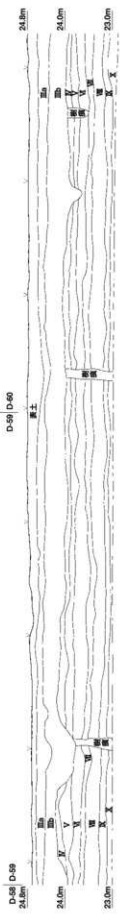


第13图 土质断面图(2) C-58~61区西侧 C-70区东侧



第14图 土层断面图(3) D-55~58区东侧 C-58区西侧

③



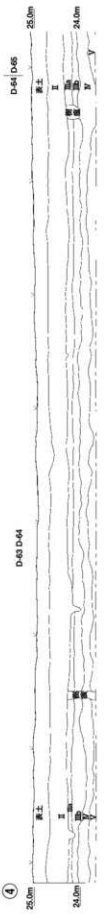
D-60 | D-61



D-61 | D-62

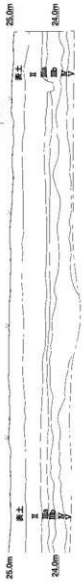


④

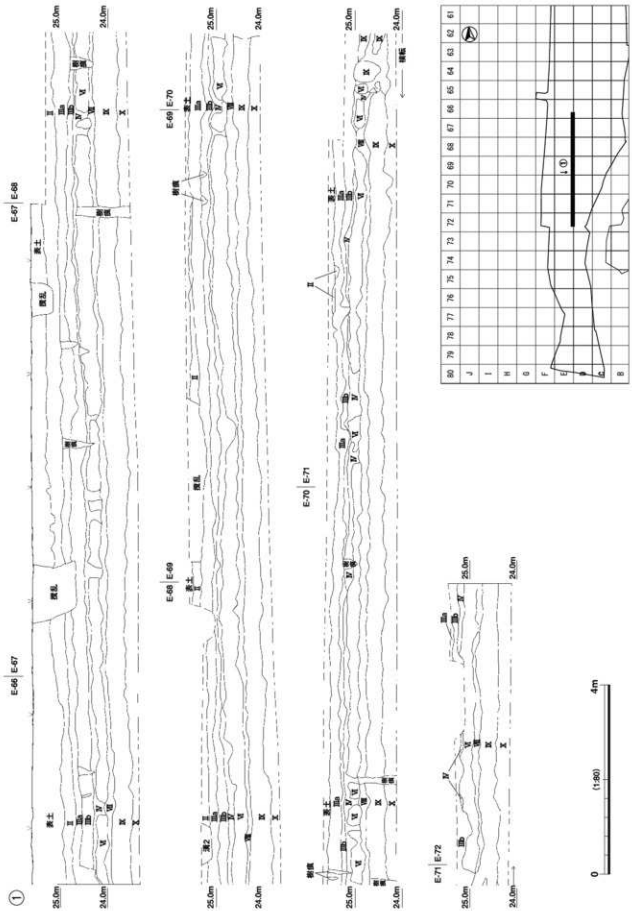


D-63 | D-64

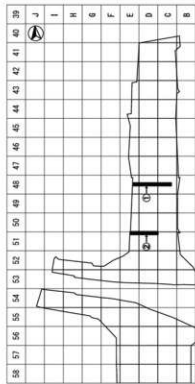
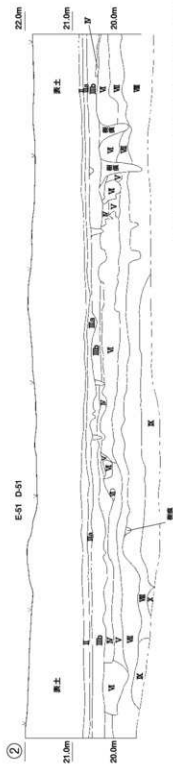
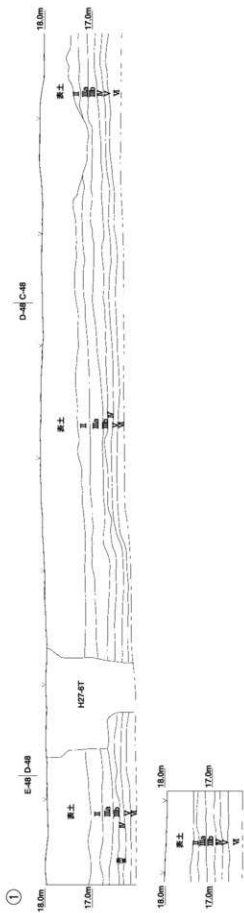
D-65 | D-66



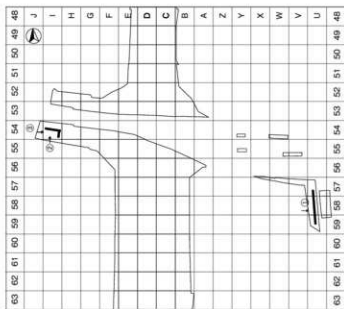
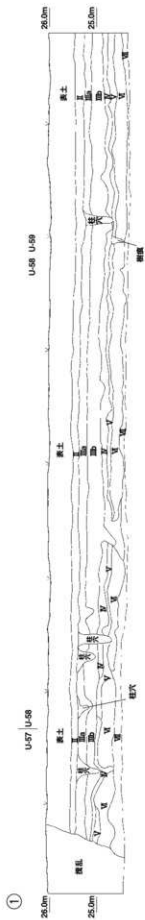
第 15 图 土层断面图 (4) D-59~62 区东侧 D-63~66 区东侧



第 16 図 土層断面図 (B) E-66 ~ 72 区東側



第18图 土层断面图 (7) C~E-48区北制 D~E-51区北制



第19図 土層断面図(8) U-57~59区東側 1-54区北側東側

第4章 調査の成果

第1節 旧石器時代の調査

1 調査概要

旧石器時代の調査は、その遺物包含層としてIX層を対象となった。まず、薩摩火山灰であるVI層を重機で除去した後、順次鋤簾等を用いた人力掘削によって下層からの遺構・遺物の検出に努めた。

IX層にまで調査の及んだ範囲(第21図)は、平成19年度調査のC～F-69～76区と平成20年度調査のA～H-54～66区である。また、平成27年度H・I-54区も調査を行っているが、旧石器時代遺物は確認できなかった。本調査では、標準テフラA層(X層)より上部のIX層を文化層として、ナイフ形石器の保有を特徴とした石器が出土した。一方、VII・VIII層中の出土遺物は皆無であった。

IX層での遺構・遺物の主体は、中津野遺跡台地部北側のB～E-55～60区(第22図)である。X層(AT)上面の標高が約23mで、60区から55区側へ緩やかに傾斜している。遺物は調査区全体に散漫な出土状況であった。遺構はB・C-59区から礫群5基が、E-57・58区から礫群1基ずつが検出されている。その他に、E-55区とD-56区から土坑が1基ずつ検出されている。垂直分布では、礫群と石器類が安定しているIX層(標高23.2m)を生活面として考えられるが、遺物の自然営力による上下移動を考慮し、ここではIX層全体を一括として捉えている。

旧石器時代の全体の石器の出土は合計21点であり、そのうち14点を図示した。その内訳はナイフ形石器2点、

スクレイパー1点、石錐1点、削器1点、石核2点、剥片14点(うち図示7点)である。

次に石材であるが、黒曜石をはじめ多様性がみられる。黒曜石38%、頁岩38%、玉髓9.5%、凝灰岩9.5%、ホルンフェルス5%となる。このうち黒曜石は肉眼観察により、多くが薩摩川内市樋脇町上牛鼻等のものである。

なお、本来X層(AT)上面での地形測量を行うべきであったが行っていない。

2 遺構(第22図)

(1) 礫群

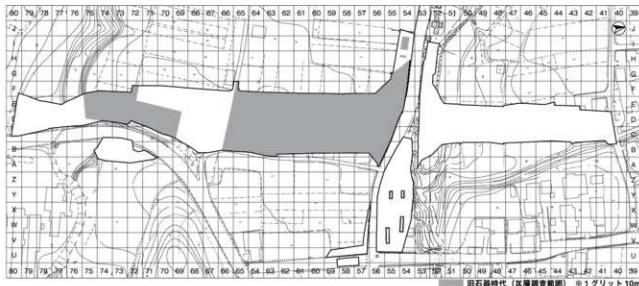
台地部で検出された礫群は7基を数える。平成19年度に1基、平成20年度に6基である。

礫群の認定は、礫がまとまって検出された所を礫群とし、検出面とした。IX層で検出されたものが6基で、IX層下面(X層直上・AT直上)で検出されたものが1基である。

B～E-57～59区で検出されており、そのうち5基はB・C-59区に集中している。現在の地形からB～E-57～59区は台地部の縁辺部に位置しており、これより北側は低地・低湿地部へ続く、緩やかに傾斜する地形である。旧石器時代もおおよそ現在の地形に近いと推定される。

実測については、礫の多い箇所と、1方向または、2方向からの見通し断面に多くの礫が実測できる箇所を主軸に設定した。

構成礫の石材及び比熱の有無についてはすべて肉眼観察による。



第21図 旧石器時代調査範囲

礫群 1号 (第23図)

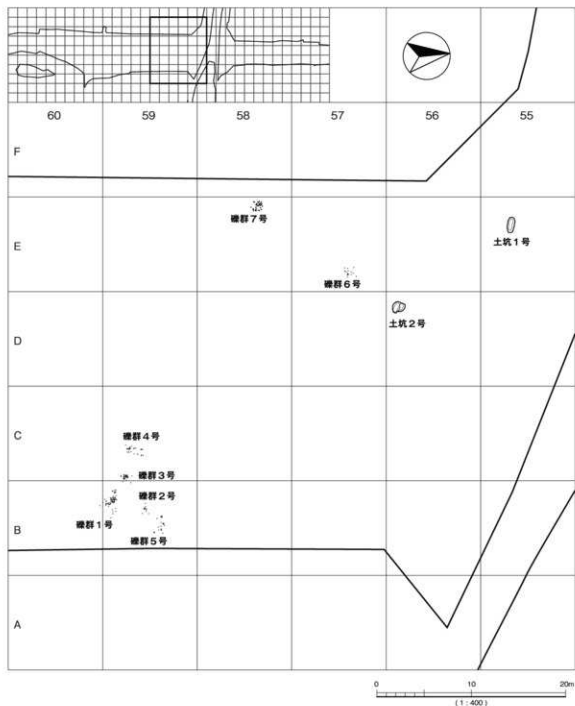
B-59区のIX層で検出された。250×210cmの範囲内に、72個の礫からなる礫群である。比較的 centro部 に礫が集中してはいるが、全体的に構成礫の集中度は低く、掘り込み部はない。礫が集中している部分には、60×43cmの炭化物集中域がある。構成礫は角礫状の砂岩で、50%が被熱の痕跡が残る。礫総重量は15.7kg、礫平均重量218.5g、礫最大重量1,813g、礫最小重量19gである。遺物は出土しなかった。

礫群 2号 (第24図)

B-59区のIX層で検出された。100×110cmの範囲に、12個の礫からなる礫群である。構成礫の集中度は低く、掘り込み部はない。中心部の礫のみが残った状態である。構成礫は亜角礫状の砂岩で、比熱を受けたものは少ない。礫総重量1.65kg、礫平均重量138.3g、礫最大重量350g、礫最小重量15gである。遺物は出土しなかった。

礫群 3号 (第25図)

C-59区のIX層で検出された。110×140cmの範囲に、33個の礫からなる礫群である。中心部の構成礫の集中度



第 22 図 旧石器時代遺構配置図

は高いが、掘り込み部はない。中心部の礫のみが残った状態である。構成礫は角礫状の砂岩で、被熱を受けたものが約36%あり、被熱破砕したものもみられた。礫総重量7.1kg、礫平均重量216.6g、礫最大重量872g、礫最小重量25gである。遺物は出土しなかった。

礫群4号（第26図）

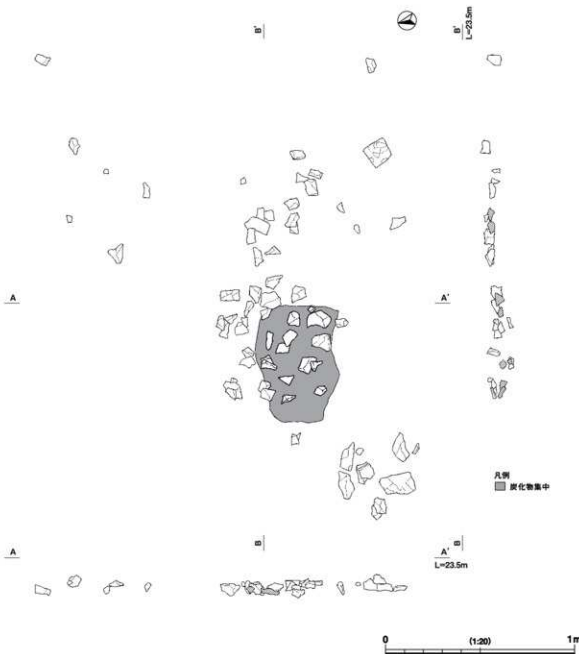
C-59区のIX層で検出された。190×120cmの範囲に、30個の礫からなる礫群である。構成礫の集中度は低く、掘り込み部はない。散礫状に広がっており、中心部は明確でない。構成礫は角礫状の砂岩で、被熱を受けたものはない。礫総重量4.4kg、礫平均重量145.5g、礫最大重量538g、礫最小重量14gである。遺物は出土しなかった。

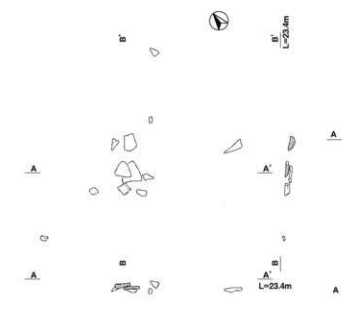
礫群5号（第27図）

B-59区のIX層で検出された。190×120cmの範囲に、22個の礫からなる礫群である。構成礫の集中度は低く、掘り込み部はない。散礫状に広がっており、中心部は明確でない。構成礫は角礫状の砂岩で、被熱を受けたものは少ない。礫総重量2.5kg、礫平均重量113.2g、礫最大重量400g、礫最小重量6gである。遺物は出土しなかった。

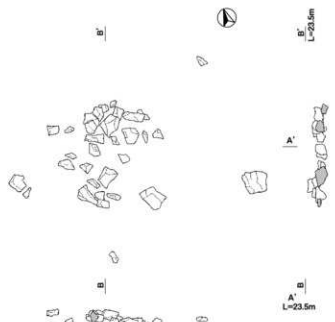
礫群6号（第28図）

E-57区のIX層で検出された。160×110cmの範囲に、17個の礫からなる礫群である。構成礫の集中度は低く、掘り込み部はない。散礫状に広がっており、中心部は明

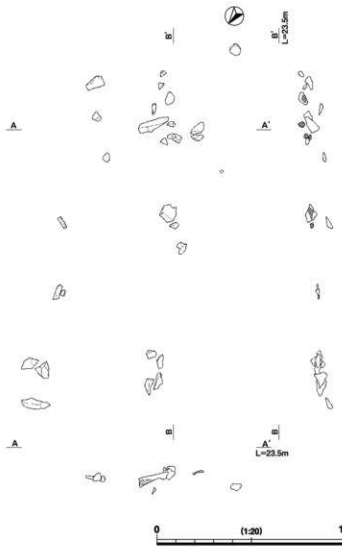




第24図 礫群2号



第25図 礫群3号



第26図 礫群4号

礫でない。構成礫は角礫状の砂岩で、被熱を受け赤色化したものはないが、破砕した礫が多い。礫総重量3.9kg、礫平均重量231.7g、礫最大重量1,155g、礫最小重量25gである。遺物は出土しなかった。

礫群7号（第29図）

E-58区のIX層で検出された。120×110cmの範囲に、37個の礫からなる礫群である。構成礫の集中度は比較的高く、掘り込み部はない。構成礫は角礫状が多い。石材及び被熱の有無は記録がないため、不明である。礫総重量10.4kg、礫平均重量281.1g、礫最大重量2,400g、礫最小重量10gである。遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

土坑1号（第30図）

E-55区のIX層下面（X層直上）で検出された。N65° Wを長軸とした長辺約164cm、短辺約70cmの楕円形で、検出面から床面までの深さは約60cmである。床面は平坦で逆台形状の断面をしている。埋土は、IX層主体の茶褐色土で赤橙色バミスが少量混じる。上層に薄くVIII層該当層の茶褐色粘質土が堆積している。土坑内から遺物等は出土しなかった。

土坑2号（第31図）

D-56区のIX層で検出された。N55° Wを長軸とした長辺約123cm、短辺約122cmの不定形で、検出面から床面まで約70cmである。床面は平坦で、東側はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、IX層主体の茶褐色土で、上層にはVIII層該当層の茶褐色粘質土が薄く堆積している。土坑内から遺物等は出土しなかった。

2 遺物

1はナイフ形石器である。石材は頁岩で、横長の剥片を使用している。右側面に粗い二次加工を施して刃部を

形成している。右側面上部には細かい調整をさらに加えている。裏面には主要剥離面を、左側面には自然面を残している。

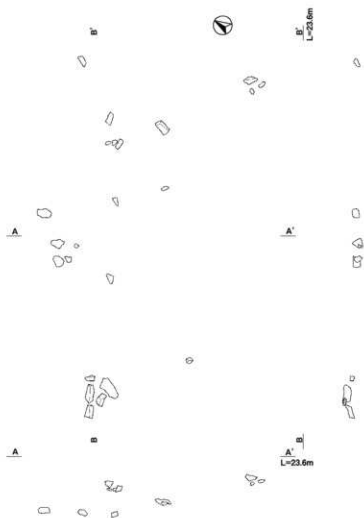
2はナイフ形石器である。石材は上牛鼻産の黒曜石で、横長の剥片を使用している。左側面は二次加工により、平坦面を作り出し、右側面下部には、浅い二次加工で調整を施して、刃部を作り出している。裏面に主要剥離面を、基部に自然面を残している。

3は上牛鼻産の黒曜石の石核である。打面形成を行えず、一回の打撃分割で終わっている。大部分は自然面を残している。

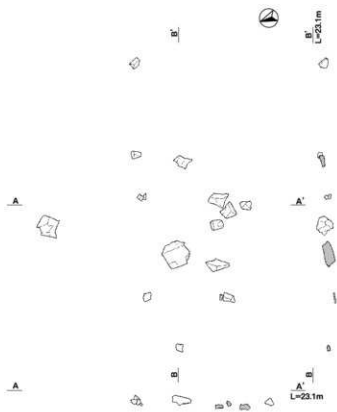
4は頁岩の石核である。自然面は有さず、縦長の剥片を剥いているようだが、剥離方向には規則性が見いだせない。

5は削器である。石材は頁岩で、横長な剥片を使用している。正面から細かい調整を施し、刃部を形成している。裏面には使用のための微小な剥離が認められる。

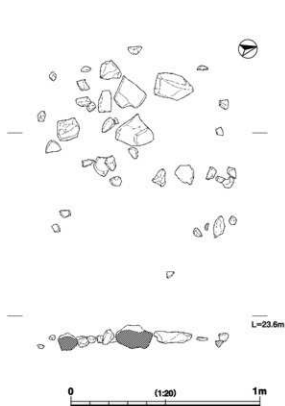
6はスクレイパーである。石材は上牛鼻産の黒曜石で、厚みのある素材を利用している。右側面と左側面下に微細な調整を行い刃部を形成している。裏面には主要剥離面を残している。



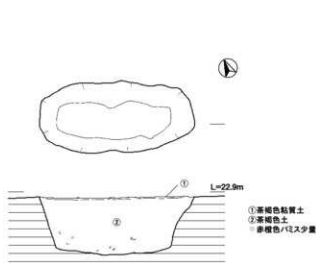
第27図 検群5号



第28図 検群6号



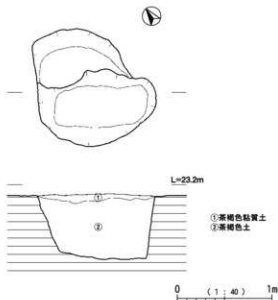
第29図 検群7号



第30図 土坑1号

7は錐である。石材は上牛鼻産の黒曜石で、やや厚い剥片を利用している。表面に二次加工の調整を施し、刃部を作り出している。刃部周辺には使用による剥離が認められる。

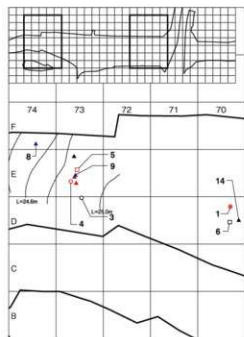
8～13は剥片である。8は石材は玉髄である。横長の剥片で、表面下部に微細な剥離が認められる。9も玉髄の剥片である。10は縦長な剥片で、石材は頁岩である。右側面にわずかに調整が施してある。11は縦長な剥片で、石材は頁岩である。裏面上部に打撃を加えており、二次



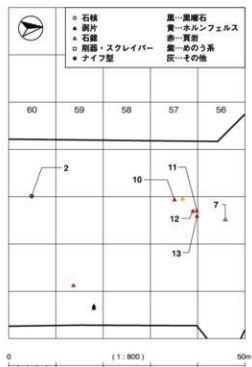
第31図 土坑2号

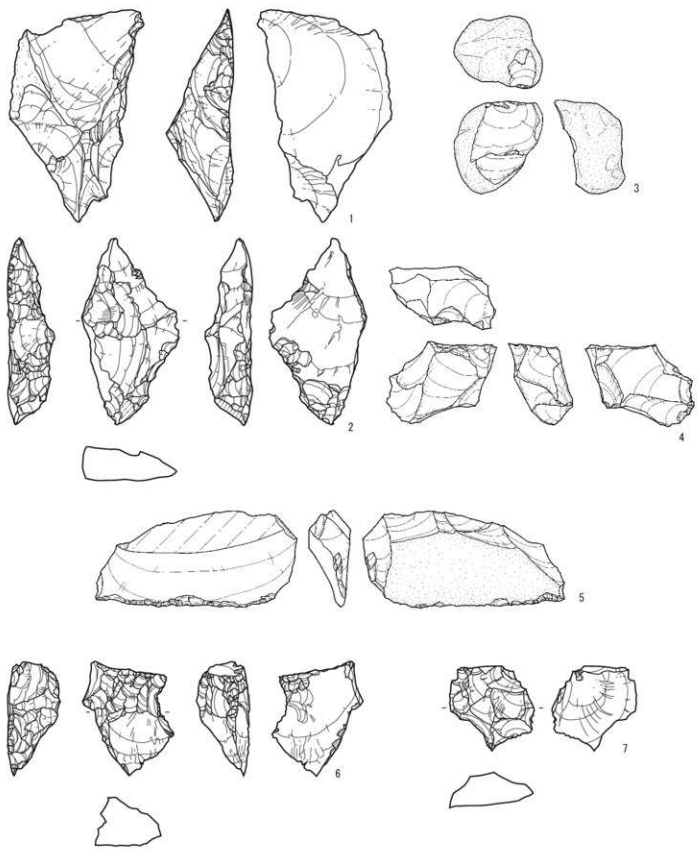
加工を行っている。12は横長な剥片で、石材は頁岩である。13は横長は剥片で、石材は頁岩である。

14は機種不明の石器である。石材は日東系の黒曜石で、厚みのある縦長の剥片を素材としている。表面から二次加工による調整を施し、左側面に細かい調整を行い刃部を形成している。裏面には主要剥離面を残している。ナイフ形石器の一部の可能性もある。

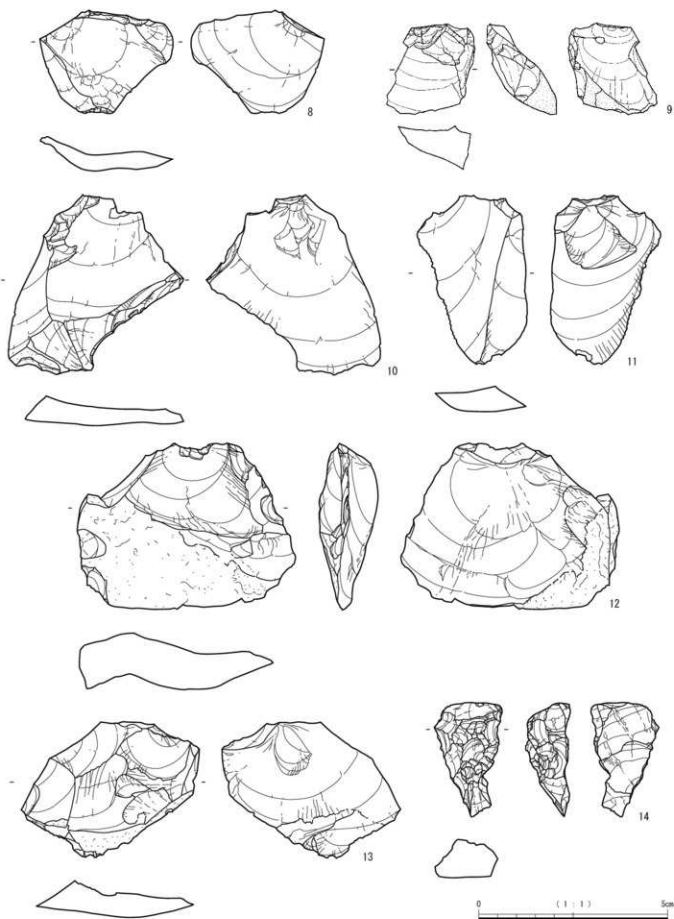


第32図 旧石器時代石器分布図





第 33 図 旧石器時代の遺物 (1)



第 34 図 旧石器時代の遺物 (2)

第2節 縄文時代草創期・早期の調査

1 調査概要

縄文時代早期の調査は、その遺物包含層としてⅢ a層・Ⅲ b層（アカホヤ火山灰）とⅥ層（薩摩火山灰）に挟まれたⅣ層が対象となった。Ⅴ層については、遺構・遺物は確認されなかった。なお、薩摩火山灰下層のⅦ層（草創期該当層）から、土器が1点だけ出土したため、ここで記載する。

まず、アカホヤ火山灰であるⅢ層を重機で除去した後、順次鍬簾等を用いた人力掘削によって下層からの遺構・遺物の検出に努めた。

縄文時代早期を対象とした調査範囲は、平成19年度と平成20年度調査のA～H-55～67区が中心である。平成19年度のトレンチ調査にて、遺物の出土が確認されたため、平成20年度に本調査を行った。それ以外の調査区では、トレンチ調査で遺構・遺物が確認されなかったり、層自体が削平を受け、残存していないことを確認したため、本調査は行わなかった。

Ⅳ層での遺構・遺物の主体は、台地部中央部である。

高低差は、遺跡南側が高く北側へ緩やかに低くなっている。現在の地形からB～E-57～59区は台地部の縁辺部に位置しており、これより北側は低地・低湿地部へ続く、緩やかに傾斜する地形である。縄文時代早期もおおよそ現在の地形に近いと推定される。

遺構は、E・F-74・75区から、集石1基が、C-55・56区から集石1基が検出されている。遺物はごく少量の出土状況であった。

縄文時代早期の土器・石器の出土は、土器が合計15点、石器が37点で、そのうちの土器8点、石器7点を図示した。石器の内訳は、石鏃1点、二次加工剥片1点、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨石・敲石2点、剥片29点（図示なし）、チャップ1点（図示なし）である。

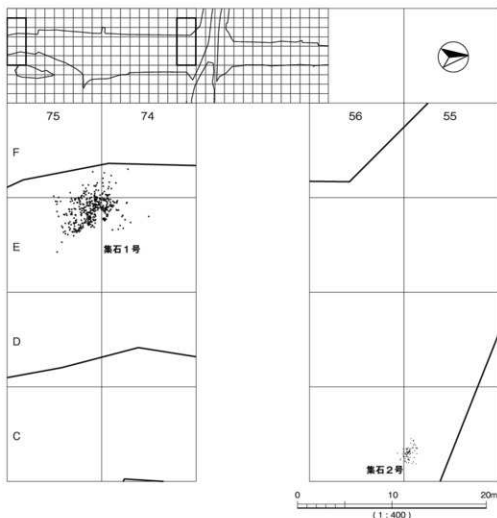
なお、本来Ⅴ層、Ⅵ層上面での地形測量を行うべきであったが行っていない。

2 遺構（第35図）

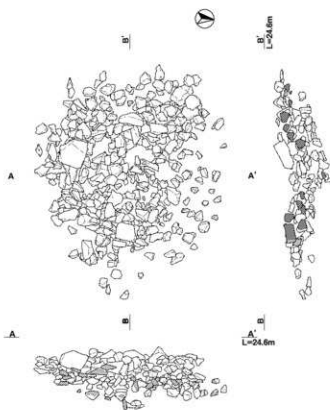
(1) 集石

台地部で検出された集石は2基を数える。いずれも平成19年度調査である。

集石の認定は、礫がまとまって検出された所を集石と



第35図 縄文時代早期遺構配置図



第36図 集石1号

し、検出面とした。2基ともIV層での検出である。

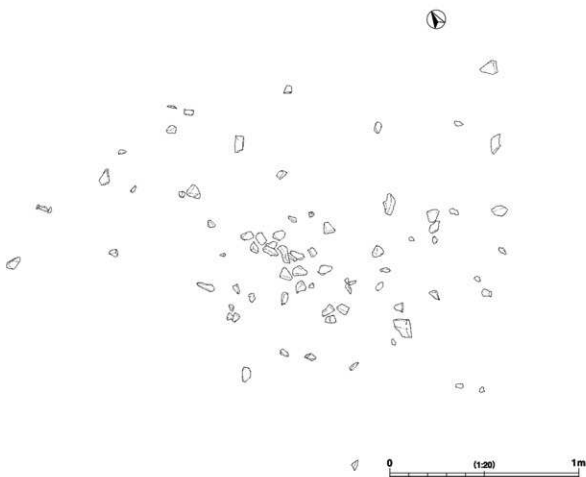
実測については、礎の多い箇所と、2方向からの見通し断面に多くの礎が実測できる箇所を主軸に設定した。ただし、集石2号は平面図しか記録がなく、平面のみの図示となる。また、構成礎に関する記録が残っていないため、礎に関する情報は記載できなかった。

集石1号(第36図)

E・F-74・75区のIV層で検出された。130×100cmの範囲内に、339個の礎からなる集石である。構成礎の集中度が高いが、明確な掘り込み部は確認できなかった。ただし、礎の集中度から下層礎直下まで掘り込みがあったものと推定される。

集石2号(第37図)

平成19年度6T、C-55・56区のIV層で検出された。220×270cmの範囲に、76個の礎からなる集石である。構成礎の集中度は低く、掘り込み部はない。中心部に30個の礎が残り、その周辺に散礎状に礎が残存した集石と考えられる。



第37図 集石2号

3 土器

(1) 草創期 (第39図)

15はD-73区薩摩火灰下層のⅧ層(草創期該当層)から出土している。小片であるが、草創期の可能性のある土器として記載した。深鉢の胴部小片で、内外面ともナゲによる調整だが、風化のためかはっきりしない。なお、実測図は1/1で記載している。

(2) 早期 (第40図)

16・17は深鉢の胴部資料で、外面は貝殻押引文を施し、内面はナゲ調整を行っている。17の内面は丁寧なナゲ調整である。21と22は底部資料である。22は底外面に、縦位の刻目を施しており、内外面とも丁寧なナゲ調整である。底面には白色土が付着している。21は底部外面に、縦位の刻目を施しており、内外面とも丁寧なナゲ調整で、底面は丁寧に調整される。焼成は良好で硬質である。角筒の可能性のある資料である。16・17・21・22は、鹿児島市吉田町大原遺跡を標式とする吉田式土器に比定される。

19・20は深鉢の口縁部資料である。19は、口唇部に浅い刻みを、口縁部外面には斜位の貝殻刺突文を施す。内外面とも丁寧なナゲ調整で、外面にはススが付着する。20は口唇部に浅い刻みを施す。口縁部外面には斜位の貝殻刺突文を施す。内外面とも丁寧なナゲ調整で、外面にはススが付着する。胎土は5mm程度の小礫を多く含む。19・20は南九州市知覧町石板上遺跡を標式とする石板式土器に比定される。

18は深鉢の胴部資料で、外面は横位の条痕、内面は横位と斜位の条痕を施す。23は、深鉢の底部資料である。直径7.2cmで、内外面ともナゲ調整で、胴部へ開き気味に立ち上がる。18と23は、型式は不明である。

4 石器 (第38・40図)

打製石鏃

24は二等辺三角形形状を呈していて、基部の縁りが深い凹基式(石鏃分類I b類P67参照)である。先端部は欠損しているが、長幅比が1.5:1の縦長に作られている。

二次加工剥片

25は安山岩の縦長剥片を用いている。調整は粗く背腹両面から行われ、両側面に幾らかの調整剥離が見られる。

打製石斧

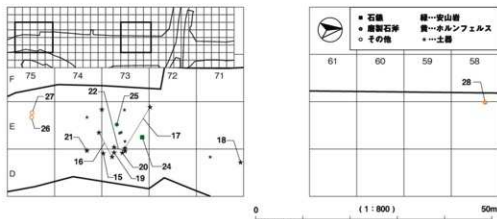
26は扁平なホルンフェルス素材としている。腹面に表皮を残し、二次加工は粗く腹面から周縁に整形剥離を加えている。27は扁平なホルンフェルス素材としている。背腹面から、両側面及び刃部に粗い調整剥離が加えられている。

磨製石斧

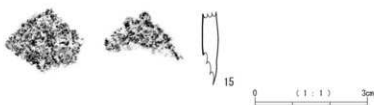
28は胴部から基部が欠損している。重量感あるホルンフェルスで、全面に丁寧な研磨を施しており、刃部は蛤状を呈して丁寧な作りである。

磨石・敲石

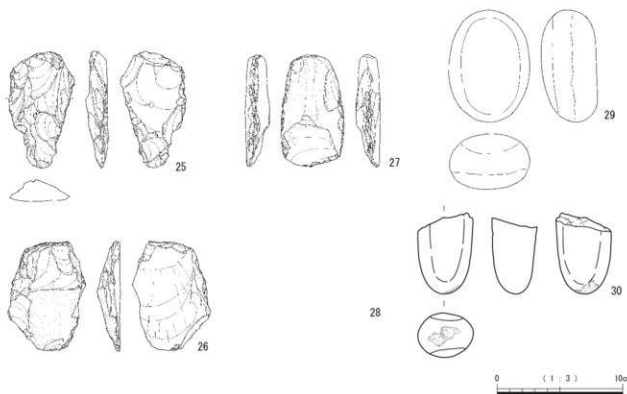
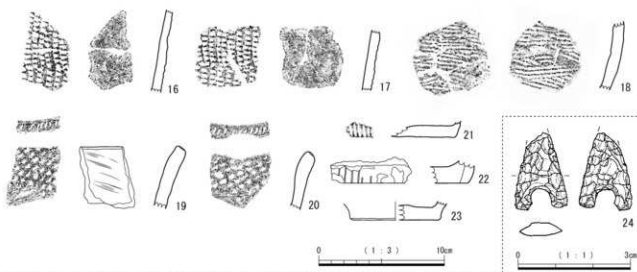
29は最大厚4.8cm、重量466g、花崗岩製の小型の磨石である。石縁状の形状をし、腹面に磨面を有しており、敲打痕は認められない。30は砂岩製の棒状敲石で、丁寧な研磨で形状が整えられている。



第38図 縄文時代早期遺物分布図



第39図 縄文時代草創期の遺物



第40図 縄文時代早期の遺物

第3節 縄文時代前期・中期の調査

1 調査概要

縄文時代前期・中期の調査は、その遺物包含層としてⅢa層（アカホヤ火山灰二次堆積土）が対象となった。

まず、表土を重機で除去した後、Ⅱ層・Ⅲa層を順次鉤鎌等を用いた人力掘削によって下層からの遺構・遺物の検出に努めた。

縄文時代前期・中期を対象とした調査範囲は、中津野遺跡台地部のほぼ全調査区に及んだ。

Ⅲa層での遺構・遺物の主体は、中津野遺跡台地部の北側である。高低差は、遺跡南側が高く北側へ緩やかに低くなっている。現在の地形からB～E-57～59区は台地部の縁辺部に位置しており、これより北側は低地・低湿地区へ続く、緩やかに傾斜する地形である。縄文時代前期もおおよそ現在の地形に近いと推定される。

縄文時代前期の遺構・遺物は、主に平成18年度調査のC・D-44～46区と平成19年度調査のB-57区からの検出・出土である。遺物は、当該調査区から少量が出土する状況であった。遺構は、同グリッドから集石3基が検出されている。また、100mほど南側の台地部縁辺部のB-57区から縄文時代前期後半と考えられる土器が1個体分つづられた状態で出土している。遺構として取り扱い詳細を記載した。

2 遺構（第41図）

(1) 集石

台地部で検出された当該時期と判断した集石は3基を数える。いずれも、平成18年度調査である。

集石の認定は、礫がまとまって検出された所を集石とし、検出面とした。3基ともⅢa層での検出である。時期認定は、集石内からの土器等の出土はなかったが、周辺調査区から同時期の土器が出土したため、縄文時代前期の遺構と判断した。

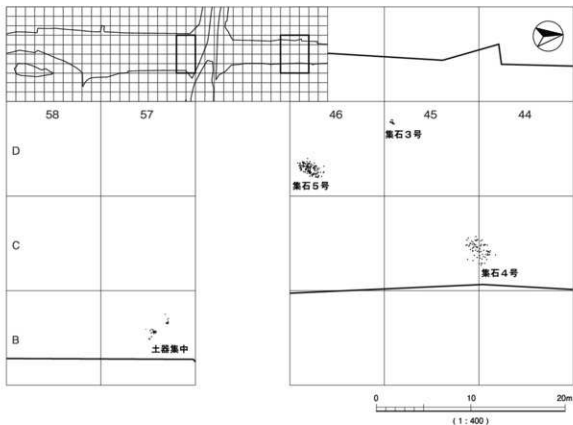
実測については、礫の多い箇所と、1方向からの見通し断面に多くの礫が実測できる箇所を主軸に設定した。

集石3号（第42図）

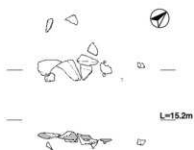
D-45区のⅢa層で検出された。60×40cmの範囲に、13個の礫からなる集石である。構成礫の集中度は低く、掘り込み部はない。礫の情報については記録が残っていないため、不明である。

集石4号（第43図）

E-74・75区のⅢa層で検出された。340×230cmの範囲内に、74個の礫からなる集石である。散雑状に広がり構成礫の集中度は低く、掘り込み部は確認できなかった。礫総重量4.4kg、礫平均重量60.9g、礫最大重量170g、礫最小重量50gである。石材、被熱の有無は記録が残っていないため、不明である。遺物は出土しなかった。



第41図 縄文時代前期遺構配置図



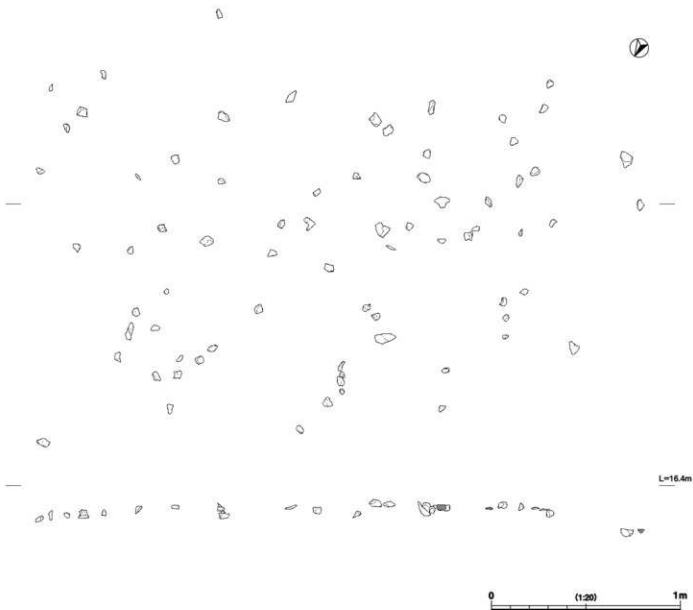
第42図 集石3号

集石5号 (第44図)

D-46区のⅢ a 層で検出された。290×240cmの範囲内に、139個の礫からなる集石である。散礫状に広がり構成礫の集中度は低く、掘り込み部は確認できなかった。構成礫の90%は砂岩で、残りは頁岩である。ほとんどの礫が被熱を受け、赤色化している。礫総重量12.4kg、礫平均重量88.9g、礫最大重量720g、礫最小重量10gである。遺物は出土しなかった。

(2) 土器集中 (第45・46図)

B-57区のⅢ b 層上面で検出された。250×290cmの範囲内に、84点の土器片が大きく2箇所に分散して出土した。中心部には比較的大きな破片40個ほど集中している。その北西側300cm部分にも、15個ほどの破片が集中している。また、南東側には、同個体の小片が集中して出土した。一つの個体が、押しつぶされるような状況である。



第43図 集石4号

掘り込みは確認できなかった。

これらの土器片を接合した結果が第46図の31である。なお、土器集中から出土した84点がすべて接合しており、その他の個体の土器はなかった。

31は口縁部から胴下部までの深鉢の資料(Ⅲ類)である。胴下部から口縁部に向かって、開きながらまっすぐに伸びる器形である。口径36.6cmで、残存器高28.3cmで、底部はない。口唇部は平たく、細かく刻みを施している。外面は全面に縦位の条痕で調整しており、条線状を呈している。内面は、横位に丁寧なナデで調整している。焼成後、外面から穿孔された径約0.9cmの4つの補修孔がある。上下にそろっており、それぞれ対をなしている。外面は、ススが胴上部に付着している(第5章自然科学分析試料6・7)。焼成は普通である。

3 遺物

縄文時代前期・中期とした土器は、Ⅰ類～Ⅴ類である。小片が多く器形が確認できる個体は少なかった。

縄文時代前期の土器は、合計78点出土し、そのうち24点を図示した。土器の内訳は、Ⅰ類土器8点(図示4点)、Ⅱ類土器33点(図示8点)、Ⅲ類土器37点(図示12点)である。

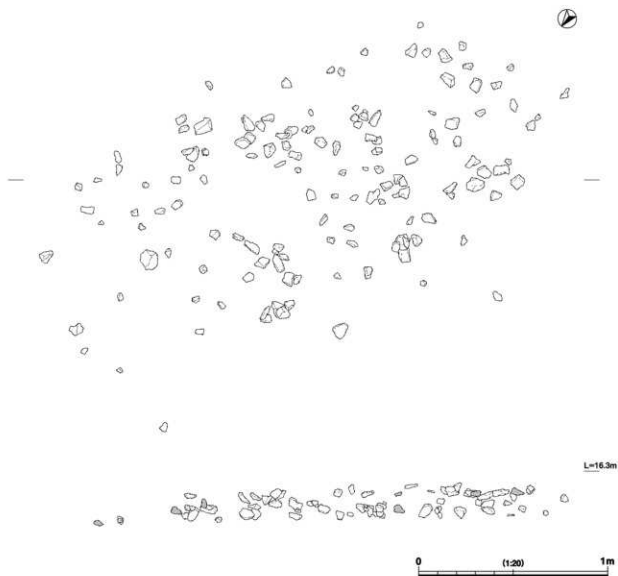
縄文時代中期の土器は、合計20点出土し、そのうち18点を図示した。土器内訳は、Ⅳ類土器16点(図示14点)、Ⅴ類土器1点、その他の土器3点である。

なお、石器については、Ⅲa層は縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代の土器が出土したため、縄文時代の最後にⅡ層、Ⅲa層出土石器として扱った。

出土遺物の分類概要を述べた後、それぞれの詳細について記載する。

Ⅰ類(第49図)

外面全体に幾何学的な文様を描くのが特徴である。その文様は、棒状工具で沈線文や刺突文を施すものである。胎土に滑石を含むものが多いが、本遺跡出土土器には含まれていない。曾畑式土器と呼ばれる土器である。



第44図 集石5号

Ⅱ類 (第49・50図)

外面に貝殻点文や突帯文により幾何学的モチーフを描くのが特徴である。曾畑式土器の様式を引くもので、深浦式土器と呼ばれる土器である。

Ⅲ類 (第51図)

外面に貝殻条痕文を施す一群をまとめた。時期は明確でないが、縄文時代前期から中期に位置する条痕文系土器と考えられる。

Ⅳ類 (第52・53図)

キャリナー状の器形をもち、外面に沈線や貼付突帯で文様を施す。縄文時代中期に位置する春日式土器と呼ばれる土器である。

Ⅴ類 (第54図)

口縁部がやや内湾し、外面に貝殻腹縁部による押引文で文様を施す。縄文時代中期に位置する船元式と呼ばれる土器である。

その他 (第54図)

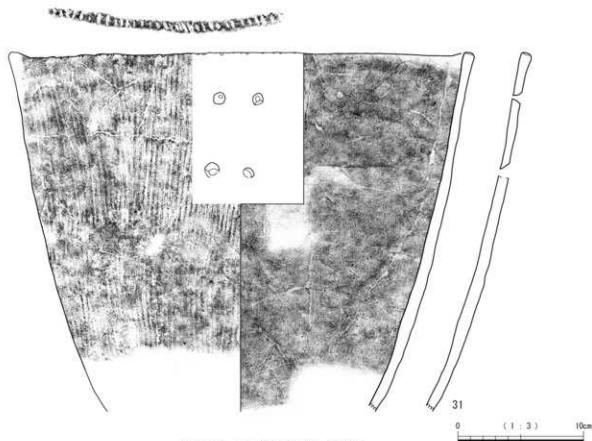
縄文時代中期に該当するが、今回分類したどの型式にも該当しないものをまとめて報告する。

I類 (第49図32～35)

32～35はいずれも胴部小片の土器である。32は外面をナデ調整した後、斜位と横位の沈線文が施されている。内面はナデ調整である。33は外面はナデ調整した後、横位と縦位の沈線が施されている。縦位の沈線は、浅いものである。胎土に角閃石・白石を多く含み、他のI類土器とは少し胎土が異なる。34は縦位の沈線で区画され、縦に近い沈線と横に近い沈線が施されている。焼成は良好である。35はL字状の沈線と斜位・横位の沈線が施されている。L字状の沈線を施した後に、横位の沈線文を施している。



第45図 土器集中



第46図 土器集中の土器(Ⅲ類)

Ⅱ類(第49図36~40, 第50図41~48)

36~40は文様に連点文を描く一群である。

36は口縁部から胴部で、波状口縁を呈している。内外面とも貝殻条痕の後、連点文を施している。外面の連点文は、区画を意識させる縦位の連点を2列施して、口唇から2.5cm下まで横位の連点を帯状に施している。37は口縁部で、波状を呈している。内外面とも貝殻条痕で調整した後、外面は縦位・内面は横位の連点文を施している。38は胴部で、外面はナデ調整後、縦位と横位の連点文を施している。39は胴部で、内外面とも横位の貝殻条痕で調整した後、外面に連点文を施している。40は胴部で、外面は貝殻条痕の後ナデ調整の後、横位と縦位の連点文を施している。

41~45は突帯を貼付けている一群である。

41は口縁部から胴部である。復元径が38cmで、口縁部は若干外傾し、口縁部下位付近で縮まる器形である。口唇部は口縁がノコギリ状を呈して見えるほど、深く、太い刻みが施してある。外面は横位の貝殻条痕で調整した後、口縁から頭部にかけて2条の突帯を平行に貼付け、その間に3条の突帯を波状に貼付けている。突帯はいずれもミミズ腫れ状を呈している。内面は横位の貝殻条痕で調整している。42は胴部から底部である。器形は丸底で、開きながら胴部へ立ち上がる。残存器高16.3cmである。外面

の胴部上位に1条の突帯が貼付けてあり、刺突による刻みが施してある。突帯下には沈線が2条施してある外面は縦位の貝殻条痕の後、丁寧なナデ調整で仕上げている。内面は横位・斜位の貝殻条痕を底部まで施してある。胴部は2cm幅の粘土積み上げと底部と胴部に段ができており、土器製作過程の分かる資料である。43は口縁部で、斜位の貝殻条痕の後丁寧にナデ消して、4条の突帯が貼付けてある。突帯の上2つは口縁部直下で弧状に、下2つは「V」字状に貼付けてある。鉢又は浅鉢の可能性もある。44は胴部だが、口縁部直下の可能性がある。外面はナデ調整の後、突帯を貼付けてある。突帯は、上2つは横位の平行、下2つは「V」字状に貼付けてある。45は胴部で、内外面とも横位の貝殻条痕で調整している。口縁部下位に2条の突帯を貼付けている。

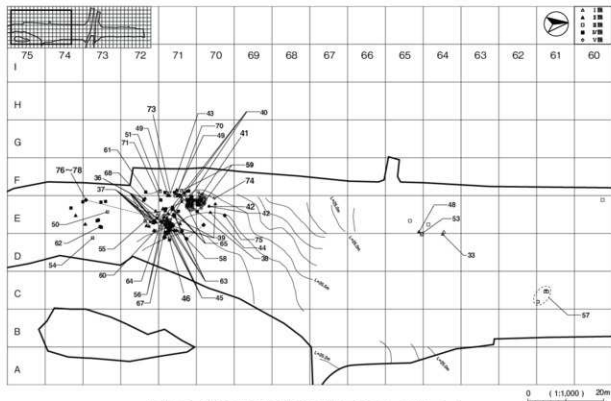
46~48は条痕やナデ調整が見られる一群である。出土状況や器形・調整等からⅡ類として記載した。

46は口縁部から胴部下位である。器形は波状口縁で口縁部は直立し、口縁部下位で弱く縮まり、胴部がわずかに膨らみ、復元径16.2cm、残存器高12cmである。外面は縦位・斜位の貝殻条痕で調整し、口唇部付近はナデ消している。内面は横位の貝殻条痕である。口縁部下位に径0.6cmの補修孔があり、外面から穿孔している。器壁は0.7cmと薄く、全面にススが付着している。47は口縁部で、外面

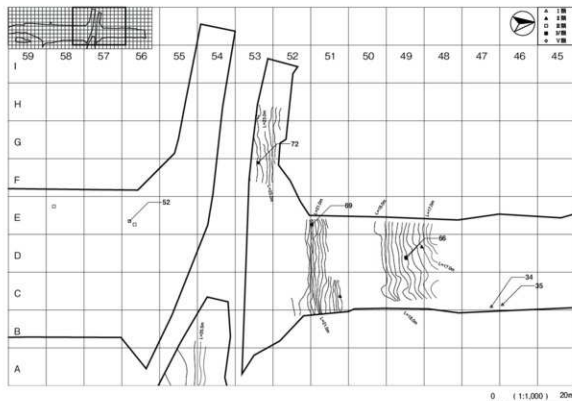
は横位の後、斜位の貝殻条痕と、内面は横位の条痕の後、わずかにナデ消している。48は胴部で、外面はナデ調整の後、曲線文を施しており、内面は貝殻条痕をナデ消している。Ⅱ類土器としているが、他型式の可能性ある。

Ⅲ類 (第51図49~60)

49は口縁から胴部で復元径は27.5cmである。口縁部下位に段をもち、口縁部がわずかに外反をする。口唇部に斜位の刻目を施し、内外面は条痕の後、ナデ消している。



第 47 図 縄文時代前期中期土器分布図 (Ⅰ類~Ⅴ類) (1)



第 48 図 縄文時代前期中期土器分布図 (Ⅰ類~Ⅴ類) (2)

50～55は口縁部である。50・51は口唇部に刻みを施している。内外面は条痕の後、ナデ消している。52は外面に斜位の沈線を施す。53は外面に短沈線で相交弧文状に描き、下位に連点文を施している。54は外面は剥落しているが、口唇部に刻みを施している。焼成が良好で、丁寧な作りである。55は口唇部に貝殻刺突を施している。焼成が良好で、丁寧な作りである。56は胴部で、内外面とも貝殻条痕の後、ナデを行っている。57は胴部下半で、外面は縦位の条痕を、内面は横位の条痕で調整している。58・59は胴部で、内面に指頭圧痕が残る。60は底部で、厚さ2cm・外面は縦位の貝殻条痕で、白色土が付着している。

IV類 (第52図61～72, 第53図73・74)

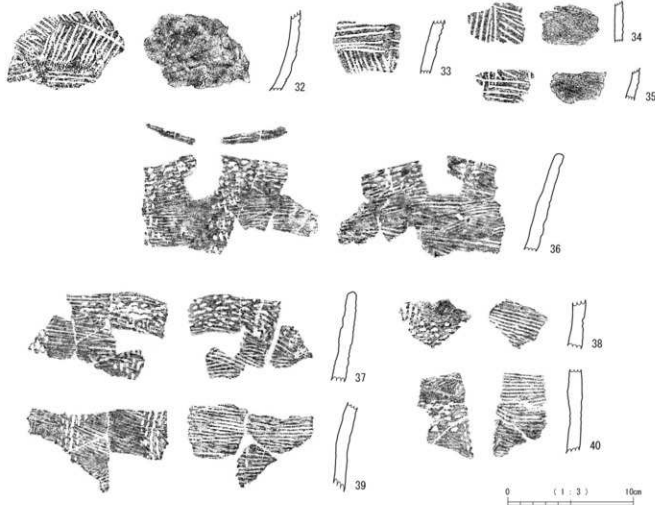
61は深鉢の口縁部で、口縁部が内に強く内湾する。口縁部は2本の貼付突帯で菱形文を形成し、その下部に連続した短沈線文を施す。内外面ともにナデを行う。62・63は深鉢の口縁部で、口縁部はやや内湾し、平縁の口唇部をもつ。口縁部に沈線で平行線と波状文を施し、口唇部に1条の沈線文と互い違いに刻目を施す。外面は縦位、内面は横位の条痕の後ナデを行う。63は口径19.6cmを測り、外面にススが付着する。

64～66は深鉢の胴部である。64は内面は丁寧なナデを行い、外面はススが付着する。65は内外面ともに条痕の後ナデを行う。66は内外面ともに条痕の後、丁寧なナデを行う。内外面にススが付着する。

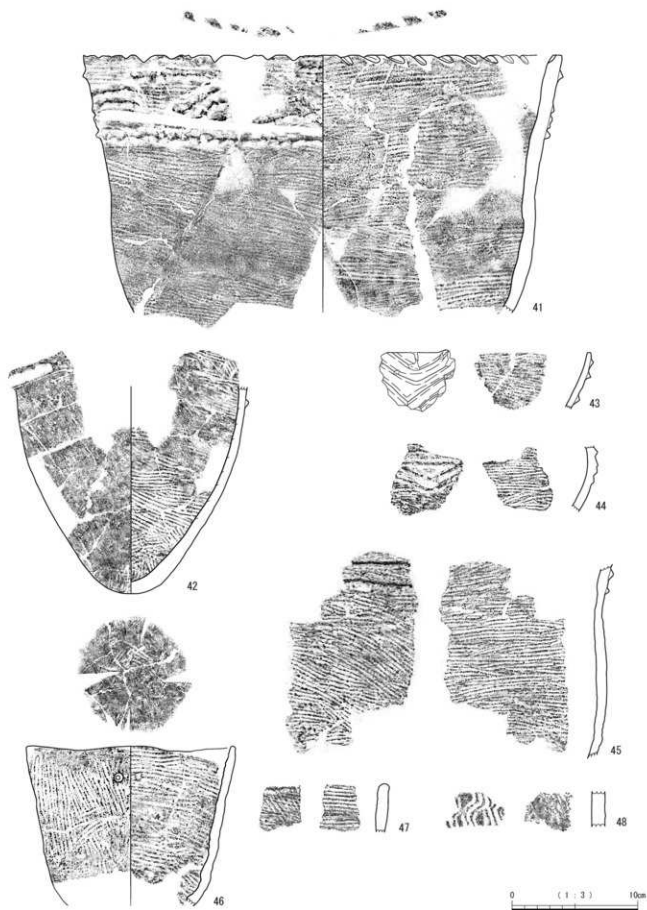
67は無文の口縁部で、外面は貝殻条痕後ナデ消し、内面は貝殻条痕を施す。口縁部はやや内湾し、口縁上部外面に炭が付着する。IV類土器としているが、他型式の可能性はある。

68～72は底部である。68は復元径4.4cmの底部である。底面に白土が付着する。上部は小型鉢と考えられる。内外面ともに丁寧なナデを行う。69は復元径5.2cmの底部である。やや中空を呈し、内外面ともに丁寧なナデを行う。70は復元径7.6cmの中空の底部である。内外面ともに丁寧な条痕の後ナデを行う。71は底径5.4cmのやや中空の底部である。多量の滑石を含む土器である。底面は鯨骨の圧痕が不明瞭である。72は底径3.2cmの底部である。内面はユビオサエを行う。

73は深鉢の口縁部～胴部で、口径32.5cm、残存高24.2cmをはかる。口縁部には粘土紐で渦巻き状の帯をつくり、その下に平行する2条の突帯を巡らす。器形はキャリバー状を呈す。(第5章自然科学分析試料8)



第49図 縄文時代前・中期の土器(1) I類・II類



第50図 縄文時代前・中期の土器(2)Ⅱ類

74は深鉢の完形である。口縁部から胴部に向かってややキャリバー状を呈す。内外面ともにとでも丁寧なナデを行い、かなり薄手である。口縁部に5個の山状突起を持ち、突起の間には深い刻みを3つもしくは4つ入れる。胎土に滑石を多く含み、色調は橙色を呈する。外部から持ち込まれた土器と考えられる。

V類 (第54図75)

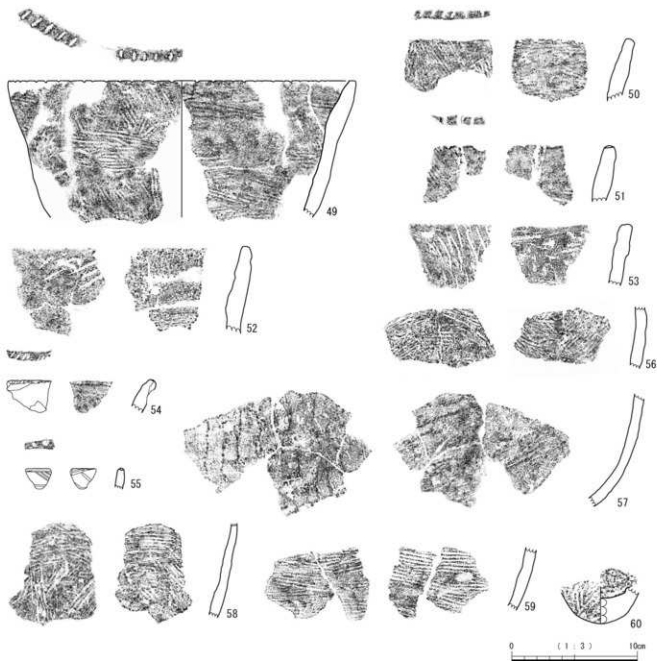
75は深鉢の口縁部～胴部で、復元口径14cmである。口縁部～胴部にかけて貝殻腹縁部による波状や円状の沈線を描すが、文様はかなり浅い。口縁部がやや内湾し、頭部が弱くくびれ、胴部がやや張り出す器形をもつ。ややキャリバー状を呈す。外面は条痕の後丁寧なナデを行い、

内面は横位に条痕の後ナデを行う。外面から穿孔した補修孔が1か所残る。

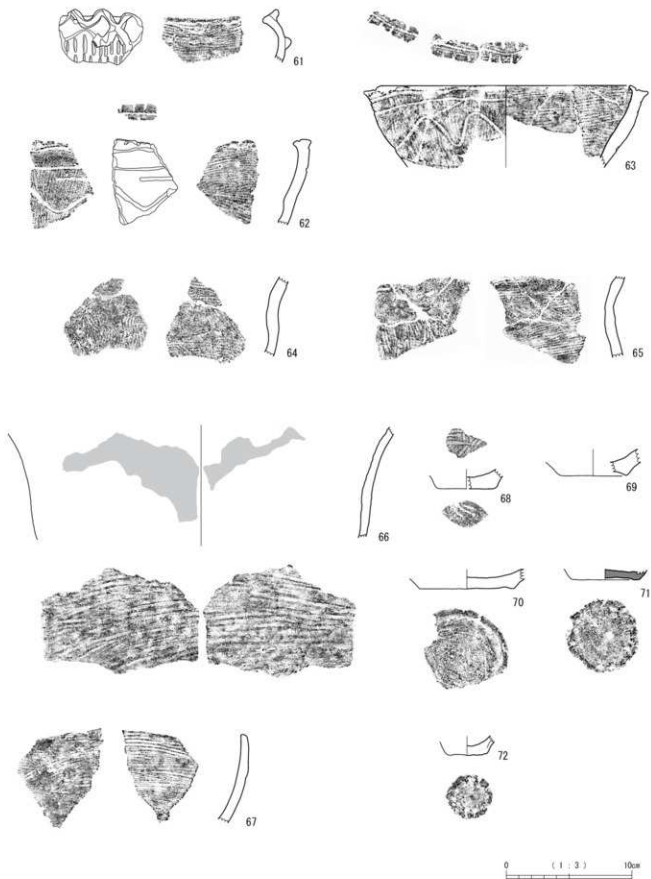
その他 (第54図76～78)

縄文時代中期に該当するが、今回分類した型式に該当しない土器をここで報告する。

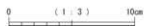
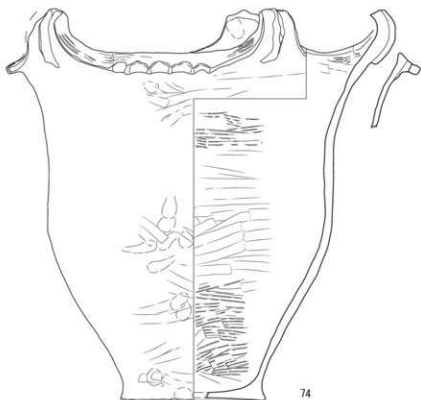
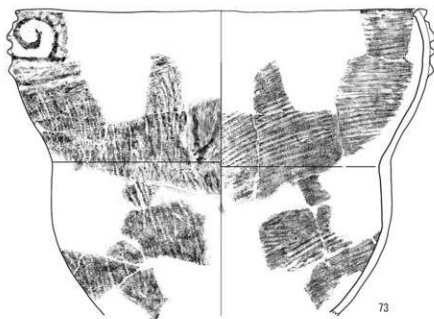
76～78は深鉢の口縁部～底部である。同一個体である。口唇部に刻みを施し、外面に縄文を全面に施し、内面は丁寧なナデを行う。薄手である。底部は平底で、端部ギリギリまで縄文を施文する。底面に白色土が付着する。口縁は出土部位のみでは曲線を描かず角張った口縁をもつようにみえる。胴部から口縁部に向かってまっすぐ立ち上がる。船元2式と考えられる。



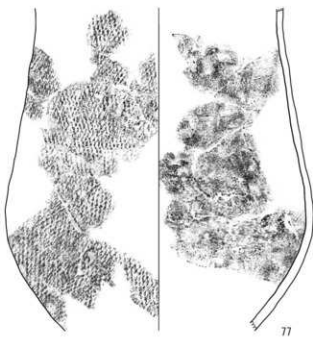
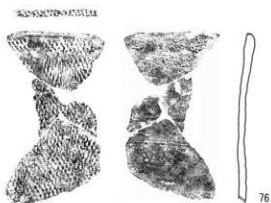
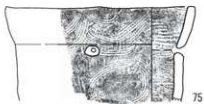
第51図 縄文時代前・中期の土器(3)Ⅲ類



第52図 縄文時代前・中期の土器(4)Ⅳ類



第53図 縄文時代前・中期の土器(5)Ⅳ類



第54図 縄文時代前・中期の土器(6) V類・その他

第4節 縄文時代後期・晩期の調査

1 調査概要

縄文時代後期の調査は、その遺物包含層としてⅢ a 層（アカホヤ火山灰二次堆積土）が対象となった。まず、表土を重機で除去した後、Ⅱ層・Ⅲ a 層を順次鋤簾等を用いた人力掘削によって掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。

縄文時代後期を対象とした調査範囲は、中津野遺跡台地部のほぼ全調査区に及んだ。なお、縄文時代晩期の遺構は検出がなく、遺物も少量であり、包含層もほぼ同じことから、本節でまとめて報告する。

Ⅲ a 層での遺構・遺物の主体は、中津野遺跡台地部の北側である。高低差は、遺跡南側が高く北側へ緩やかに低くなっている。現在の地形からB～E-57～59区は台地部の縁辺部に位置しており、これより北側は低地・低地湿潤地へ続く、緩やかに傾斜する地形である。縄文時代後期もおおよそ現在の地形に近いと推定される。

縄文時代後期の遺構・遺物は、主に平成20年度調査のC・D-65区とB～D-56～58区からの検出・出土である。遺物は当該調査区から少量出土する状況であった。遺構はC・D-65区から集石2基が検出されている。また、台地部縁辺部のC・D-56～58区から土坑3基を検出している。

2 遺構（第55図）

(1) 集石

台地部で検出された当該時期と判断した集石は2基を数える。いずれも平成20年度調査である。

集石の認定は、礫がまとまって検出された所を集石とした。2基ともⅢ b 層での検出である。時期認定は、集石内からの土器等の出土はなかったが、周辺調査区から同時期の土器が出土したため、縄文時代後期の遺構と判断した。

実測については、礫の多い箇所と、2方向からの見通し断面が、1方向からの断面に多くの礫が実測できる箇所を主軸に設定した。

集石6号（第56図）

D-65区のⅢ b 層で検出された。50×35cmの範囲に、9個の礫からなる集石である。構成礫の集中度は高く、掘り込み部は確認できなかった。中心部の礫のみが残存した集石と考えられる。5～20cmほどの比較的大きい角礫状の礫が多く、すべて砂岩である。多くの礫は被熱を受け、赤色化している。礫総重量6.2kg、礫平均重量685g、礫最大重量2,080g、礫最小重量193gである。遺物は出土しなかった。

集石7号（第57図）

C-65区のⅢ b 層で検出された。140×60cmの範囲に、21個の礫からなる集石である。散礫状に広がり、構成礫

の集中度は低く、掘り込み部はない。5cm以下の小さい角礫状の礫から構成される。石材は砂岩が多い。60%程度の礫は、被熱を著しく受け砕砕又は、赤色化が激しい。礫総重量は1.1kg、礫平均重量50.9g、礫最大重量150g、礫最小重量13gである。

(2) 土坑

台地部で検出された当該時期と判断された土坑は3基を数える。いずれも平成20年度調査である。

土坑の認定は、Ⅲ b 層アカホヤ上面で褐色のシミ状のプランを検出して、1/4や1/2を掘り、土層断面を記録した後、遺構かどうかの判断を行った。遺構と認定したものは、完掘して記録を残している。

遺構内からの土器等の出土はなく、周辺調査区から同時期の土器が出土したため、縄文時代後期の遺構と判断した。

土坑3号（第58図）

台地縁辺部に位置するC-57区のⅢ b 層上面で検出された。遺構の1/4が現代のイモ穴の攪乱で削平されている。N70° Eを長軸とした長辺約86cm、短辺約70cm（推定）の楕円形で、検出面から床面までの深さは約28cmである。床面は、平坦で逆台形状の断面をしていたと考えられる。

埋土は、茶褐色土で黄橙色小バミス（アカホヤ）が混じる。土坑内から遺物等は出土しなかった。

土坑4号（第59図）

台地部縁辺部に位置するC-57区のⅢ b 層で検出された。N30° Wを長軸とした長辺約138cm、短辺90cmの略楕円形で、検出面から床面までの深さは約48cmである。床面は狭く、長辺の東西の壁は緩やかに立ち上がる。

埋土は、茶褐色土で黄橙色小バミス（アカホヤ）が混じる。土坑内から遺物等は出土しなかった。

土坑5号（第60図）

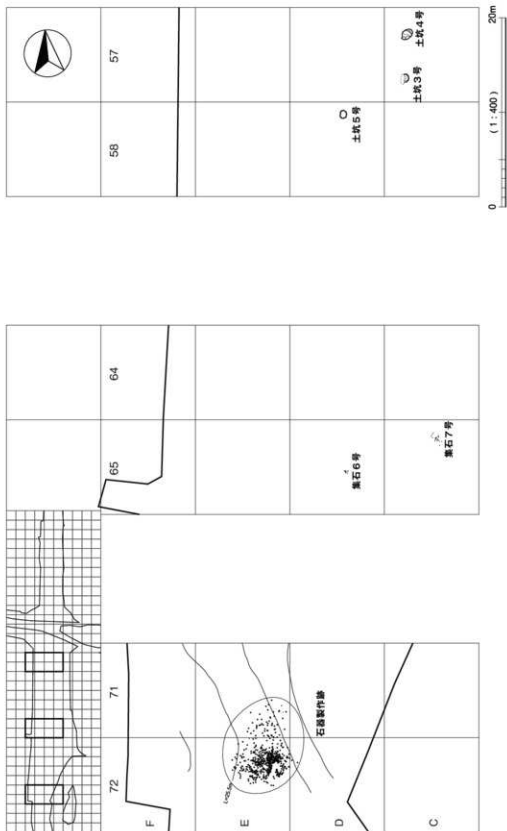
D-58区のIV層上面で検出された。N30° Eを長軸とした長辺約88cm、短辺約70cmの楕円形で、検出面から床面までの深さは約22cmである。「U」の字状をした断面形で、床面から緩やかに立ち上がり、側面はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は、黄褐色砂質土でアカホヤ火山灰を主体とするものである。土坑内から遺物等は出土しなかった。

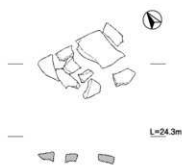
(3) 石器製作跡（第61図）

E・D-71・72区のⅢ a 層下面からⅢ b 層で検出された。全体の範囲は約11.2×8.48mの楕円形状で、北東～南西へ広がる。570点の出土遺物から構成され、その石材は黒曜石が主である。なお、石材の同定は肉眼観察によるものである。

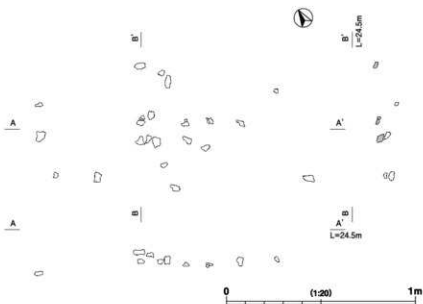
器種別では、未製品も含めて打製石鏃が25点と最も多く、次いで二次加工剥片が多い。打製石鏃中心の製作跡と考えられる。石材別では、前述したとおり黒曜石



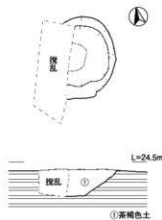
第55圖 縄文時代後期遺構配置図



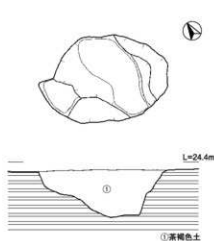
第56図 集石6号



第57図 集石7号



第58図 土坑3号



第59図 土坑4号



第60図 土坑5号

(63%)が多い。産地別では、鹿児島県上牛鼻産のものが黒曜石全体の46%を占める。次いで安山岩とめのう系である。めのう系は、玉髓がその多くを占めている。

出土遺物は、28点を図示した。打製石鏃は未製品も含めて、25点出土して、そのうち21点を図示した。その他、異形石器は3点中3点を図示、二次加工剥片は6点中2点を図示した。打製石斧と磨石は各1点ずつ出土し、どちらも図示した。

79～92は打製石鏃である。79は正三角形で基部の抉りが非常に深い。刃部・基部ともに丁寧に押圧剥離を施している。姫岳産黒曜石である。80・81は二等辺三角形で基部の抉りが非常に深い。両側縁部は鋸歯状を呈しており、80は針尾産、81は霧島系の黒曜石である。82は正三角形で基部の抉りが非常に深い。両側縁部を鋸歯状に、基部も丁寧に押圧剥離を施している。上牛鼻産

の黒曜石である。83は脚部を欠損しているが、二等辺三角形で基部の抉りが深い石鏃と考えられる。石材はめのう系（玉髓）である。84は左基部を欠損している。正三角形で基部の抉りは浅い。石材はホルンフェルスである。85は二等辺三角形で基部の抉りが深い。右側縁部に、かえしのような突起がある。石材の特徴を生かした、鋸歯状の刃部の一部である。86は左側縁部を欠損している。二等辺三角形で基部の抉りが比較的浅い。腰岳産の黒曜石である。87は先端部と脚部を欠損しているが、縦長の二等辺三角形で基部の抉りは深い。針尾産の黒曜石である。88は先端部と脚部を欠損しているため、形状ははっきりしない。日東産の黒曜石である。89は片脚部を欠損しているが、二等辺三角形で基部の抉りが深い。上牛鼻産の黒曜石である。90は両脚部を欠損しており、形状は不明である。両側縁部は、鋸歯状でなく直

線状である。上牛鼻産の黒曜石である。91は二等辺三角形形状で基部の抉りが深い。片脚部が短く、非対称な基部を呈している。ホルンフェルスである。92は先端部と脚部を欠損しているが、二等辺三角形形状で基部の抉りは深い。ホルンフェルスである。

93～99は石鐵木製品である。93は表面に自然面を裏面に主要剥離面を残す。上牛鼻産の黒曜石である。94は先端部で両側縁部に押圧剥離を施してある。上牛鼻産の黒曜石である。95は裏面に主要剥離面を残す。96は裏面に主要剥離面を残し、表面は丁寧に押圧剥離を施している。姫島産の黒曜石である。97は姫島産黒曜石である。98は裏面に主要剥離面を残し、表面は押圧剥離を施している。ホルンフェルスである。99は半分欠損しているが、側縁部や基部を粗い押圧剥離で調整しており、石鐵木製品とした。上牛鼻産の黒曜石である。100は欠損しており、全体が不明であるが全面に二次調整や押圧剥離が施してある。上牛鼻産の黒曜石である。

101・102は異形石器である。101は半分欠損している。粗い押圧剥離を施してあり、安山岩である。102は左側縁部を円弧状に調整して、右側縁部は不純部のためか調整が粗い。左側縁部を刃部としたスクレイパーの可能性

もある。

103は二次加工剥片である。横長な剥片に二次加工を施している。上牛鼻産の黒曜石である。104は二次加工剥片である。裏面に主要剥離面を残す。腰岳産の黒曜石である。

105は扁平な打製石斧である。全体的に粗い調整で刃部と成形を行っている。ホルンフェルスである。106は磨石である。両面に磨面が認められる。裏面は風化による剥落が見られる。

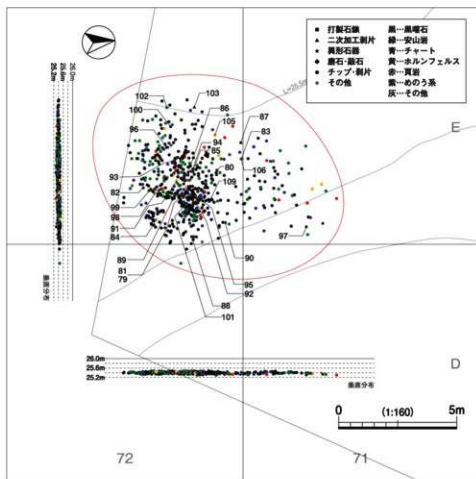
3 遺物

(1) 縄文時代後期

縄文時代後期の土器はVI～XI類である。土器の全体の出土は合計150点である。そのうち48点を図示した。土器内訳は、分類別ごとにVI類土器7点(図示6点)、VII類土器10点(図示4点)、VIII類土器10点(図示7点)、IX類土器87点(図示18点)、X類土器31点(図示8点)、XI類土器5点(すべて図示)である。

まず、出土土器の分類概要について述べた後、それぞれ詳細について記載する。

なお、石器については、III A層では縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代の土器が出土していることから、こ



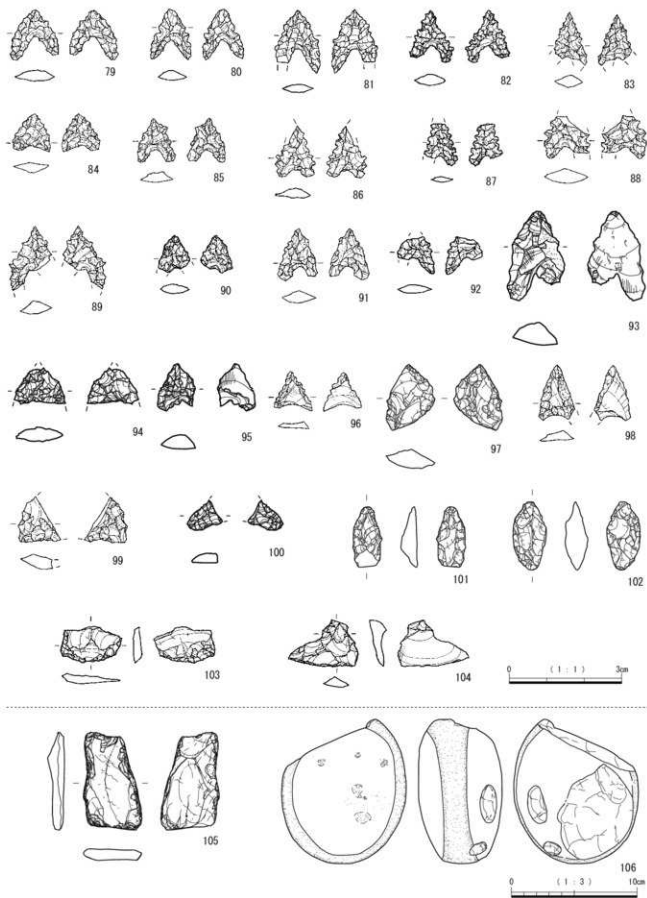
遺物内訳

器種	数
打製石鉄	19
打製石鉄(未)	6
異形石器	3
二次加工剥片	6
打製石斧	1
磨石	1
フレーク・チップ	534

石器素材内訳

石材 1	数	石材 2	数
黒曜石	360	上牛鼻	164
		平木場	0
		三船	22
		日東	13
		桑ノ木津留	0
		上青木	0
		腰岳	36
		西北九州系	0
		椎葉川	0
		霧島系	46
姫島	31		
針尾	48		
安山岩	83		
チャート	7		
ホルンフェルス	16		
頁岩	22		
砂岩	0		
めのう系	82	玉髓	74
		鉄石英	5
		石英	1
		石英	1
		その他	2

第 61 図 石器製作跡



第 62 圖 石器製作跡出土遺物

の節の最後にII層, III a層出土石器としてまとめて取り扱った。

VI類 (第63図)

口縁部に2条の並行凹線や沈線で文様を施すのが特徴である。その文様は、棒状工具で直線的な沈線文を施すものである。調整は貝殻条痕を内外面に施すものが多い。指宿式土器と呼ばれる土器である。

VII類 (第64図)

口縁端部を肥厚させ断面三角形形状をなす。そこに連続爪形文を施すのが特徴である。松山式土器とよばれる土器である。

VIII類 (第64図・65図)

口縁端部を肥厚させ、断面三角形形状をなすが、VII類より幅が広く「く」の字形を呈す。そこに貝殻腹縁部や棒状工具による連続刺突文や連続爪形文、凹線文等を施すのが特徴である。市来式土器とよばれる土器である。

IX類 (第66図)

口縁部は「く」の字状に屈折し、そこに並行沈線と磨消縄文を施し、丸く膨らむ胴部に向かって頸部が強くと屈曲するのが特徴である。頸部にも平行沈線や磨消縄文、刻目連点文を施す。また、口縁内外面にヘラによるナデやミガキを施すものが多い。西平式土器とよばれる土器である。

X類 (第67図)

縄文時代後期の底部をX類とした。

XI類 (第68図)

土器片を利用した縄文時代後期の通常メンコと呼ばれる円盤状土製加工品をXI類とした。

VI類 (第63図107~112)

107は深鉢の波状口縁部で、口縁端部がわずかに外反する。口縁部に横位の深い凹線を施し、その下部に凹線で靴形文を施す。内外面ともに横位の条痕の後、ナデを行う。108は深鉢の口縁部で、口縁部に浅い横位の凹線を施し、その下部に三角形形状の靴形文を施す。内外面と

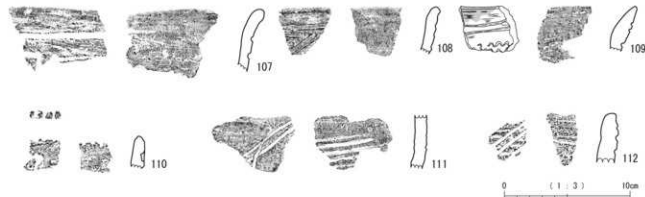
ともに丁寧にナデを行う。107・108は橙色を呈し、いわゆる「指宿ピンク」のような色調を呈する。109は深鉢の口縁部で、口縁部に2条の平行沈線を施し、その下部に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を施す。口縁端部に一部ススが付着する。外面は丁寧にナデを行い、内面は横位の条痕の後ナデを行う。110は口縁部で口唇部に刻目を施し、口縁部に曲線状の沈線を施す。内外面ともに丁寧にナデを行う。111は深鉢の胴部で、口縁部に近い部位である。外面には斜位の平行沈線と縦位の沈線を施す。内外面ともに条痕の後、外面は丁寧にナデを行い、内面はナデを行う。112は口縁部で、口縁部に3条の平行沈線を施し、斜位の条痕を施す。内外面ともにナデを行う。

VII類 (第64図113~116)

113は深鉢の口縁部で、口縁部に斜位の連続爪形刺突文を2重に施し、その間に凹線を施す。口縁は波状を呈し、谷部にリボン状の粘土貼付けを施し、口縁部の貼付け部との境に段差を設ける。粘土貼付け部にも斜位の連続爪形刺突文を施す。粘土貼付け部の中央には上部から棒状工具で深い凹みをつける。内外面ともにナデを行う。114~116は深鉢の波状口縁部~胴部で、口縁部に斜位の連続爪形刺突文を施す。口縁断面は三角形形状で「く」の字状を呈し、口縁端部から口縁部に向かって強くくびれる。内外面ともにナデを行う。116は口縁部に少量のススが付着する。114~116は同一個体と思われる。

VIII類 (第64図117~121, 第65図122・123)

117は口縁部で、口縁部に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文とその上下に棒状工具による連続刺突文を施す。口縁断面は三角形形状を呈し、粘土貼付けにより丁寧に整形する。内外面は条痕の後、軽くナデを行う。118は口縁部で、口縁部に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を施す。内外面ともにナデを行う。119は口縁部で、口縁部に斜位の爪形刺突文を施し、その下に凹線を施す。口唇内面はヘラ状工具で丁寧に縁取り整形する。内面は条痕を行う。120は口縁部で、口縁部に斜位の連続刺突文を施す。断面はゆるい三角形形状を呈す。内外面ともに丁



第63図 縄文時代後期の土器(1) VI類

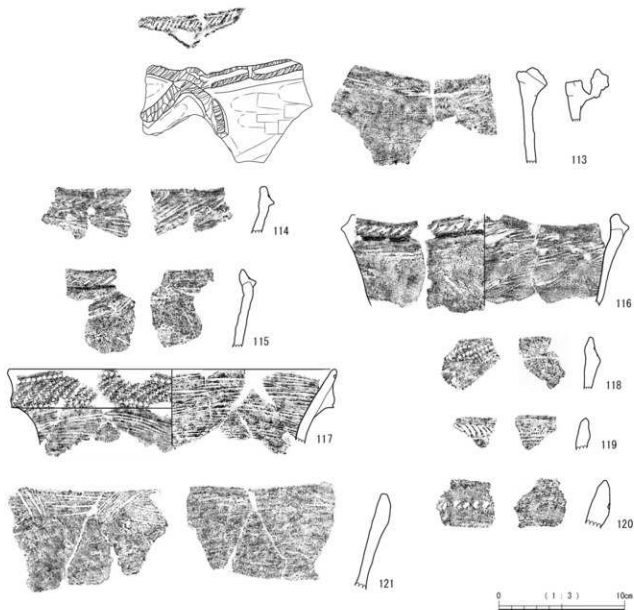
寧にナデを行う。121は口縁部～胴部で、口縁部に4条の平行沈線を施した後、3条の斜位の平行沈線を施す。口縁は波状口縁で断面は肥厚し、外側に開く。内外面ともにナデを行う。122・123は口縁部～胴部で、波状口縁を呈し、口縁部上下に斜位の連続爪形刺突文を施し、その間に3条の横位の凹線、山部に3個一対の横「C」字形押圧文を施す。谷部には2個一対の逆「C」字形押圧文を施す。内外面ともにナデを行い、口縁部外面は丁寧にナデを行う。122は外面に一部ススが附着する。

Ⅷ類 (第66図124～141)

124～129は口縁に縄文を転がした後、沈線を施す一群である。

124～128は口縁部に縄文を施した後、2条の沈線を重ねたもので一部を丁寧にナデ消し、いわゆる磨消縄文の技法がみられる土器である。口縁端部内面には工具を強

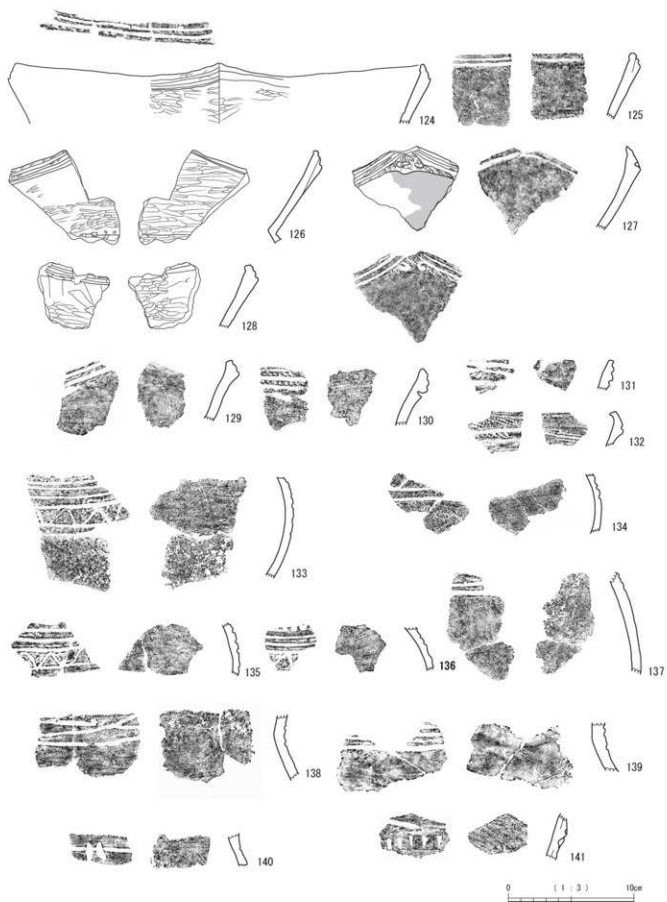
く押し当てて整形し段差をつける。内外面ともに丁寧にナデを行い、ヘラミガキを行う。124は口径32.5cmの波状を呈する口縁部で、口縁部には一部縄文が残る。山形を呈する口縁部の頂には棒状工具による刺突文の痕跡が残る。口縁部～胴部は外に向かってまっすぐ開き、口縁部でやや内側に立ち上がる。125は口縁部で、124・126と同じ文様形態をもち、同一個体と考えられる。126は波状を呈する口縁部～頭部で、口縁部には一部縄文がナデ消されずに残る。頭部は強くくびれ、外面に刺突文が巡る。頭部から口縁部に向かってまっすぐ外に開いて伸び、口縁部はやや内側に立ち上がる。127は波状を呈する口縁部で山部に棒状工具による2個一対の深い刺突文を施す。刺突文の周辺は縄文がナデ消されずに残る。外面にはススが附着する。124～127は内面が灰黄褐色を呈する。128は口縁部形態は124～127と同様であるが、内



第64図 縄文時代後期の土器(2)Ⅶ類・Ⅷ類



第 65 図 縄文時代後期の土器 (3) Ⅱ類



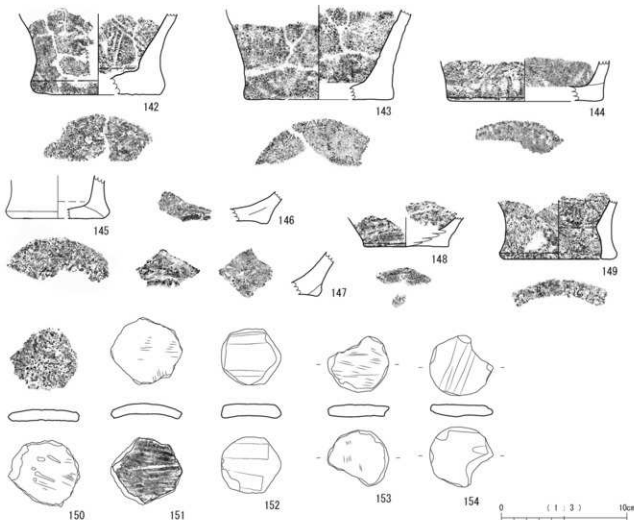
第66図 縄文時代後期の土器（4）Ⅹ類

面が黒褐色を呈する。

129は波状を呈する口縁部で、2条の平行沈線とその間に磨消縄文を施す。口唇部は丁寧に整形し、内外面ともナデを行う。130は口縁部で、口縁部に2条の平行沈線とその間に磨消縄文を施す。口縁部下位に横位のヘラ状工具による2個の刺突文を施す。内外面ともナデを行う。131は口縁部で3条の横位の沈線とその間に磨消縄文を施す。下位2条の沈線はどちらかが「C」字状または「L」字状に屈曲してつながる。内外面ともナデを行う。132は波状を呈する口縁部で、口縁部に2条の沈線を施し、口縁全体に斜めにRL原体の縄文を施す。上位の沈線はごく浅い。口唇部は丁寧にヘラで整形し、口唇内面は工具を押し当て、内面に強く屈曲する。内面は条痕の後、丁寧にナデ、外面も丁寧にナデを行う。

133～137は鉢の頸部～胴部で、頸部に刺突文が施され、その下位に横位の平行沈線と波状沈線が施される一群である。133は頸部～胴部で、頸部に刺突文を施し、その下位に4条の横位の平行沈線、波状沈線、2条の横位の平行沈線を施す。平行沈線の間には磨消縄文を施す。胴部は丸みを帯びる。内外面ともに丁寧にナデを行

う。134は胴部で、波状沈線とその下位に2条の横位の平行沈線を施す。内外面ともに丁寧にナデを行う。外面にごく少量のススが附着する。135は頸部～胴部で、4条の横位の平行沈線、波状沈線、1条の横位の沈線を施す。平行沈線の間には磨消縄文を施す。内外面ともに丁寧にナデを行う。外面にススが附着する。133～135は外面が明赤褐色、内面がにぶい黄色を呈し、同一個体と考えられる。136は頸部～胴部で、頸部に刺突文を施し、その下位に4条の平行沈線、波状沈線、横位の沈線を施す。平行沈線の間には縄文を施し、ナデで磨消している。内外面ともに丁寧にナデを行う。焼成はとても良好。137は胴部で、波状沈線とその下位に2条の横位の平行沈線を施す。平行沈線の間には磨消縄文がみえる。内外面ともにナデを行う。138は頸部～胴部で、3条の横位の沈線を施し、その間に爪形で擬縄文を施す。「C」字状の押圧文が1か所みられる。内外面ともにナデを行う。139は頸部～胴部で、3条の横位の平行沈線を施す。沈線間には縄文を施した後、磨消している。内外面ともにナデを行う。140は頸部で、連続刺突文の下位に横位の沈線を施し、沈線上に2個一対の深い「ハ」字状の刺突文



第 67 図 縄文時代後期の土器 (5) X類・XI類

を施す。その下位にも横位の沈線を施す。内外面ともにナデを行う。胎土に白石を多く含む。141は口縁に近い胴部で斜位の深い平行沈線とその下位に棒状工具による縦位の連続刺突文を施す。文様体は粘土を貼付け肥厚する。内外面ともに丁寧にナデを行う。

X類 (第67図142～149)

142～145は底部からの立ち上がりがあり、はじめわずかに内側に傾きながら、その後ゆるやかに外反する。142は外面・底面ともに丁寧なナデを行う。底面には白土が多量に付着し、底部から胴部に立ち上がる部分にも一部付着する。143は焼成不良で調整が摩擦し不明瞭である。底面には白土が少量付着する。144は内外底面ともに丁寧なナデを行う。145は内外底面ともに丁寧なナデを行う。底面端部はつまんで整形する。

146・147はやや上げ底の底部で、内外底面ともにとも丁寧なナデを行う。底部端部はヘラ状工具を押し当てて段をつけて整形する。IX類に接合すると考えられる。148は内外底面ともにナデを行う。底部端部はつまみ上げて整形する。

149は中空の脚部である。内外底面ともに丁寧なナデを行う。底部接地面には白土が多量に付着する。

XI類 (第67図150～154)

150～154は胴部を利用した円盤状土製品である。150は内外面ともにナデを行い、側面は打ち欠いて円形を成形する。151は内面は条痕の後、内外面とも丁寧なナデを行い、側面は打ち欠いて成形する。152は内外面ともにナデを行い、側面は打ち欠いた後、部分的に研磨し成形する。153は内外面とも丁寧なナデを行い、側面は打ち欠いた後、研磨し成形する。154は内外面ともナデを行い、側面は打ち欠いた後、研磨し成形する。一部スグが付着する。

(2) 縄文時代晩期 (第68図)

縄文時代晩期の土器はすべて図示している。

155は深鉢の口縁部で、強く外反する。口縁部は肥厚させている。内外面とも粗いナデで調整している。156は浅鉢の口縁部である。内外面とも横位のヘラミガキで、黒色を呈している。157は深鉢の底部で、復元径16cmである。内外面ともナデで調整している。底面には厚みを増すために、粘土を澁ぎ足し、丸底状を呈して、座りが悪い。後期の深鉢の底部とは特徴が違うために、晩期の

土器として図示した。158は浅鉢の胴部である。1条の細沈線が施されている。内外面ともミガキに近い丁寧なナデで調整している。

(3) II・III層出土石器 (第69・70図)

中津野遺跡台地部II・III層で、出土した石器類の総数は1,372点である。器種別の内訳は、打製石鏃39点、石匙6点、スクレイパー3点、石錐1点、二次加工および使用痕剥片17点、残核16点、磨製石斧19点、磨石・礮石類12点、石皿5点、磯器1点、軽石製品2点、剥片・砕片1,251点である。図示の内訳は、各石器記載の項を参照してほしい。なお、石器の石材鑑定は肉眼観察によるものである。

包含層と時期は、II・III層にかけて出土し、層位による時期区分が明確でないため、この項で縄文時代前期～後期に帰属する石器として報告する。一部弥生時代に帰属する可能性もある。

石鏃・石鏃未製品 (第71・72図)

II・III層から出土した打製石鏃、未製品、破損品を含めて39点出土し、35点を図示した。主に形状を観察して、以下のように分類を行った。

石鏃分類基準

I類 二等辺三角形形状を呈するもの

- a 基部の袈りが浅いもの
- b 基部の袈りが深いもの

II類 正三角形形状を呈するもの

- a 基部の袈りが浅いもの
- b 基部の袈りが深いもの

III類 未製品

I a類 (第71図159～165)

二等辺三角形形状を呈し、袈りが浅い打製石鏃である。159は長幅比2.1:1と最大差の比率で、縦長である。右脚部が少し欠損している。西北九州系黒曜石である。160・161は長幅比が1.7:1と比較的縦長で、安山岩である。162は裏面に主要剥離面を残し、両側縁部は雑な整形である。未製品の可能性もある。石材はホルンフェルスである。163は桑ノ木津留産黒曜石を使用し、裏が見えるほど薄く仕上げられる。164は左脚部を欠損している。上牛鼻産黒曜石である。165は両側縁に丁寧に押圧剥離を施し、鋸歯状になっている。右脚部は欠損している。針尾産黒曜石である。

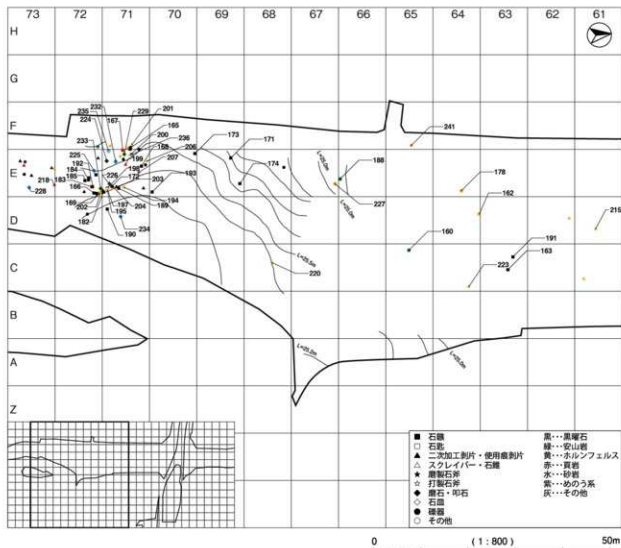


第68図 縄文時代晩期の土器

I b類 (第71図166~170, 第72図171~187)

二等辺三角形形状を呈し、挟りが深い打製石鏃である。166・176は長幅比1.7:1と縦長である。両側縁に押圧剥離を施し、鋸歯状になっている。166は姫島産黒曜石、167は頁岩である。168~170は長幅比1.2:1であり、挟りが深い。168は針尾産黒曜石、169・170はホルンフェルスである。171~174は長幅比1.6~1.8:1で比較的縦長で、両側縁は鋸歯状を呈している。172は最大長1.7cmの小型で挟りが深い。171は腰岳産黒曜石、172・173は針尾産黒曜石、174は西北九州系黒曜石である。175は長幅比1.2:1で、左脚部を欠損している。針尾産黒曜石

である。176は長幅比2.0:1で縦長で、丁寧な押圧剥離を施し、両側縁は鋸歯状をしている。ホルンフェルスである。177は両側縁・脚部に丁寧な押圧剥離を施し、挟りも半円を描き、きれいな仕上がりとになっている。ホルンフェルスである。178は右脚部を欠損している。両側縁は鋸歯状を呈している。ホルンフェルスである。179は最大長3.5cm・最大幅2.3cm・重量2.19gで、本遺跡で最大の打製石鏃である。頁岩である。180は先端部を欠損している。両面に剥離面を残しているが、両側縁に押圧剥離を施し、形状もしっかりとしている。針尾産黒曜石である。181は両基部を欠損している。表面に自然面



第69図 II・III層出土石器分布図(1)

を残しているが、両側縁はしっかりと整形されている。ホルンフェルスである。182は小型打製石鏃で、両側縁は鋸歯状を呈している。姫島産黒曜石である。183～187は欠損が激しいが、その形状からI b類に含めた。183は上牛鼻産黒曜石、184は姫島産黒曜石、185は針尾産黒曜石、186は頁岩、187は腰岳産黒曜石である。

II a類 (第72図188)

正三角形を呈するもので、基部の抉りが浅いものである。188は長幅比が0.9 : 1と最大幅の方が広い。両側

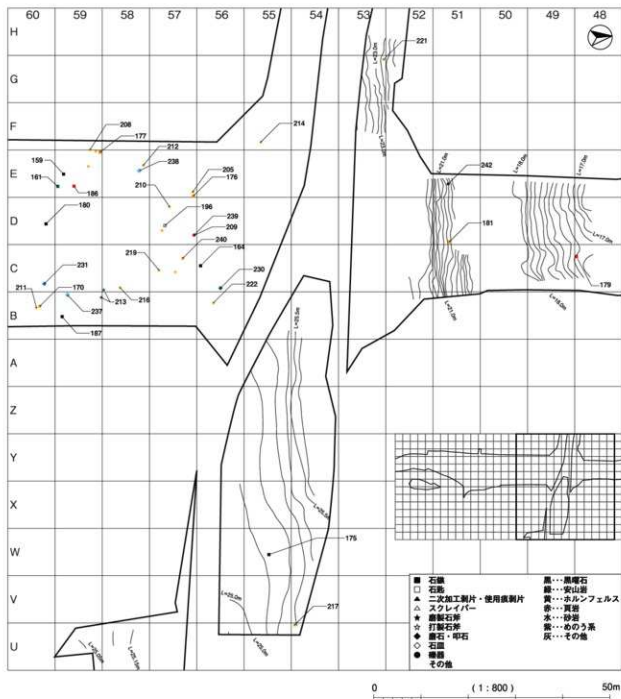
縁に丁寧に押圧剥離を施し、丁寧な作りである。安山岩である。

II b類 (第72図189)

正三角形を呈するもので、基部の抉りが深いものである。189は先端部が錐状のハート形を呈しており、両側縁は鋸歯状である。針尾産黒曜石である。

III類 (第72図190～193)

打製石鏃の未製品である。190は裏面に自然面を残し、両側縁は全体的に粗い調整である。上牛鼻産の黒曜石で



第70図 II・III層出土石器分布図(2)

ある。191は表面は押圧剥離を施してあるが、裏面は粗い調整である。西北九州系黒曜石である。192は形状を整えてあるが、基部形成が粗い。ホルンフェルスである。193は全体形状は二等辺三角形を呈しているが、表面に自然面を残し、裏面には主要剥離面を残す。針尾産黒曜石である。

石匙 (第73図194~198)

194~198は横長の石匙である。6点出土し、5点を図示した。194・195は横方向の刃部で、しっかりとつまみを作り出されている。194・195ともホルンフェルスである。196は刃部が弧状を呈するもので、半分欠損している。刃部は押圧剥離を施しているが、全体的に粗い調整で、未製品の可能性もある。玉随である。197は一見したら磨製石匙のようだが、ローリングと石材の質による経年劣化により全体が摩耗している。表面には削痕がのこり、横方向への刃部形成も見られる。198は表面に自然面を残し、大部分を欠損している。鉄石英である。

スクレイパー (第74図199~201)

スクレイパーは3点出土し、すべてを図示した。いずれも剥片の縁辺部や端部に二次調整を行い、刃部が

形成される。199は厚みのある円形の素材を利用している。頁岩である。200・201は横長の剥片を利用したもので、ホルンフェルスである。

石錐 (第74図202)

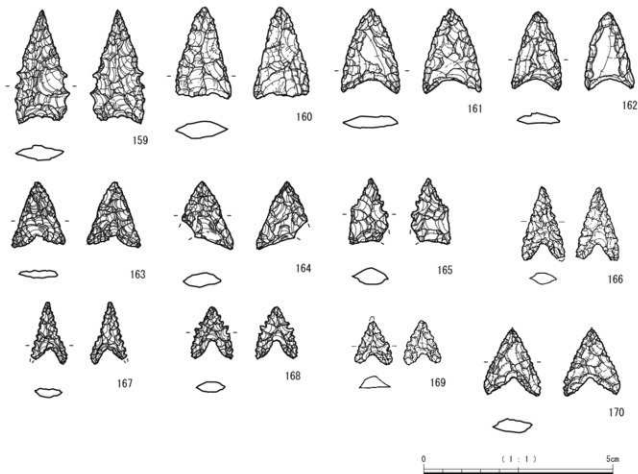
石錐は1点出土し、1点を図示した。202は縦長の剥片を利用し、粗い調整剥離によって形が作られ、錐先部は簡単な調整剥離を加えている。ホルンフェルスである。

使用痕剥片・二次加工剥片 (第74図203~205)

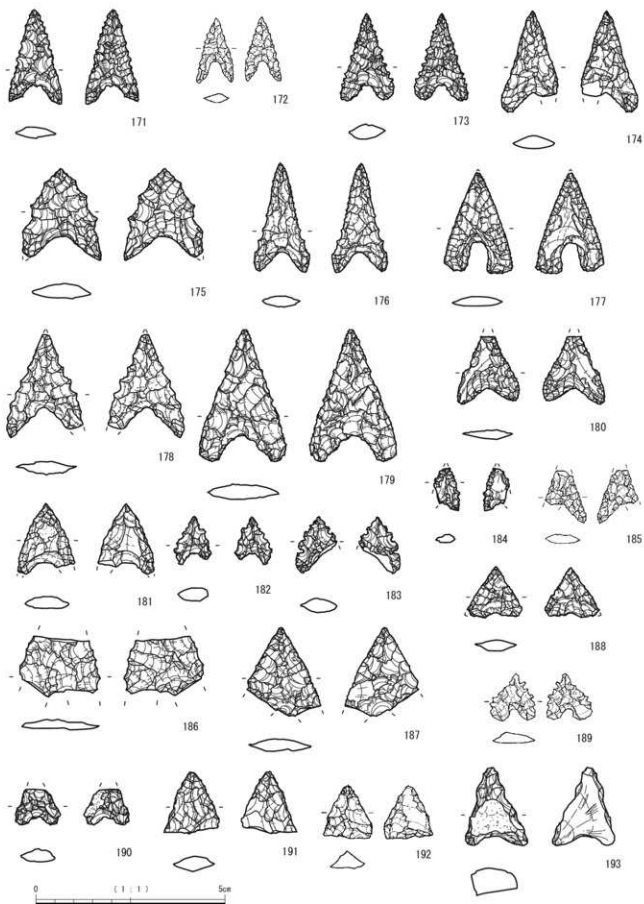
204は使用痕剥片である。横長の剥片で、表面に自然面を、裏面には主要剥離面を残す。側縁部に微細な剥離が見られる。ホルンフェルスである。203・205は二次加工剥片である。203は小型の円形状の厚みのある剥片で、側縁部に二次加工を施してある。上半鼻産の黒曜石である。205は縦長の剥片で、側縁部の一部に二次加工を施してある。ホルンフェルスである。

打製石斧 (第75図206~209)

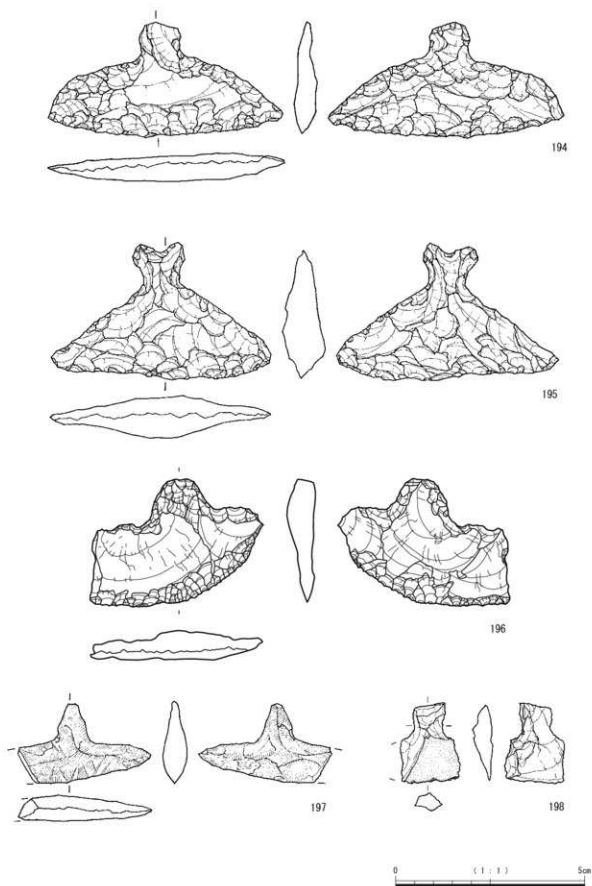
打製石斧は8点出土し、4点を図示した。いずれも刃部のみで、206・208はホルンフェルス、207・209は頁岩である。209は最大幅13.2cmを測り、大型のものである。



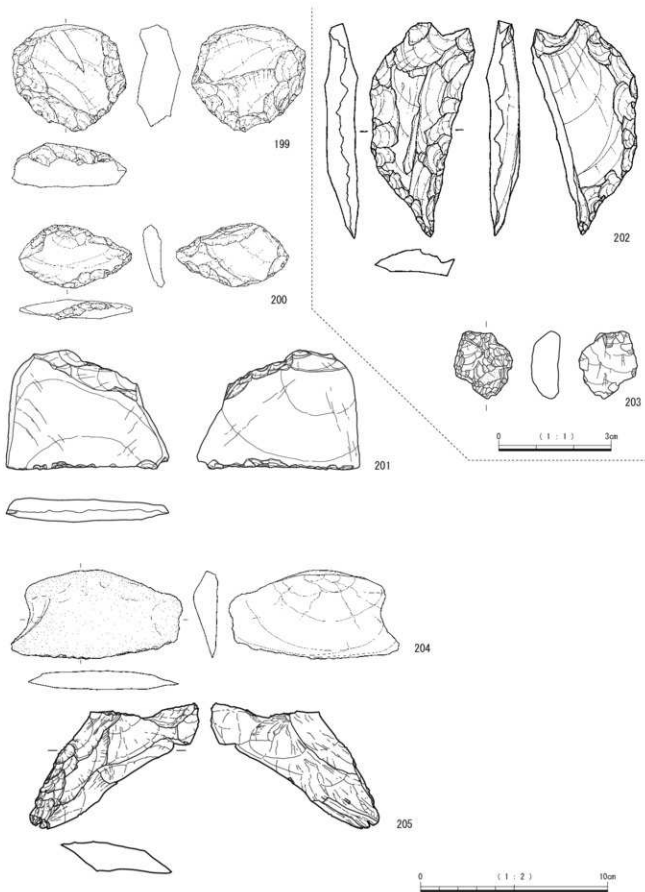
第71図 II・III層出土土器(1) 石錐 I 類



第72圖 II・III層出土石器(2) 石鏃 I・II・III類



第73图 Ⅱ·Ⅲ层出土石器(3)石匙



第74図 II・III層出土石器(4) スクレイパー・石錐・剥片

磨製石斧（第75図210～212、第76図213～223）

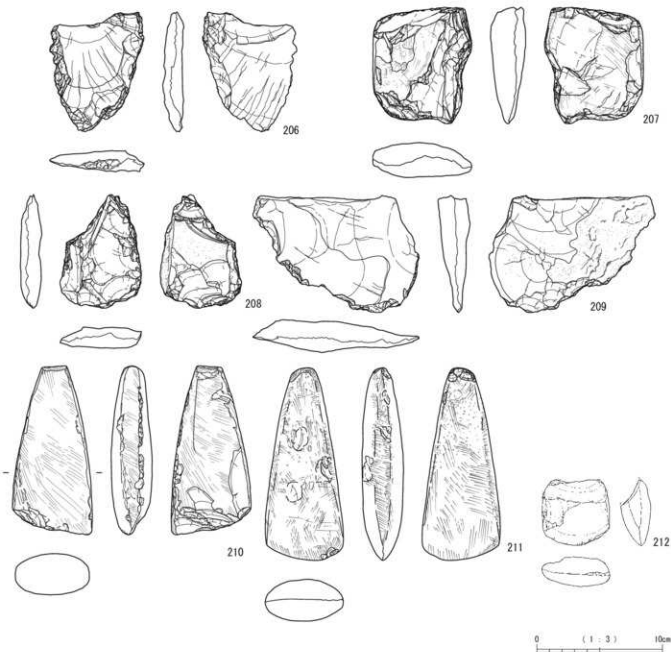
磨製石斧は19点出土し、14点を図示した。

210～215は厚みと基部が細くなり、刃部が蛤の形を呈するものである。210は刃部破損後、粗割りして打製の刃部を再成形している。ホルンフェルスである。211は完形で、ホルンフェルスである。212は刃部のみで、ホルンフェルスである。213は刃部が刃損し、剥落が激しい。安山岩である。214は両側面を細かい敲打で整形している。ホルンフェルスである。

215～217は厚みがあり、刃部が蛤の形を呈するが、基部が幅広のものであり、その形状から弥生時代に属する

可能性もある一群である。215～217はホルンフェルスである。

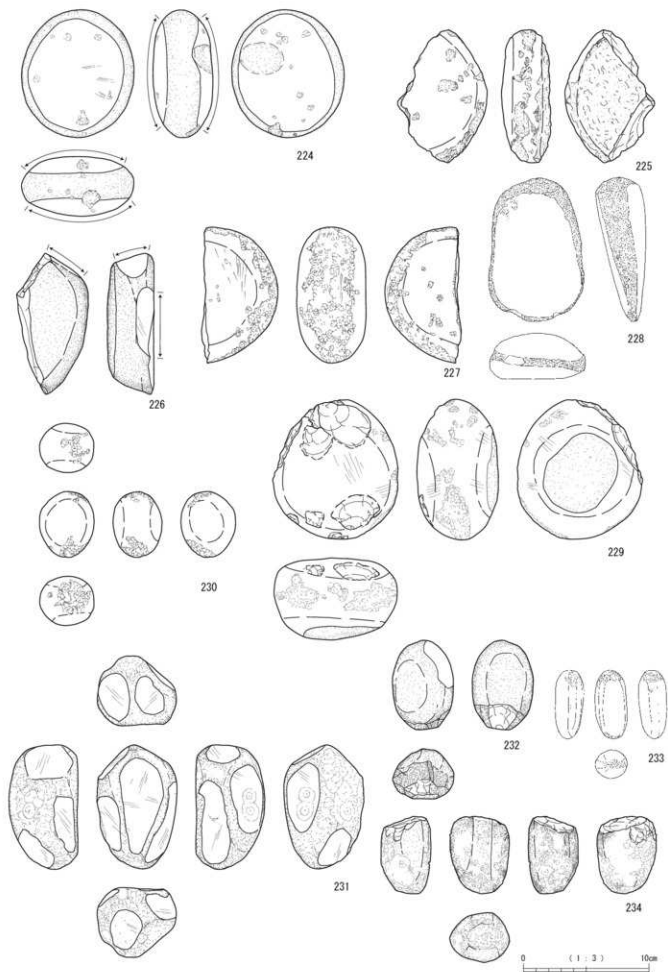
218～223は、刃部が扁平で小型の磨製石斧である。219～223はホルンフェルスである。218～220は丁寧な作りをしている。219は刃部のみで220は基部へ胴部である。221は刃部が欠損しており、裏面が大きく剥離している。222はホルンフェルスで、両側面に打製の刃部を成形している。磨製石斧から打製石斧へ転用したと考えられる。223は刃部を片方しか持たないホルンフェルス製の扁平片刃石斧である。弥生時代に属する可能性がある。



第75図 II・III層出土石器 (5) 打製石斧・磨製石斧



第76图 II·III层出土石器(6)磨製石斧



第 77 图 II·Ⅲ层出土石器(7)磨石·敲石類

磨石・敲石類 (第77図224~234)

磨石・敲石類は12点出土し、すべてを図示した。224~226は磨石である。224は花崗岩で、両面を磨面として使用している。225・226は砂岩である。

227~232は全面もしくは部分的に磨面を有し、敲打痕が見られ、磨石と敲石を併用したものである。227はホルンフェルスで、両面に磨面、側面に敲打痕を有する。228は砂岩で、両面に磨面、側面に敲打痕を有する。229は安山岩で、両面に磨面、側面に敲打痕を有する。230は安山岩、232は砂岩で、小型で両面に部分的に磨面を有し、上下面に敲打痕を有する。231は砂岩で、多方面を磨面として使用して、平坦面を成形するほど使用している。磨面として使用しなかった表面を敲石として利用している。

233・234は敲石である。233は小型の敲石で、安山岩である。234は砂岩で被熱を受けている。

石皿 (第78図235~238)

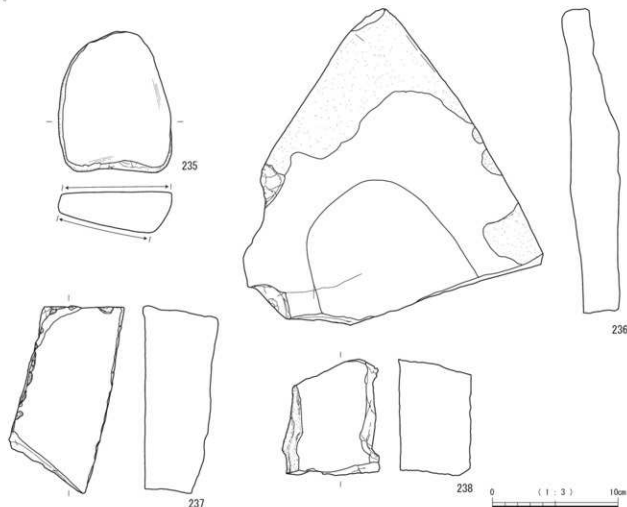
石皿は5点出土し、4点を図示した。いずれも片面に使用面あり、明瞭な凹みは見られなかった。235~238は砂岩である。237は表面の両側縁部に剝離調整が見られる。

礫器 (第79図239~241)

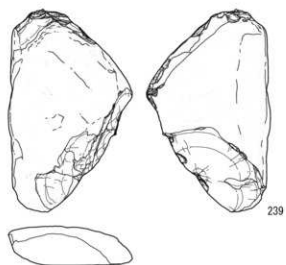
礫器は3点図示した。239は頁岩で、一辺のみ刃部を成形する。240・241はホルンフェルスで一辺のみ刃部を成形する。

軽石製品 (第79図242)

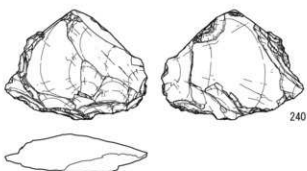
軽石製品は2点出土し、そのうち1点を図示した。242は舟形軽石製品である。上面が丸みを帯びており軸先を、下面は丁寧な研磨で平坦面を作り出しており船尾を思わせる。右側面は欠損しているが、左側面も研磨して平坦面を作り出し、舷側を思わせる。裏面は全体的に丁寧な研磨により丸みを帯びている。



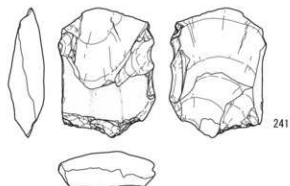
第78図 II・III層出土石器(8)石皿



239

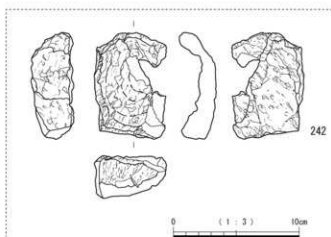


240



241

0 (1:4) 10cm



242

0 (1:3) 10cm

第79圖 Ⅱ・Ⅲ層出土石器(9) 礫器・輕石製品

第5節 弥生時代・古墳時代の調査

1 調査概要

弥生時代・古墳時代の遺構・遺物は少なく、包含層もほぼ同じであることから、本節でまとめて報告する。

弥生時代・古墳時代の調査は、その遺物包含層としてⅡ層とⅢa層（アカホヤ火山灰二次堆積土）が対象となった。まず、表土を重機で除去した後、Ⅱ層・Ⅲa層を順次鋤簾等を用いた人力掘削によって掘り下げ、遺物・遺構の検出に努めた。

弥生時代・古墳時代を対象としたⅡ層・Ⅲa層の調査範囲は、中津野遺跡台地部のほぼ全調査区に及んだ。

Ⅱ層・Ⅲa層での遺物・遺構の主体は、中津野遺跡台地部でも最も標高の高い南側である。

現在の地形や55・56区、68～72区付近のⅢb層上面標高値25～25.5mから57～80区付近までは、多少の高低差はありつつも、台地上の平坦な地形であったと考えられる。B～E-57～59区は台地部の縁辺部に位置しており、これより北側は低地・低湿地部へ続く傾斜する地形である。遺跡全体としては、遺跡南側から北側へかけて、緩やかに傾斜しており、弥生時代・古墳時代も現在の地形に近いと推定される。

弥生時代の遺構は、平成19年度調査のE・F-72・73区検出の竪穴住居跡1基である。遺物は、調査区全体に

まばらに出土する状況であった。古墳時代については、遺構は検出しなかった。

弥生時代土器は合計22点出土した。そのうち5点を図示した。古墳時代の土器は合計18点出土し6点を図示した。

なお、石器については、Ⅱ・Ⅲa層からは縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代の遺物が出土するため、器種・石材の判断をしたのち、弥生時代・古墳時代の石器と考えられるものを図示した。

2 遺構（第80図）

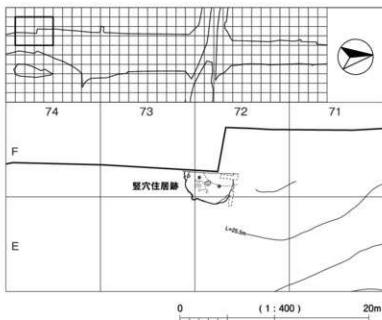
台地部で検出された当該時期と判断した遺構は平成19年度検出の竪穴住居跡1基である。

遺構内から同時期の土器が出土したため、弥生時代の遺構と判断した。

調査については、2つの土層ベルトを設置し、長辺（A-A'）を主軸にして、遺構を1/4ずつ慎重に掘削した。その後、2方向からの土層断面を実測した後、完掘をした。遺物は基本遺構内に残し、出土位置・レベルを記録後、番号をつけて取り上げている。

竪穴住居跡（第81・82図）

E・F-72・73区のⅡ層で検出した。遺構北側2か所は、現代のイモ穴による攪乱を受けていた。西側は調査区外へ続いており、遺構2/3程度を調査した。N22°Wを長軸とした長辺522cm、残存短辺308cmの円形で、検



第80図 弥生時代遺構配置図

出面から床面までの深さは約25cmである。床面はほぼ平坦で、壁面の立ち上がりは緩やかである。Ⅲb層（アカホヤ火山灰）を床面としており、貼り床は確認できなかった。柱穴は4本検出しており、P1・P2・P3が主柱穴と考えられる。P1は長径約64cm・短径約50cm、P2は長径約32cm・短径約30cm、P3は長径約34cm・短径約30cmである。深さは記録がなく詳細は不明である。P4（長径約32cm・短径約30cm）は壁面沿いに位置しており、遺構南側の凸部とあわせて側柱跡の可能性もある。

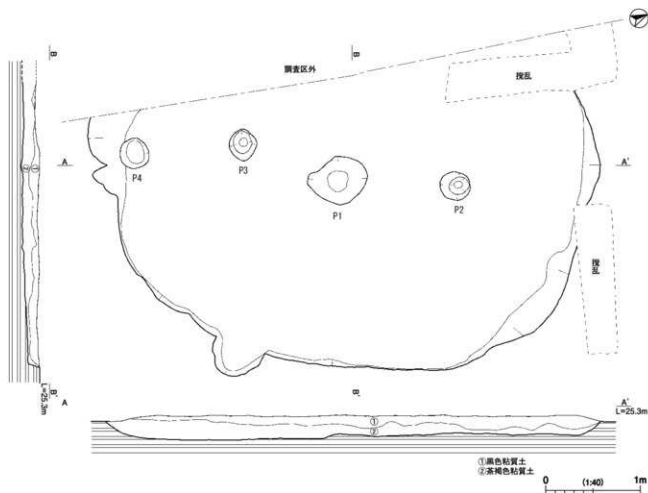
埋土は2つに分かれ、上層が黒色の粘質土で、下層がアカホヤ火山灰のバミスが混じる茶褐色の粘質土である。レンズ状に堆積しており、遺構廃絶後に自然堆積したものと考えられる。

遺物は、①層から土器が多く出土しており、②層からチップやブレイクなどの石器製作に関わる遺物が多い。①層遺物は流れ込みの可能性が高い。53点の土器が出土し、そのうち4点を図示した。石器は132点出土し、石鏃1点、石鏃木製品1点、スクレイパーを1点、使用痕剥片を2点図示した。石材は黒曜石124点（腰岳111点、

針尾2点、上牛鼻10点、日東系1点）、安山岩3点、砂岩3点、玉髓1点、ホルンフェルス1点である。

243は鉢形土器の口縁部である。口縁は内傾し、胴部に向けて膨らみをもつ。口縁部外面に浅い刻みがあり、胴部には突帯があり、刻みを施している。外面は剥落が激しく、内面は丁寧なナデで調整している。244は鉢形土器の胴部で、243と同一個体の可能性がある。突帯を貼り付け、刻みを施している。外面はススが全面に付着している（第5章自然科学分析 試料5）。内面は丁寧なナデで調整している。245は甕形土器の口縁部である。口唇部は平坦に整形されており、2条の突帯を貼り付けてある。内外面ともナデで調整している。焼成は良好で、金雲母を含んでいる。246は甕形土器の底部である。底径8cmあり、外面をユビオサエでつまみ上げて整形している。内外面ともナデで調整している。遺構内の他の土器と比較して、器壁が厚い。243・244は高橋式土器、245は弥生時代前期の土器である。

247は針尾産黒曜石の石鏃である。248は腰岳産黒曜石の石鏃木製品である。刃部は押圧剥離を行っているが、



第81図 竪穴住居跡



第 82 図 竪穴住跡遺物出土状況及び出土遺物

基部は浅く打ち欠いただけである。刃部先端は欠損している。249～251は巖岳産黒曜石である。249はスクレイパーである。250・251は使用痕剥片である。

3 遺物 (第83図)

(1) 弥生時代 (252～258)

252～258は弥生時代の土器である。

252は小型の甕形土器の口縁部である。口唇部に丸身を帯びた突帯があり、斜め方向の刻みを施している。外面はミガキで調整して全面にススが付着している。内面は丁寧なナデで調整している。253は甕形土器の口縁部である。口縁部を大きく外反させ、口唇部に斜め方向の刻みを施している。外面は横方向のヘラナデ、内面はナデで調整している。焼成は良好で、胎土に金雲母・角閃石が含まれる。254は甕形土器の胴部である。2条の突帯があり、摩擦しておりはつきりしないが、浅い刻みを施している。内外面ともナデで調整している。252～254は高橋式土器に比定される。

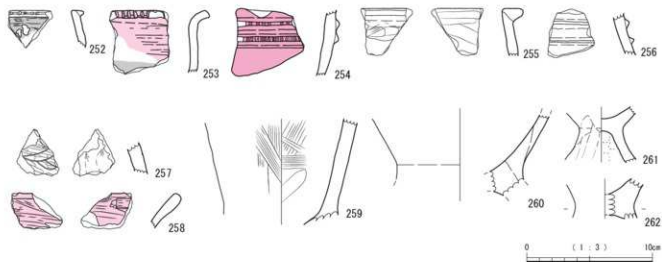
255は甕形土器の口縁部である。口縁部は逆L字状に屈曲している。内外面ともナデで調整している。焼成は良くない。256は甕形土器の胴部である。2条の突帯があり、内外面ともナデで調整している。内面にはユビオサエの痕が残る。255・256は入来I式土器と比定される。

257は甕形土器の胴部である。外面に線刻で舟または魚のような文様を施しているがはつきりしない。外面は丁寧なミガキを行い、内面はナデ調整でユビオサエの痕が残る。弥生時代の可能性もある線刻土器である。258は甕形土器の口縁部で、口縁部が「ハ」の字に強く外反するものである。口唇部付近は肥厚している。内外面とも朱が施してあり、丁寧なナデで調整してある。

(2) 古墳時代 (259～262)

259～262は古墳時代の土器である。

259は甕形土器の胴部から底部付近である。外面は縦方向のヘラケズリ、胴部内面はヘラケズリである。底部付近の内面は丁寧なヘラナデを行っている。260は甕形土器の底部と脚台の接合部である。内外面とも摩擦している。261は脚部である。底面が剥落しているが脚台の形に近く、底径5.2cmである。外面は縦位のナデ調整で、内面はユビオサエの痕が残る。262は甕形土器の底部と脚部の接合部である。内外面ともナデで調整している。



第83図 弥生時代・古墳時代の土器

第6節 古代・中近世の調査

1 調査概要

中近世の調査は、その遺物包含層としてⅡ層が対象となった。多くの遺構が遺物等で明確に中世・近世と分けることができなかつたために、中近世とした。ただし、遺構内遺物で中世・近世と区別がつく遺構は、事実記載に記すこととした。遺物については、古代と中世と近世と時代区分をして記載している。

まず、表土を重機で除去した後、Ⅱ層を順次動土機等を用いた人力掘削によって遺物・遺構の検出に努めた。

中近世のⅡ層の調査に及んだ範囲は、中津野遺跡台地部のほぼ全調査区に及んだ。

Ⅱ層での遺物・遺構の主体は、中津野遺跡台地でも最も標高の高い南側である。

現在の地形が68～72区、55・56区付近のⅢb層上面標高値25～25.5mから80～57区付近までは、多少の高低差はありつつも、台地上の平坦な地形であったと考えられる。B～E-57～59区は台地部の縁辺部に位置しており、これより北側は低地・低地湿地向へ続く傾斜する地形である。遺跡全体としては、遺跡南側から北側へかけて、緩やかに傾斜しており、中近世も現在の地形に近いと推定される。

2 遺構 (第84～87区)

生活関連遺構では、掘立柱建物跡6棟・竪跡3基・土坑6基・溝状遺構8条・古道7条を検出した。

(1) 掘立柱建物跡

台地部で検出された当該時期と判断した掘立柱建物跡6棟である。平成20・21・27年度調査である。

埋土が黒色を呈しており、中近世の遺構と判断した。

調査については、柱穴の配置に注意しながら主軸を設定し、各柱穴を1/2ずつ慎重に掘削して、埋土や柱の痕跡、抜き取り痕を観察、記録を取った。その後、完掘して、再度柱穴の並びの検討を行った後、遺構としての認定を行った。

各建物の柱穴の測定値は、基本的に軸沿いに計測しているが、明らかに長軸や短軸が別にある場合はその箇所を測定している。柱穴間の距離は、柱穴の中心部(心～心)距離を測定している。なお、削平を受けている場合や推定値の場合は、()で記載している。

掘立柱建物跡1号(第88区)

E・F-70・71区のⅢb層上面で検出された。N75°Eを長軸として、北側に一面底を持つ2間×3間の建物である。

柱間は桁行590cm・620cm、梁行400cm・410cm。柱穴は長軸平均34.3cm、短軸平均27.9cm、検出面からの深さ平均34.3cmである。身舎と庇の間は、約90cmである。柱は整然と並んでおり、建物の形状もしっかりとしている。

P5は、細く深さも浅い。底部の柱穴も同様である。

埋土は黒色土の単一である。

P7から青磁が1点(263)出土している。263は桜花皿である。内面に唐草文を描き、見込みに界線が1条巡る。高台中央は凸状に膨らむ。高台内面中位まで施軸する。14世紀後半の明代皿である。

掘立柱建物跡2号(第89区)

E-70区のⅢb層上面で検出された。N68°Wを長軸とする1間×3間の建物である。

柱間は、桁行624cm・594cm、梁行320cm・280cm。柱穴は長軸平均33.0cm、短軸平均28.8cm、検出面からの深さ平均28.8cmである。

桁行間は、200～210cmと均一が取れているが、梁行間は、東側が40cmほど長くなっており、若干いびつな形状となる。

埋土は黒色土の単一である。柱穴内から遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡3号(第90区)

E・F-70区のⅢb層上面で検出された。N32°Wを長軸とする2間×2間で、中心部に柱穴がある総建物である。

柱間は、桁行460cm・446cm、梁行400cm・408cm。柱穴は長軸平均31.8cm、短軸平均25.2cm、検出面からの深さ平均24.5cmである。

北側中央部P8が軸から外れているが、正方形に近い形をしており、比較的均一が取れている。中心部の柱穴はP9・P10と2つ検出されている。新旧関係は不明だが、両柱穴とも、掘立柱建物跡3号に伴うものである。

埋土は黒色土の単一である。柱穴内から遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡4号(第91区)

E-63・64区のⅢa層で検出された。N75°Wを長軸とする1間×2間の建物である。

柱間は、桁行422cm・420cm、梁行410cm・415cm。柱穴は長軸平均34.2cm、短軸平均32.0cm、検出面からの深さ平均35.5cmである。遺構東側の地形が下がっており、柱穴の径が小さくなり、深さが浅くなる。

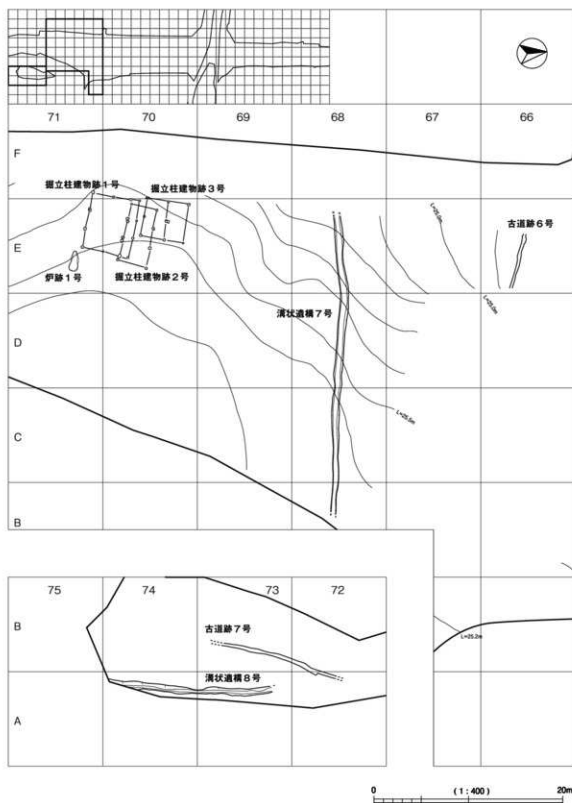
梁行のP1～P6とP3～P4との間が広いため、各中心部に添え柱的な浅い柱穴があったと考えられ、2間×2間の掘立柱建物跡の可能性もある。掘立柱建物跡の形状は、梁、桁とも410～420cmの間隔があり、ほぼ正方形に近い形をしている。

埋土は黒色土の単一である。柱穴内から遺物は出土しなかった。

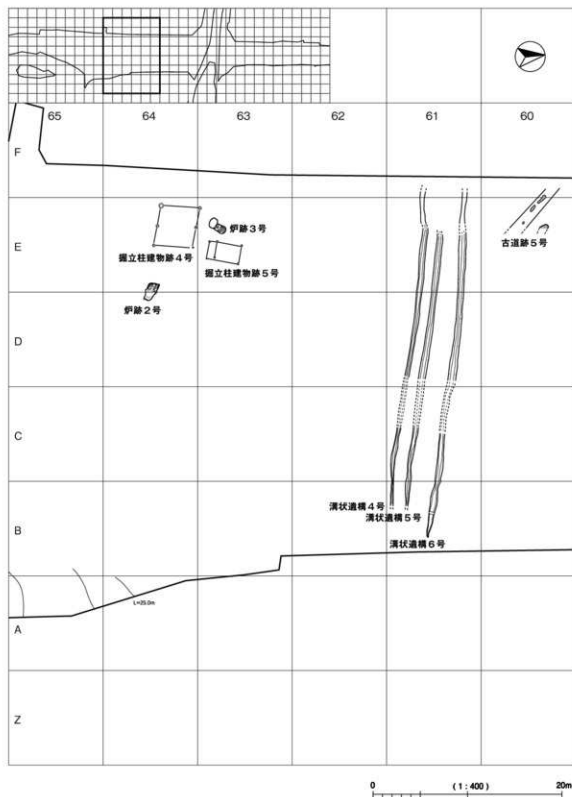
掘立柱建物跡5号(第92区)

E-63区のⅢa層で検出された。N18°Eを長軸とし、南側に一面底を持つ、1間×1間の建物である。

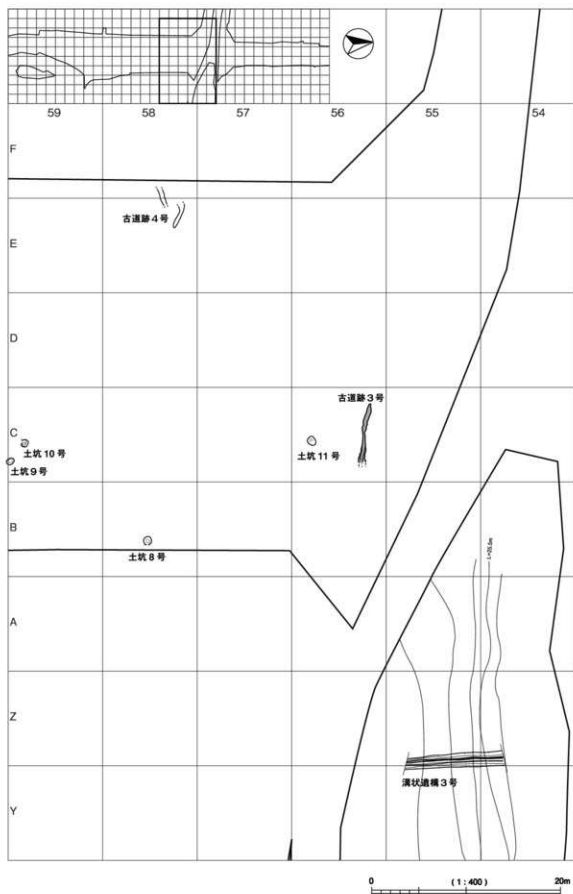
柱間は桁行255cm・263cm、梁行167cm・195cm。柱穴は



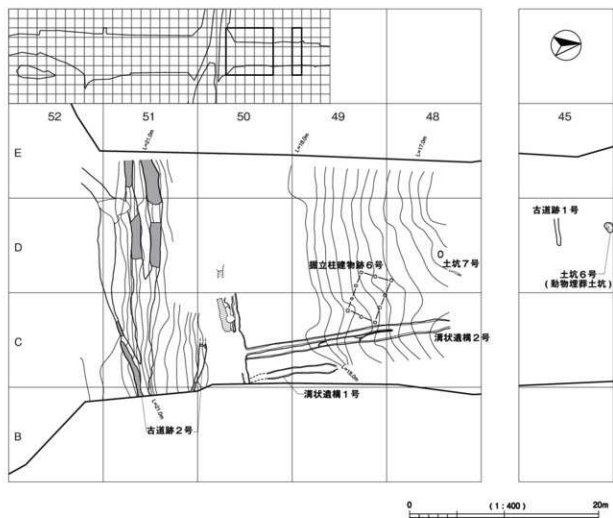
第84圖 中近世遺構配置圖(1)



第 85 圖 中近世遺構配置圖 (2)



第 86 圖 中近世遺構配置圖 (3)



第 87 図 中近世遺構配置図 (4)

長軸平均22.5cm, 短軸平均19.5cm, 検出面からの深さ平均26.2cmである。身舎と庇の間は、約82.5cmである。

柱は比較的整然と並んでいるが、庇の部分若干いびつな形状をしている。他の掘立柱建物跡と比較して、柱穴の径や深さが小さい。時期差によるものなのか、機能による違いなのか不明である。

埋土は黒色土の単一であるが、赤色化した土が混じる。焼土の可能性もある。

柱穴内から遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡 6号 (第93図)

C・D-48・49区のⅢa層で検出された。N75°Wを長軸とする2間×3間の建物である。

柱間は桁行475cm・435cm, 梁行320cm・330cm, 柱穴は

長軸平均37.2cm, 短軸平均33.6cm, 検出面からの深さ平均32.4cmである。

柱は比較的整然と並んでいるが、桁の北側が若干長い。全体的には長方形の形状をしている。他の掘立柱建物跡よりも、柱穴の径や深が大きく、しっかりとした建物である。

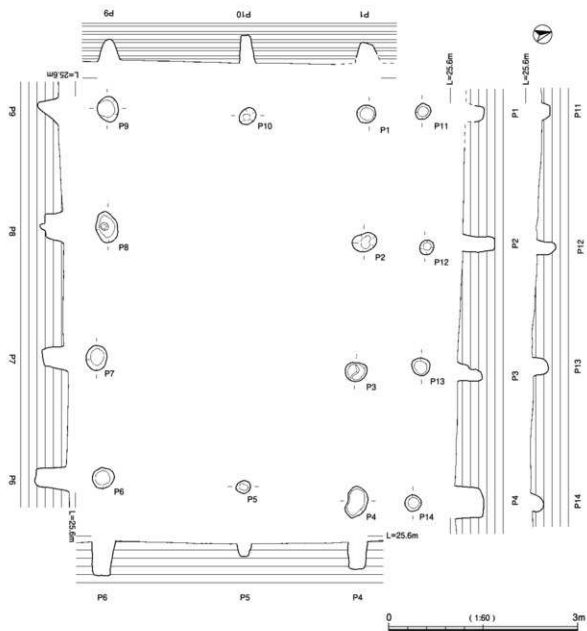
埋土は黒褐色土に黄橙色小バミス (アカホヤ火山灰) を含む単一層で、しまりが無い。

柱穴内から遺物は出土しなかった。

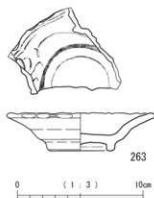
(2) 炉跡 (かまど)

台地部で検出された当該時期と判断した炉跡 (かまど) は3基である。平成20・21年度調査である。

Ⅱ層からⅢ層の検出で、基本的に埋土が黒色を呈して



掘立柱建物跡1号					
番号	柱穴 (cm)			柱穴間距離 (cm)	
	長径	短径	深さ	P1~P2	P2~P3
P1	(32)	(27)	(30)	210	210
P2	40	30	52	210	210
P3	35	28	38	180	180
P4	48	30	44	220	220
P5	22	20	20	190	190
P6	34	32	54	210	210
P7	40	34	38	190	190
P8	50	34	36	220	220
P9	36	33	34	190	190
P10	26	24	42	210	210
P11	26	24	12	190	190
P12	24	22	30	220	220
P13	28	26	26	90	90
P14	26	26	20	90	90



第88图 掘立柱建物跡1号及び出土遺物

おり、糸切りの土師器の出土が周辺で見られたため、中近世の遺構と判断した。

調査については、主軸を設定し、1/2ずつ慎重に掘削して、埋土や粘土、焼土、炭化物に注意して、記録を取った。その後、完掘して、掘り込みの確認や周辺の柱穴を確認したのち、遺構としての認定を行った。

各遺構の測定値は、基本的に軸沿いに計測しているが、明らかに長軸や短軸が別にある場合はその箇所を測定している。なお、平面の粘土、焼土は、記録の適していると判断した部分で実測を行っているため、断面図と整合性がつかない部分もある。

炉跡1号（第94図）

E-71区のⅢb層で検出された。N85° Wを長軸とする長辺約213cm、短辺約76cm、検出面からの深さ約21cmで、全体形はくびれない瓢箪の形状をしている炉跡である。

炉跡の東壁に焼土が集中しており、東側が炉本体で、西側が灰溜まりである。

炉本体は、長軸側断面や粘土塊の残存が不明なため、

推定であるが、幅94cm、奥行き88cmで隅丸長方形を呈する。南西側は、焚き口と灰溜まり長軸125cm、短軸28～68cmの隅丸長方形を呈している。

遺物は、1点出土しているが、図示しなかった。

炉跡2号（第95図）

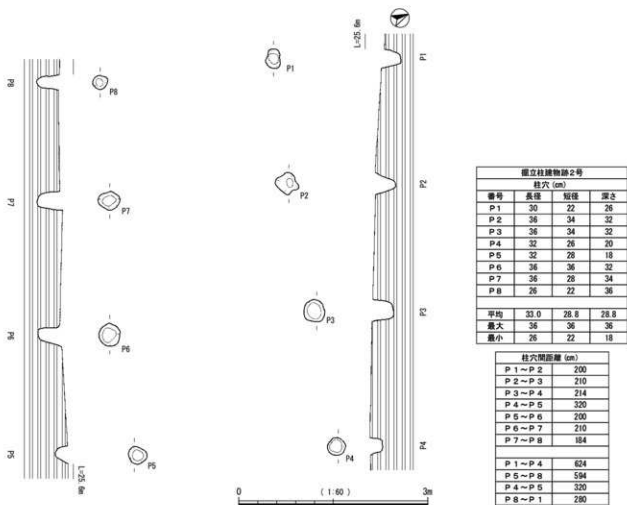
D・E-64区のⅡ層で検出された。N56° Wを長軸とする長辺約205cm、短辺約100cm、検出面からの深さ約23cmで、全体形は不定形な形状をしている炉跡である。

炉跡の北西側に粘土塊や焼土が集中しており、炉本体で、手前が灰溜まりであると考えられる。炉本体は、幅110cm、奥行き90cmで方形を呈する。埋土の下層③に炭化物が多量に混じり、その上層である①に炉壁粘土が覆い被さっているため、本体は破壊または崩壊したと考えられる。

遺構からは、遺物は出土しなかったが、北側から、294・296（第117図）が出土している。遺構に伴うものでないため、Ⅱ層出土物として報告している。

炉跡3号（第96図）

E-63区のⅢa層で検出された。N43° Eを長軸とす



第 89 図 掘立柱建物跡 2 号

る長辺約195cm、短辺約68cm、検出面からの深さ約20cmで、全体形は瓢箪の形状をしている炉跡である。

炉跡の北東側に粘土塊や焼土が集中しており、炉本体で、手前が灰溜まりである。炉本体は、幅83cm、奥行き115cmで隅丸長方形を呈する。埋土上層に炉壁粘土が覆い被さっているため、本体は破壊または崩壊したと考えられる。南西側は、焚き口と灰溜まり長軸105cm、短軸75cmの楕円形を呈している。炉本体から5cmほど下がっている。

灰溜まりに炭化物が集中があまり見られないため、人為的に廃棄されたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

(3) 土坑

台地部で検出された当該時期と判断した土坑は6基である。平成18・20・27年度調査である。

Ⅱ層からⅢ層の検出で、基本的な埋土は黒色を呈して、中近世の遺構と判断した。

調査については、主軸を設定し、1/2ずつ慎重に掘

削して、埋土の記録を取った。その後、完掘し、遺物や炭化物等の確認したのち、遺構としての認定を行った。

各遺構の測定値は、基本的に軸沿いに計測している。

土坑6号（動物埋葬土坑）（第97図）

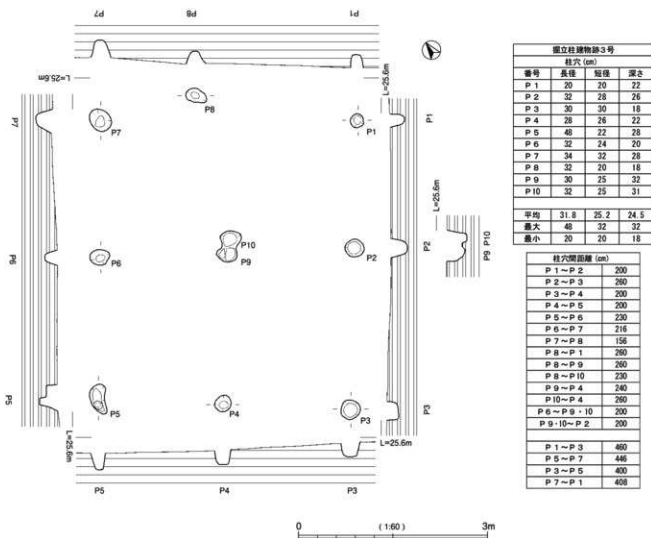
D-45区のⅡ層で検出された。N48° Eを長軸とした長辺約108cm、短辺81cmの不定形で、検出面から床面までの深さ約23cmである。床面は平坦で逆台形状の断面をしている。

埋土は2層からなり、上層は黒色土で、下層は黒色土にアカホヤ火山灰が混じった土で若干黒色が薄い。

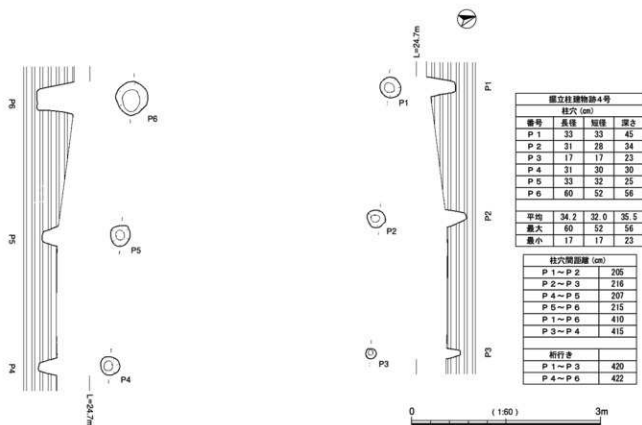
遺物は骨が埋土中層から出土している。6つの骨が並んだ状況であるが、人為的な配列か、自然による流れ込みかは不明である。動物の骨と考えられるが、種別や骨の部位については不明である。

土坑7号（第98図）

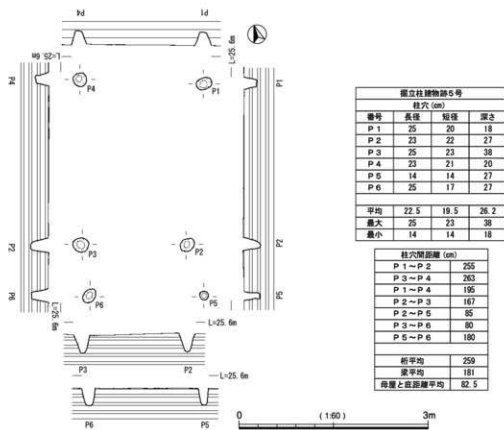
D-48区のⅢa層で検出された。N87° Eを長軸とした長辺70cm、短辺50cmの楕円形で、検出面からの深さ約35cmである。床面は緩やかに立ち上がり、壁面は垂直に



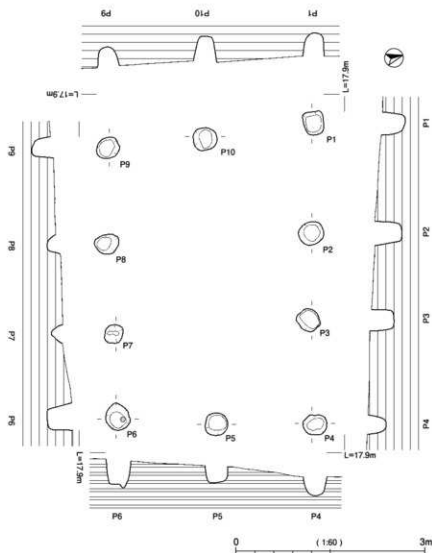
第90図 掘立柱建物跡3号



第 91 図 獨立柱建物跡 4 号



第 92 図 獨立柱建物跡 5 号



掘立柱建物跡6号			
柱穴 (cm)			
番号	長径	短径	深さ
P 1	37	32	35
P 2	40	37	44
P 3	36	36	35
P 4	37	30	30
P 5	37	34	27
P 6	43	40	45
P 7	30	27	18
P 8	40	32	15
P 9	36	34	33
P 10	36	34	42
平均	37.2	33.6	32.4
最大	43	40	45
最小	30	27	15

柱穴間距離 (cm)	
P 1 ~ P 2	175
P 2 ~ P 3	140
P 3 ~ P 4	160
P 4 ~ P 5	160
P 5 ~ P 6	160
P 6 ~ P 7	140
P 7 ~ P 8	145
P 8 ~ P 9	150
P 9 ~ P 10	155
P 10 ~ P 1	175
P 1 ~ P 4	475
P 6 ~ P 9	435
P 4 ~ P 6	320
P 9 ~ P 1	320

第93図 掘立柱建物跡6号

近く、ボール状の断面をしている。

埋土は黒褐色土をしている。遺物は出土しなかった。

土坑8号 (第99図)

B-58区のII層で検出された。遺構東側は、調査区外であるが、ほぼ全て調査できた。

N80° Wを長軸とする推定長辺約90cm、短辺85cmの円形で、検出面からの深さ約12cmである。床面から緩やかに立ち上がる。

埋土は黒色土の単層である。遺物は小片のため図示しなかった。

土坑9号 (第100図)

C-59・60区のIII b層で検出された。N62° Wを長軸とする長辺86cm、短辺65cmの楕円形で、検出面からの深さ約17cmである。床面はほぼ平坦で、緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑10号 (第101図)

C-59区のIII b層で検出された。遺構南側は、樹根による覆乱を受けている。N70° Wを長軸とする長辺約80cm、推定短辺約75cmの楕円形で、検出面からの深さ約17cmである。床面から緩やかに立ち上がり、段を形成して立ち上がりが急になる。

埋土は黒色土にアカホヤ火土灰のバミスが混じる。

遺物は出土しなかった。

土坑11号 (第102図)

C-56区のIII a層で検出された。N45° Wを長軸とする長辺100cm、短辺80cmの楕円形で、検出面からの深さ約12cmである。床面から緩やかに立ち上がる半円状の断面をしている。

埋土は黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

(4) 溝状遺構

台地部で検出された当該時期と判断した溝状遺構は8

条である。平成19・20・21・27年度調査である。

古道との区別は、溝状遺構は掘り込みが明確にあるものとした。

本遺跡台地部の溝状遺構は、東西方向に伸びるものが多く、地形におおよそ並行している。遺跡東側で検出された溝状遺構は地形に直行するものが多い。

その用途は道（通路）として使用していた可能性が高いが、底面が細いもの地形におおよそ並行しているものや直行しているもの、分岐しているもの、端が止まったものなど別な用途をもった可能性があるものもある。区画などを示すような配置になる遺構は検出されなかった。

遺構内遺物も多様で、長期にわたって使用されたことから時期も定かではないが、II層からIII層の検出で、出土遺物や基本的な埋土が黒色を呈していることから、中

近世の遺構と判断した。

調査については、幅の広い部分に主軸を設定し、硬化面などに注意を払いながら、慎重に掘削して、埋土の記録を取った。その後、完掘して、遺物等の確認したのち、遺構としての認定を行った。

溝状遺構1号（第103・104図）

C-49・50区のIII b層で検出された。溝状遺構2号と並行しており、南北とも途中で端がなくなるが、南側は、溝状遺構2号へ続くものと推定される。南北の地形の傾斜に沿って北側が低く南北の比高差約27cm、長さ約7.3m延び、幅60～110cm、検出面からの深さ10～32cmである。

床面は比較的平坦で逆台形状の断面をしている。中央部は、両端より深くなっている。床面と側面は、しまりが強い。

埋土は、黒褐色土でしまりが無い。中央から北側は、下層に暗褐色土でアカホヤ火山灰の小バミスを含む。

埋土中から多数の遺物が出土したが流れ込みと判断する。出土遺物はあるが、小片のため、図示しなかった。

溝状遺構2号（第103・104図）

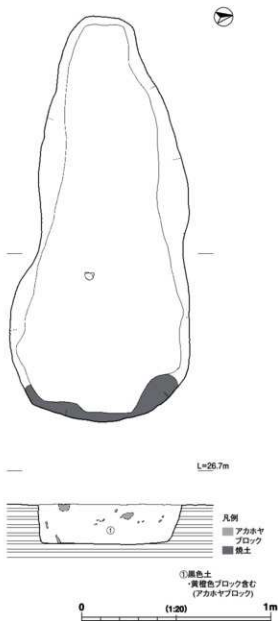
C-48～50区のIII b層で検出された。溝状遺構1号と並行しており、南側は、東西方向に伸び調査区外へ伸びる。北側も、調査区外へ伸びる。

南北方向の溝は、地形の傾斜に沿って北側が低く、南北の比高差約135cm、南北方向の長さ約21.5m延び、幅110～150cm、検出面からの深さ10～34cmである。C-49区で2段に分かれ、東側が浅く西側が深い。東側の溝は3段の階段状を呈する。埋土は黒褐色土でしまりがある。

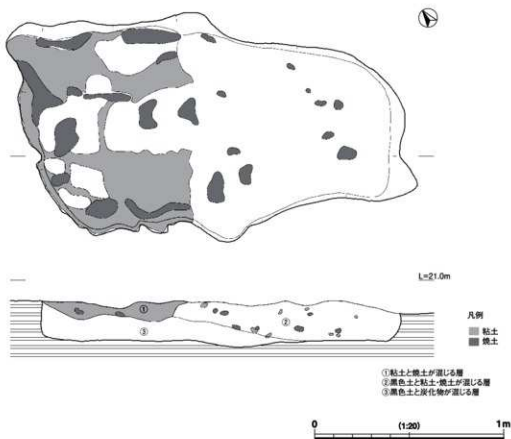
C-50・51区の東西方向に延びる部分は、地形に並行して延びており、西側がわずかに低く、東西の比高差約30cm、検出幅約180cm、検出面からの深さ14cmである。遺構西側は2条に分岐し、北側は4cmの浅い掘り込み、南側は厚さ14cmの灰黄褐色の硬化面がみられた。

埋土中から多数の遺物が出土したが流れ込みと判断する。出土遺物は30点で、そのうち8点を図示した。

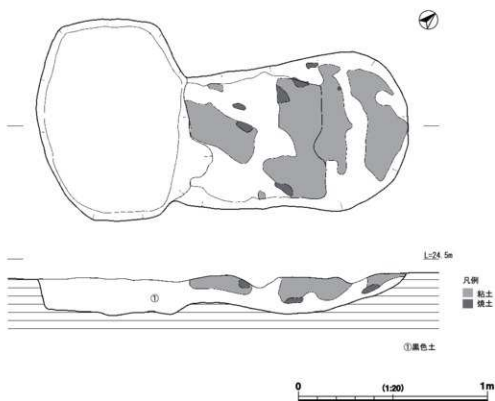
264は陶器の土瓶である。口縁部は軸はぎを行い、内面口縁下位及び外面胴部中位から施軸しない。18世紀～19世紀の苗代川窯で焼かれたものである。265は陶器の蓋で、口縁部は軸はぎを施す。外面底部に貝目が見える。18世紀～19世紀頃の苗代川窯系で焼かれたものである。266は陶器の播鉢で、口縁部は軸はぎを施す。口縁部は外から内に折り曲げて成形する。播目は細く浅い。口縁部下位に1条の浅い沈線を施す。18世紀～19世紀の苗代川窯系で焼かれたものである。267は陶器の灯明具（仏具？）である。中央に蝟燭や線香を立てる台があり、7角形を呈する。脚部中位まで施軸する。268・269は碗である。268は青磁碗の底部で、高台内面は一部施軸しない。見込みと体部の間に1段落ちがある。置付



第94図 炉跡1号



第95図 炉跡2号



第96図 炉跡3号

けは太く低い。14世紀頃の龍泉窯系で焼かれたものである。269は陶器碗で、高台は施軸しない。見込みに蛇の目軸を施し、下の白化粘土がみえている。外面体部下位で軸の色調を変えている。高台内面中央に凸状のふくらみがある。近世の薩摩焼である。270・271は抱塔である。270は胴部中位で屈曲し、それより下は調整が見えず型押ししか。1か所孔をあけており、管のようなものを入れていたと想定されるが用途不明である。外面屈曲部より上位はススが良好に付着する。271は胴部下位で強く屈曲しており、屈曲部より下は調整が見えず、型押しと考えられる。屈曲部より上位はススが良好に付着する。270・271ともに胴部中位で屈曲し、それより上位はススが良く付着することから庵のようなものに据えて調理していたと考えられる。

溝状遺構 3号 (第105図)

Y・Z-54・55区のⅢb層で検出された。南北とも調査区外へ伸びているため、遺構の一部の調査となった。南北の地形の傾斜に沿って北側が低く南北の比高差約50cm、長さ約10m伸び、幅120～160cm、検出面からの深さ60cmである。

底面は凹凸があり、西側は比較的急に立ち上がり、東側は緩やかに立ち上がる。床面の形状から2～3つの溝があった可能性があるが、埋土は、黒色土でしまりのな

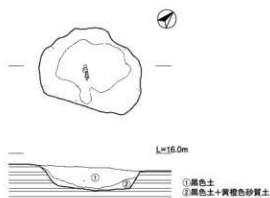
い単層のため、時期の差はほとんどなかったと考えられる。

埋土中から遺物が出土したが、小片のため図示しなかった。

溝状遺構 4・5・6号 (第106図)

B～F-61区のⅡ～Ⅲa層で検出された。3条とも、地形に並行して、東西方向に長さ約36～40m伸びている。西側へわずかに傾斜しており、比高差約20cmである。

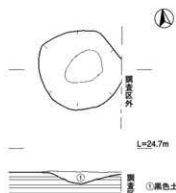
溝状遺構 4号は、幅40～60cm、検出面からの深さ24cmである。東側は細く「V」字状の断面をしている。



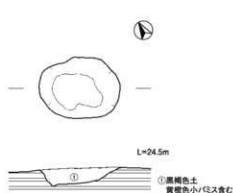
第97図 土坑7号



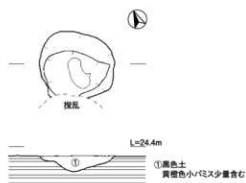
第98図 土坑7号



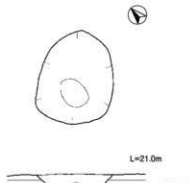
第99図 土坑8号



第100図 土坑9号



第101図 土坑10号



第102図 土坑11号

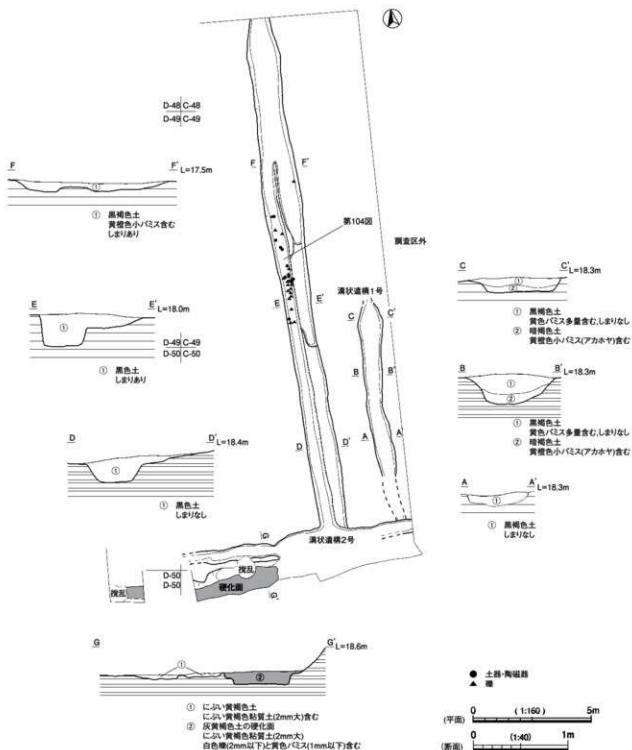
溝状遺構5号は、幅約60~70cm、検出面からの深さ20~34cmである。東側は浅く、西側は「U」字状の断面形をしており掘り込みが深い。

溝状遺構6号は、幅40~70cm、検出面からの深さ20~30cmである。3条のうちでは、一番長く幅も広い。南側

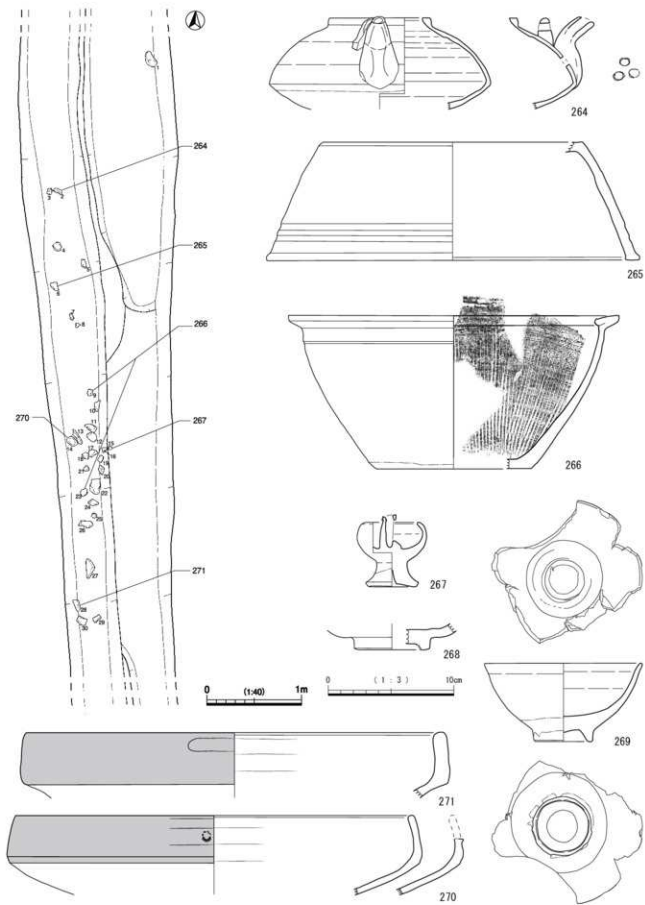
は急に立ち上がり、北側は緩やかで、床面は平坦部分を形成してる。

3条とも黒色土の単層を基本としている。

溝状遺構5号は埋土から遺物が出土したが流れ込みと判断する。出土遺物は42点で、そのうち1点(273)を



第103図 溝状遺構1・2号



第 104 図 溝状遺構 2 号及び出土遺物

図示した。273は土師皿の底部で、底面は糸切りである。

溝状遺構6号は埋土から遺物が出土したが流れ込みと判断する。出土遺物(272)は須恵器碗で、口縁端部がかなり細い。

溝状遺構7号(第107図)

B～F-68区のⅢA層で検出された。東西とも調査区外へ延びている。地形の傾斜に並行して延びており比高差はあまりないが西側がわずかに低く比高差約28cm、長さ約30m延び、幅50～90cm、検出面からの深さ14～32cmである。

掘り込みは中央部が深くっており、緩やかに東西方向へ緩やかに上る。東側は掘り込みは浅い。底面は平坦で逆U字形の断面形をしている。

埋土は黒色土と基本としており、東側は底面にわずかに茶褐色土が堆積するが、自然流入である。

遺物は出土しなかった。

溝状遺構8号(第108図)

A-73～75区のⅢb層で検出された。南北とも調査区外へ延びる。南北の地形の傾斜に沿って北側が低く、南北の比高差が約50cm、長さ約20m、幅約40～80cm、検出面からの深さ22～38cmである。

掘り込みは北側が深く南側へ緩やかに上がる。北側(C-C')では、硬化面からなる古道7号に切られており、検出状況や断面観察から、溝状遺構8号が古いと判断した。底面は丸味を帯びており、平坦面はあまりない。

埋土は黒色土の炭屑を基本としている。

埋土中から遺物が出土したが流れ込みと判断する。出

土遺物は11点で、そのうち4点を図示した。

274黒色土器碗の口縁～底部近くで、内外面ともにミガキを行う。275・276は土師器碗である。275は土師碗の胴部～底部で、脚端部は欠けている。276は土師碗の底部で、脚はやや開き、直立しない。277は縄文後期の深鉢の波状口縁部である。指宿式である。

(5) 古道跡

台地部で検出された当該時期と判断した古道跡は7条である。平成18・19・20・21・27年度調査である。溝状遺構との違いは、硬化面が明確に残存しているものを古道跡としている。

本遺跡台地部の古道跡は、東西方向に伸びるものが多く、地形におおよそ並行している。溝状遺構とほぼ同じ傾向にある。

遺構内遺物は、掘り込みを伴わない遺構が多く、ほとんど出土しなかった。Ⅱ層からⅢ層の検出で、周辺の出土遺物や硬化面や埋土が黒色を呈して、中近世の遺構と判断した。

調査については、幅の広い部分に主軸を設定し、掘り込みや硬化面の延びる方向などに注意を払いながら、慎重に包含層を掘削して、硬化面が残るように掘り下げた。その後、主軸とした部分の一部を掘削し、埋土の記録を取った。その後、硬化面を完備して、遺物等の確認したのち、遺構としての認定を行った。

古道跡1号(第109図)

D-45区のⅡ層で検出された。東西の地形に並行して、東西方向に約2.9m延びる。東西の比高差はなく、幅80～90cmの硬化面である。東側では、徐々に上がり硬化面がなくなり、西側では明確な硬化面を検出できなかったが、東西方向に延びていたと考えられる。

古道跡2号(第110図)

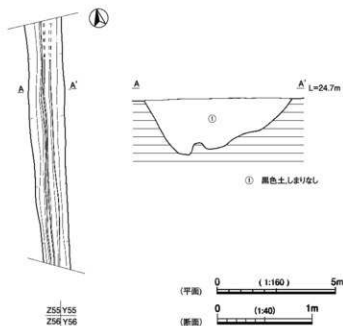
C・D-51・52区のⅢb層で検出された。南側ではC・D-51区付近で3つに分岐している。また、北側に1条は部分的に硬化面が残存しており、1条硬化面が延びている。方向から、南側の古道跡と同一の遺構となると考える。

南側の本体部は東西の地形に並行して、東西方向に約25m延びる。西側が標高がわずかに高く、東西の比高差は20～80cmある。幅80～90cmの硬化面である。東側では、徐々に上がり硬化面がなくなり、西側では明確な硬化面を検出できなかったが、東西方向に延びていたと考えられる。幅は40～250cm、硬化面の厚さは10～14cmある。

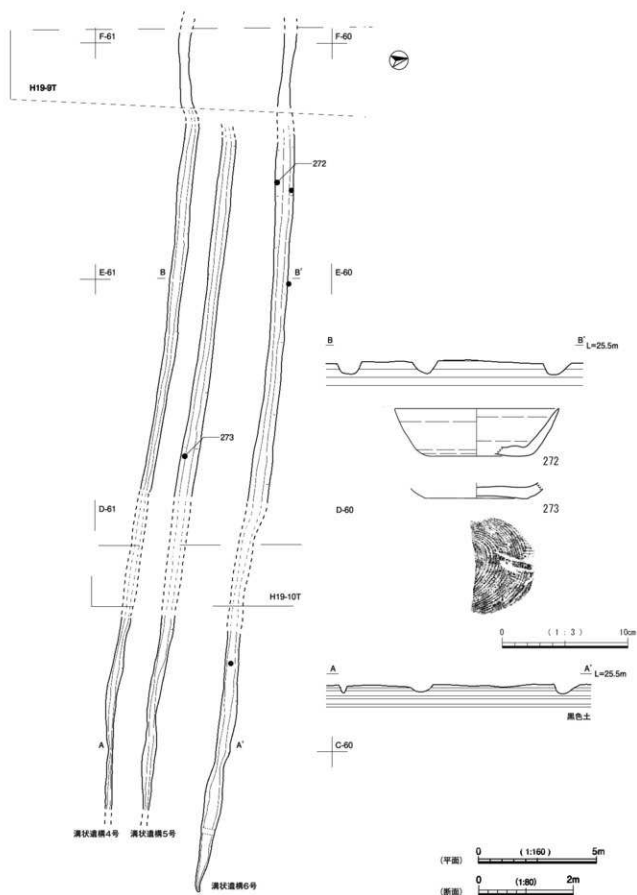
北側の1条の分岐した硬化面は、南側本体と1mの比高差がある。

硬化面を形成する埋土は、黒色土の単層である。

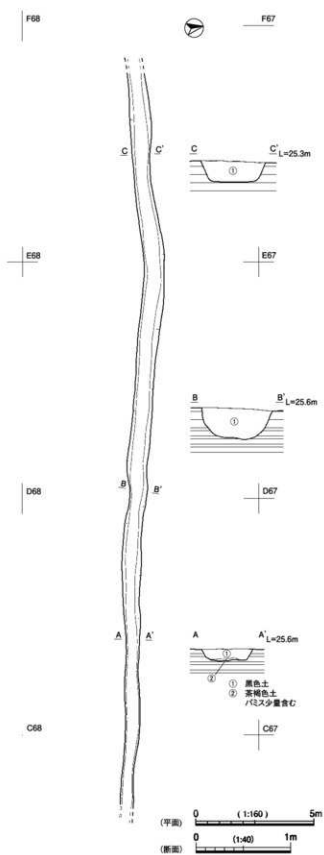
遺物は出土しなかった。



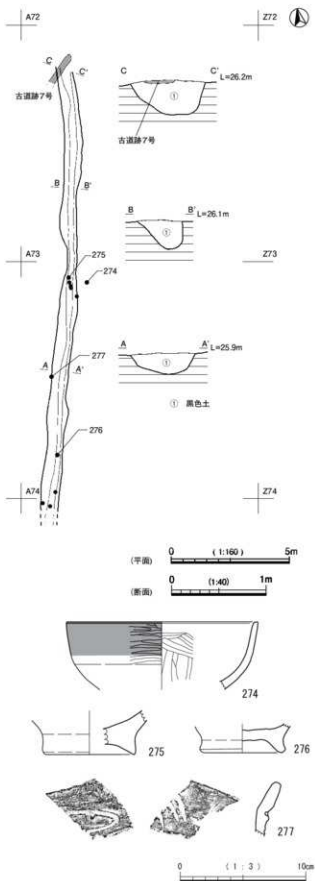
第105図 溝状遺構3号



第 106 図 溝状遺構 4・5・6号及び埋土内出土遺物



第 107 図 溝状遺構 7 号



第 108 図 溝状遺構 8 号及び出土遺物

古道跡3号(第111図)

C-56区のⅢb層で検出された。東西の地形に並行して、東西方向に8.5m延びる。東西の比高差はほとんどない。西側は底面が徐々に上がって自然に消失する。東側は、硬化面や掘り込みが確認できなかった。

古道跡4号(第112図)

E・F-58区のⅢb層で検出された。地形に沿って、南北方向に延びる硬化面である。2条の硬化面が検出されたが、近くにあり軸もほぼ同一のため、古道4号とした。おおよそ南北方向に4m延びる。南北の比高差はほとんどない。南側は底面が徐々に上がって自然に消失する。北側は、硬化面や掘り込みが確認できなかった。硬化面を形成する埋土は、黒色土の単層である。

古道跡5号(第113図)

E・F-60区のⅢa層で検出された。北東～南西へ延びる。幅110cmにしまりのある面があり、3か所特に硬化した面があったため、古道跡とした。

硬化面を形成する埋土は、黒色土の単層である。

古道跡6号(第114図)

E-66区のⅢa層で検出された。東西方向に続くと考えられるが、硬化面を検出できなかった。幅30～50cmの硬化面が、東西の地形に並行して東西方向に約6m延びる。硬化面の厚さは50～60cmある。

硬化面を形成している埋土は、黒色土の単層である。

古道跡7号(第115図)

A・B-72・73区のⅢb層で検出された。北東～南西方向に約12m延びる硬化面と東側に軸をほぼ同一とする硬化面2条からなる古道跡である。溝状遺構8号と切り合い関係にあるが、古道が新しい。

硬化面の幅30～50cmで、厚さは約50cmある。

硬化面を形成している埋土は、黒褐色土の単層である。

3 遺物

古代以降の土器・陶磁器類の出土は合計779点である。そのうち68点を図示した。内訳は、分類ごとに土師器369点(図示9点)、須恵器15点(図示7点)、焼塩土器3点(図示3点)、土製品5点(図示5点)、青磁28点(図示8点)、白磁3点(図示2点)、青花6点(図示3点)、磁器34点(図示11点)、陶器316点(図示20点)である。

(1) 古代(第116図)

古代の遺構は検出されなかったが、Ⅱ層から古代に該当する遺物が出たため、この節で報告する。

土師器(278～282)

278は内黒土師器の碗の高台～胴部である。高台は太く短くハの字状に開き端部は細く丸い。底部に少量のスタスが付着する。内面にミガキを行うが、摩滅して単位はみえない。高台内面は回転ナデを行い、中央が盛り上がる。279は碗の胴部～底部である。280は赤色土器の坏で

ある。内外面に朱が塗られているが、部分的に剥がれている。

281・282は土師器の口縁部である。282は口縁部の外面に横方向のケズリを行い、その上に刻み・斜位の押圧を施す。

焼塩土器(283～285)

内面に布目痕のある小型浅鉢形の土器で、全形をうかがえるものは出土していない。283は口縁部である。285は薄い造りで、焼成も良好である。外面にユビオサエを行う。

須恵器(286～292)

286は坏蓋で、山形のつまみで宝珠状を呈す。287は坏の底部である。288～292は甕の胴部で、外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。288は内面にユビオサエがのこる。291は外面に格子目タタキを行い、軸葉がかかる。292は縦横に平行タタキを行い、格子目のようにみえる。

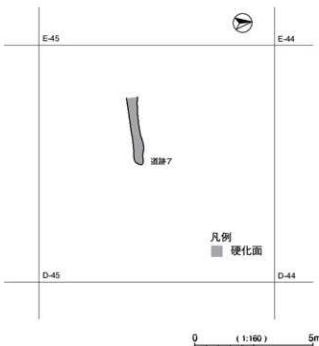
(2) 中世(第117図)

ここでは12世紀～16世紀に該当する土器・陶磁器を中世に分類して報告する。

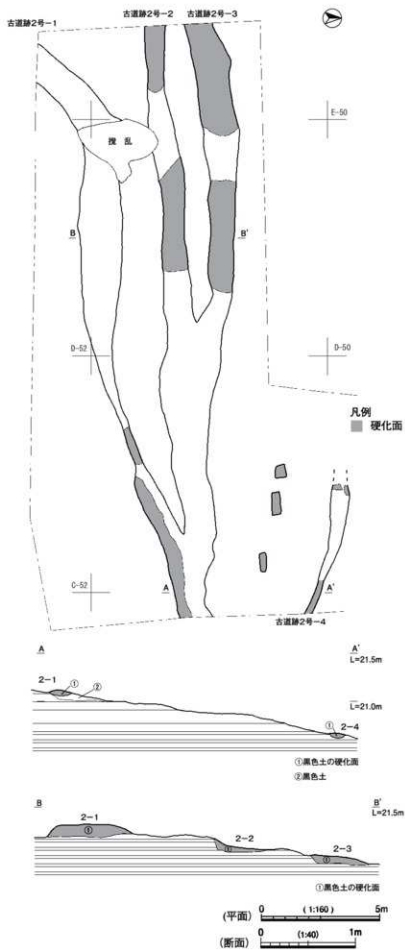
中世の陶磁器については『概説 中世の土器・陶磁器』(1995年発行、中世土器研究会編、真福社)を参考に分類を行った。

土師器(293～296)

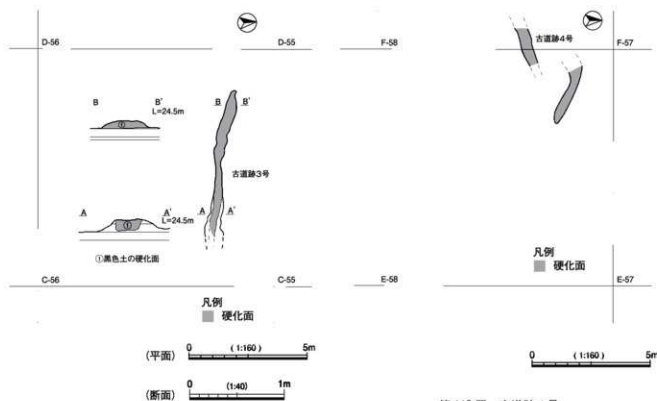
293～295は小型の土師皿である。底面は糸切りで切り離している。293は口縁端部に向かってまっすぐ立ち上がり、端部は細い。内面底部にケズリが残る。294は口縁部に向かって緩くくびれ、口縁端部は細い。底部は



第109図 古道跡1号

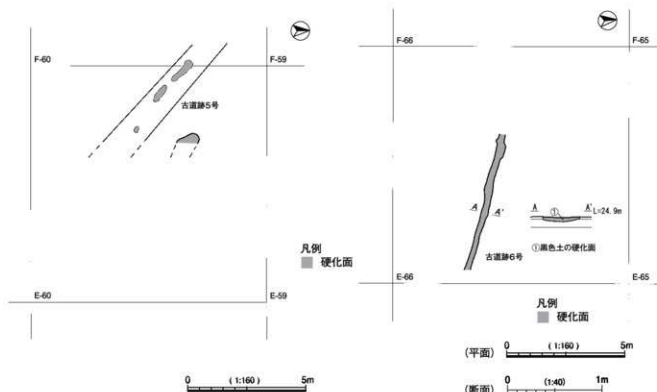


第110図 古道跡2号



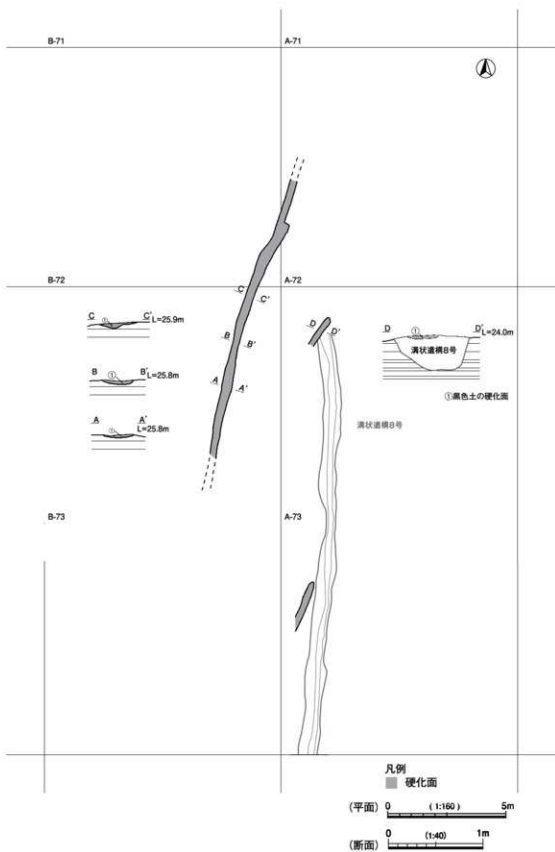
第 111 図 古道跡 3 号

第 112 図 古道跡 4 号



第 113 図 古道跡 5 号

第 114 図 古道跡 6 号



第 115 図 古道跡 7 号

厚い。焼成良好で硬質で、外面にススが少量付着する。295は底面に糸切りを行うが不明瞭である。口縁端部は太い。296は土師皿で、底面は糸切りがのこる。口縁に向かって「ハ」の字状にまっすぐ立ち上がる。

土製品 (297)

297は土師質の釜の羽部分と考えられる。内面ミガキを行い、丁寧に成形する。

白磁 (298・299)

298は碗の底部で、外面下半～底部は露胎する。高台は低く逆台形状を呈す。内面体部下半と見込みの間に段を設けている。11世紀後半～12世紀前半の中国産で、白磁碗IV類に該当する。299は碗の体部～底部で、体部下半～底部は露胎する。高台内に十字の墨書が書かれている。高台中央は凸状にふくらむ。中世後半の中国産と考えられる。

青磁 (300～307)

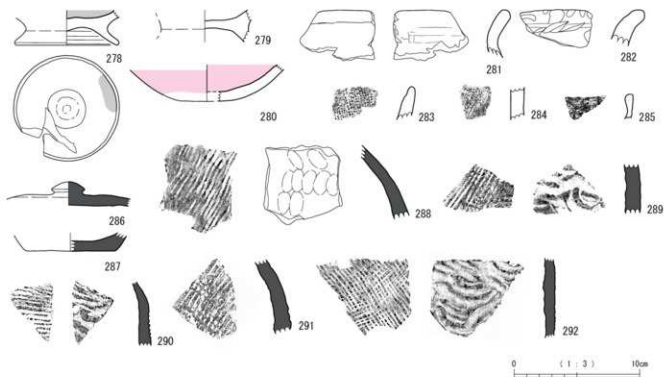
300～302は皿である。300は桜花皿の口縁で、口縁は外反する。口縁内面に唐草文を描くが、釉薬が厚くかきやや不明瞭である。14世紀後半～明代に該当する。301は桜花皿の口縁で、口縁は外反する。口縁内面に平行線と唐草文を描く。15世紀～16世紀に中国で焼かれた皿である。302は皿で、見込みにジグザグ状に柳点描文を描く。口縁は外反し、底部はやや持ち上がる。体部外面下半は全面施釉後に掻き取り露胎する。同安窯系である。

303～307は碗である。303は碗の口縁部～体部で、全

面施釉されるが、口縁部に向かって釉薬が薄くなり口唇部は胎土の色調が見える。15世紀～16世紀に中国で焼かれたもので、上田分類のE類にあたる。304は碗の口縁部～体部で、口縁が外反する。15世紀～16世紀の中国産で、上田分類のD類である。305は碗の体部～高台で、高台内外面は露胎だが一部釉垂れがある。見込みに草花紋様の印文を押し、体部外面に1条の線文を施す。高台はやや高い角高台で、高台内面中央は凸状にふくらみ、高台外端は3mm幅で斜めに縁取りされる。14世紀の中国龍泉窯で焼かれた碗である。306は碗の体部～高台で、高台内面以外施釉される。体部外面に細連弁文が施され、見込みにロクロ成形時の指調整の痕跡が明瞭に残る。高台外端を3mm幅で斜めに縁取られ、高台内面中央はややふくらむ。15世紀～16世紀中頃の細連弁文青磁碗C群(上田分類IV類?)と考えられる。307は碗の底部で、畳付は露胎し、見込みは蛇の目軸を施している。高台は台形状を呈す。中世後半のものである。

染付 (308～311)

308・309は皿である。308は皿の体部～底部で、畳付は釉薬を掻き取る。畳付には燃焼時の緩衝材である砂が多量に付着している。底部は、基筋底を呈す。見込には中央に文字(梵字か、「福」?)、その周囲を「爪」の字状の紋様を施し、その外側に界線が1条巡る。体部外面にも「爪」の字状の文様を1周施し、その下部に2条の界線を巡らす。16世紀～17世紀前半の中国・漳州窯産で、小野分類のC群に該当する。309は皿の口縁部～体部で、全



第116図 古代の遺物

口縁部端は外反する。口縁内面に1条の界線、外面に2条の界線を巡らす。外面の界線はかなり淡く、内面の界線は太さが均一ではない。16世紀～17世紀前半の漳州窯産で、小野分類の皿B群に該当する。310は碗の口縁部で、壘付は露胎し、見込みに蛇の目軸はぎを施している。体部外面に唐草文、その下部に1条の界線を巡らす。16世紀～17世紀前半の漳州窯産である。311は染付碗の口縁部～体部で、内面に唐草文を描き、外面上位に1条の界線を巡らす。中世後半の中国産と思われる。

(3) 近世 (第118図・第119図)

17世紀以降の陶磁器類を報告する。陶磁器類の分類については『江戸遺跡検出のやきもの分類(兼凡例)』(『四谷三丁目遺跡』別冊, 1991年発行, 東京消防庁・新宿区四谷三丁目遺跡調査団)を参考におこなった。

磁器 (第118図312～321)

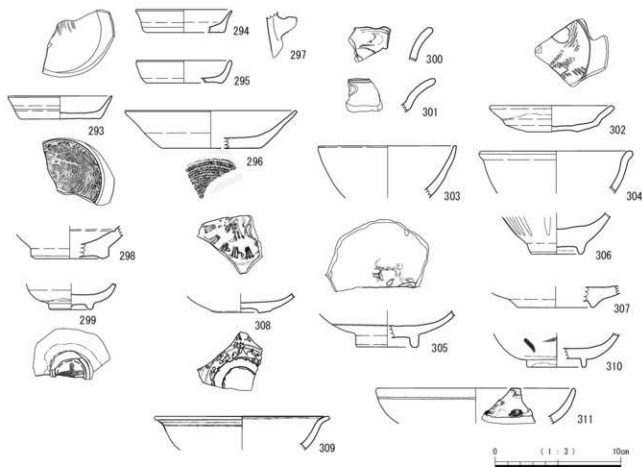
312・313は肥前系染付皿で、17世紀後半～18世紀にかけて内野山北窯で作られたものである。312は口縁部～体部で、口縁内面に四方禪文を施し、見込みに2条の界線を巡らす。313は口縁部で、内面に四方禪文を描く。314は染付碗の底部で、壘付は露胎し、見込みに蛇の目軸はぎを行う。壘付には焼成時の砂粒付着する。蛇の目

軸はぎ部分には重ね焼き時の壘付の痕跡が輪状に残る。蛇の目軸はぎは全て軸はぎせず、白化粘土があらわれている。体部内面に牡丹唐草文を施し、見込み境界に2条の界線を巡らす。肥前系か。315・316は染付碗の口縁部である。315は外面にコンニャク印文で○に斜線の紋様を施し、見込みの境界部に2条の界線を巡らす。316は外面に牡丹唐草文を描く。317は染付の蓋で、身受部は軸はぎを行う。外面にコンニャク印文で菊文を施す。肥前系か。318は碗の底部で、内外面ともにクロ引きで成形する。見込みに蛇の目軸はぎを行い、外面は露胎する。

319・320は玉縁状の口縁をもつ碗である。軸葉は薄く、白磁軸を使用している。321は小型の碗の底部で、体部外面に意図的に軸垂れを行う。

陶器 (第118図322～337, 第119図338～340)

322は土瓶への蓋で、薩摩當代川窯で焼かれたものである。323は大皿の底部近くで、内面と胴部外面に施軸する。内面は白化粘土で波線を描く。肥前系か。324は灯明皿の底部で内面及び外面胴部に施軸する。底面はヘラケズリ痕がよく残る。薄手である。肥前系か。325は器種不明の胴部で、外面に帯状につまみを行う。薩摩焼



第117図 中世の遺物

とおもわれる。

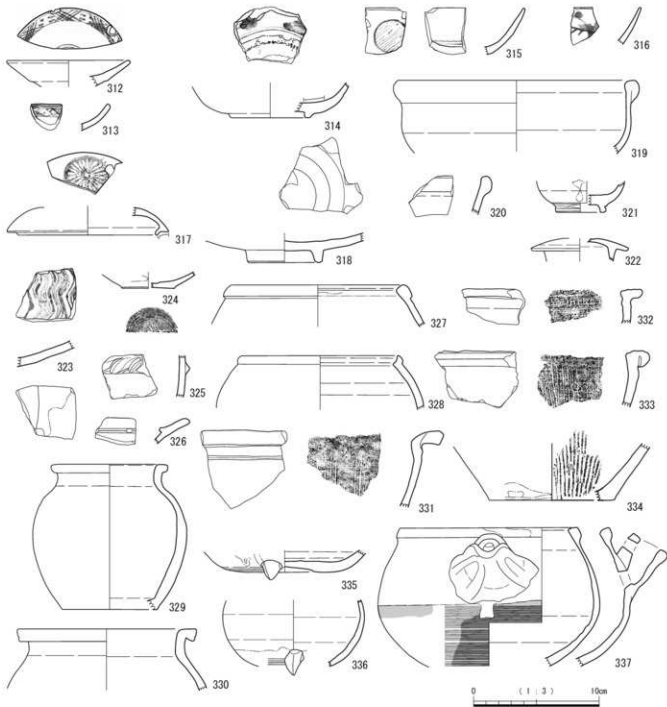
327・328は釜の口縁部～胴部で、18世紀頃に苗代川窯で焼かれたものである。328は口唇部にへこみを設けている。327は口唇部内面は軸はぎを行う。

329は小壺で、苗代川窯で焼かれたものである。底部内面に砂粒が付着する。330は壺の口縁～肩部で、口唇部は軸はぎを行う。口唇内面に重ね焼きの痕跡が残る。18世紀の苗代川窯で焼かれたものである。

326は播鉢の口縁部で、口縁部と外面に施軸する。口縁を外側から内側に折り返して端部を丸くしている。17

世紀前半の肥前系か。331～334は播鉢で、18世紀以降に苗代川窯で焼かれたものである。331は播鉢の口縁部で、口唇部を一部軸はぎし、帯状に軸を残す。外面に1条の沈線が施す。332は播鉢の口縁部で、口縁部を軸はぎし、炭が付着する。口縁部は外側に折り返して成形し、外側に伸び、波打つ。口縁部内面に刻み目を細かくいれる。333は播鉢の口縁部で、口唇部は施軸しない。口縁部は外側に折り返して成形し、波打つ。334は播鉢の底部で、播目は太く深い。

335～337は土瓶である。335は土瓶の底部で、底部は



第118図 近世の遺物（陶磁器）

扁平で胴部中位まで施軸する。底部には円錐状の脚が付く（3か所か）。底部外面には削り出しの筋状工具痕が残る。底部外面には重ね焼きの痕跡が残る。336は土瓶の胴部～底部で、外面下位まで施軸する。底部には円錐状の脚が付く（3か所か）。底部外面には削り出しの筋状工具痕が残る。337は釜（山茶家）で、胴部中位まで施軸する。胴部中位～底部外面に削り出しの筋状工具痕が残る。片口がつき、その中に耳がつく。底部に脚がつくかは不明である。

338は壺の頸部～胴部である。339は底部～胴部か、底部内面は被熱しており、内部で火を使用していたと思われる。340は獅子頭の裝飾部で、仏具か。338～340は鉄軸を施軸し、オリーブ褐色を呈する。

土製品（第119図341～344）

341は焙烙（土師器内耳鍋）の口縁部で、内面に貼付突起をつける。外面は2条の平行沈線をおこなう。342は茶釜の把手部（胴部）で、土師質土器である。把手には1本の孔をあける。

343は土人形で、型出しの素焼きである。動物の顔（犬か?）をかたどる。内面に指で型出したユビオサエの痕が明瞭に残る。

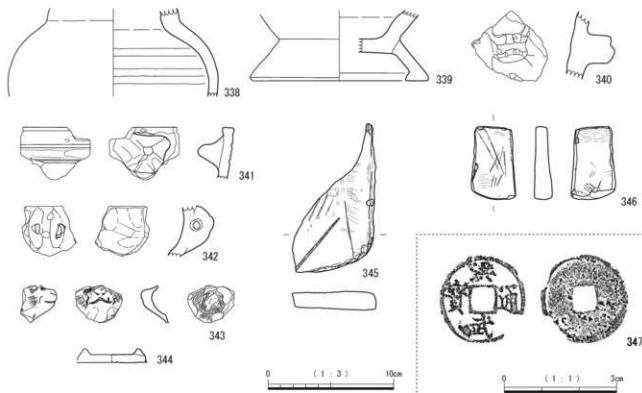
344は窯道具で、陶土で作られた薄い円盤状で円錐状の突起を貼り付けている。直径5.2cmで窯内部で焼成時に小型の製品の緩衝材だと考えられる。センベイもしくは足つきハマと考えられる。

石製品（第119図345・346）

345・346は砥石である。345は厚さ1.5cmの砥石で、幅6.7cm、長さ11.8cmが残存している。ホルンフェルス製で、表裏を使用している。346は長さ5.75cm、幅3.5cm、厚さ1.5cmの提砥石で、天草石製で下端が一部欠損している。表裏と、両側面を使用している。

古銭（第119図347）

347は「洪武通寶」である。直径2.35cmで左下部が一部欠損している。表面に緑青がでており、裏面に文字は見えない。洪武通宝は中国明代の洪武年間（1368～1398）に鑄造された銅銭で、日本へも室町時代末期に大量に移入され、使用された。県内では、加治木で模鑄が行われ、裏面に「加治木」のうち1字が鑄出されるが、裏面には文字は見られなかった。



第119図 中近世の遺物（陶磁器・土製品・石製品・古銭）

第3表 旧石器時代遺物観察表

種目 番号	種名 番号	発掘 番号	取上 番号	区	層	器種	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
								最大長	最大幅	最大厚		
								33	1	5063		
	2	5062	5360	E-60	IX	ナイフ型	OB上	4.9	2.55	1.25	11.33	
	3	5050	4612	D-73	IX	石核	OB上	2.7	2.5	2.2	12.41	
	4	5058	4619	E-73	IX	石核	SH	2.3	3.1	1.8	11.21	
	5	5055	4624	E-73	IX	断片	SH	2.8	5.7	1.2	16.94	
	6	5075	3856	D-70	IX	スクレイパー	OB上	3	2.4	1.4	7.65	
	7	5076	6684	D-56	IX	剥片	OB上	2.2	2.2	0.9	0.77	
	8	5066	4318	F-74	IX	剥片	玉髓	2.7	3.5	0.9	5.29	
	9	5056	4623	E-73	IX	剥片	玉髓	2.6	2.5	2	7.28	
	10	5070	6608	D-57	IX	剥片	SH	4.75	4.6	0.75	13.08	
	11	5068	6660	D-57	IX	剥片	SH	4.45	2.9	0.65	8.64	
	12	5073	6659	D-57	IX	剥片	SH	4.4	5.75	1.55	34.11	
	13	5069	6666	D-57	IX	剥片	SH	3.6	4.7	1	12.86	
	14	5072	3852	D-70	IX	剥片	OB上	3	1.75	1	5.2	

第4表 縄文時代草創期土器観察表

種目 番号	種名 番号	発掘 番号	取上 番号	区	層	器種	部位	調整	色調		焼成	胎土		備考
									外面	内面		白土	石灰	
									39	15		H00_030	4615	

第5表 縄文時代早期土器観察表

種目 番号	種名 番号	発掘 番号	取上 番号	区	層	器種	部位	文様	調整		色調		焼成	胎土				備考	
									外面	内面	外面	内面		白土	石灰	雲母	赤色粒		小粒
									40	16	H00_002	4290-4222		E74	IV	深鉢	胴部		具敷押引文
	17	H00_003	4254-4626	E73	IV	深鉢	胴部	具敷押引文	具敷押引文	丁寧なナデ	明赤褐色	灰黄褐色	良好	○	○	○	○	○	吉田式
	18	H00_029	8163	D71	IV	深鉢	胴部	—	横位+斜位の条痕	横位+斜位の条痕	にぶい褐色	暗褐色	普通	△	△				
	19	H00_005	4268	D73	IV	深鉢	口縁部	(口縁) 斜み目 (口縁) 斜位具敷斜突文	丁寧なナデ	丁寧なナデ	褐色	褐色	良好	○	○	○	○	○	石塚式 口縁にスチ付着
	20	H00_004	4252	D73	IV	深鉢	口縁部	(口縁) 斜み目 (口縁) 斜位具敷斜突文	丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰黄褐色	明黄褐色	良好	○	○	○	○	○	石塚式 口縁に少量のスチ付着
	21	H00_008	4295	D74	IV	鉢	底部	(底外) 斜み目	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい褐色	褐色	良好	○	○	○	○	○	吉田式 肉張か?
	22	H00_021	4296-4273	D73	IV	鉢	底部	(底外) 斜み目	丁寧なナデ	丁寧なナデ	褐色	にぶい褐色	良好	○	○	○	○	○	吉田式 底に白土付着
	23	H00_001	—	F54	IV	深鉢	底部	—	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	○	○	○	○	○	平塚

第6表 縄文時代早期土器観察表

種目 番号	種名 番号	発掘 番号	取上 番号	区	層	器種	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
								最大長	最大幅	最大厚		
								40	24	5061		
	25	5045	4279	E-73	IV	両面加工	燧石	6.7	3.8	1.3	29.29	
	26	5040	4331	E-75	IV	打製石片	HF	9.4	6.7	2	118.35	
	27	5039	4327	E-75	IV	打製石片	HF	9.6	5.3	2.1	135.22	
	28	5031	3768	E-58	IV	磨製石片	HF	9.6	6.3	3.5	316.33	
	29	5032	—	CP-45-46	IV	磨石	花崗岩	9.6	6.9	4.8	466.16	
	30	51044	11917	E-57	IV	棒状磨石	燧石	6.5	4.4	3.6	120	

第7表 土器集中観察表

種目 番号	種名 番号	発掘 番号	取上 番号	区	層	器種	部位	分類	法量	調整	文様	調整		色調		焼成	胎土				備考			
												口縁	器高	外	内		外	内	白土	石灰		雲母	赤色粒	他
												46	31	H00-186	3871		B57	III	深鉢	口～胴部		III	36.6 (28.35)	

第8表 縄文時代前期～中期土器観察表

種目 番号	種名 番号	発掘 番号	取上 番号	区	層	器種	部位	分類	文様	調整		色調		焼成	胎土				備考		
										外面	内面	外面	内面		白土	石灰	雲母	赤色粒		小粒	
										49	32	H00_032	-		OD45-46	III	深鉢	胴部		I	斜位沈線文+ 横位沈線文
	33	H00_031	7173	D64	III	深鉢	胴部	I	斜位沈線文+横位沈線文	ナデ	横位の条痕	にぶい褐色	明褐色	普通	○	△	○				管製
	34	H00_034	8	C47	III	深鉢	胴部	I	斜位沈線文+斜位沈線文	ナデ	丁寧なナデ	灰褐色	赤褐色	良好	○	△					管製
	35	H00_033	9	C46	III	深鉢	胴部	I	沈線文	ナデ	ナデ	黒褐色	暗褐色	良好	△	△					管製
	36	H30_158	8221 塚か	E72	III	深鉢	口縁～ 胴部	II	(口縁外) 横位+ 縦位の滑点文 (口縁内) 滑点文	条痕	条痕	にぶい褐色	灰褐色	良好	○	○	○				波状口縁 日本山田製
	37	H00_041	7356 塚か	E71	III	深鉢	口縁部	II	(外) 具敷滑点文 (横位-縦位) (内) 具敷滑点文	条痕後ナデ	条痕+ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	○	○	△				波状口縁
	38	H00_040	8700	E70	III	深鉢	胴部	II	具敷滑点文(横位+ 縦位)	ナデ	条痕-ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	△	△				深溝

種別 番号	掲載 番号	実測 番号	取上 番号	区	層	群種	部位	分類	文様	調色				胎土				備考			
										調色		色調		焼成	白石	茶石	石黄		赤黄	黒	小
										外面	内面	外面	内面								
49	39	K00_007	8996 ほか	E71	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅱ	具股連点文(総文)	条痕→ナデ	横位条痕	褐色+褐色	にぶい黄褐色	良好	○	△	△				
	40	K00_039	7217 ほか	E71	Ⅲa	深鉢	胴部	Ⅱ	具股連点文(総位+総文)	条痕→丁草ナデ	条痕→ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	○	△	*				
	41	K00_157	8698 ほか	E70	Ⅲb	深鉢	口縁→ 胴部	Ⅱ	(口縁)2条胎付平行変形 3条胎付波状変形(口唇) 斜位の太い筋目	条痕+ナデ	条痕+ナデ	褐色色+明 黄褐色	黄褐色	良好	○	○	○	○	胴部にス入付		
	42	K00_014	8179	E70	Ⅲb	深鉢	底部	Ⅱ	胎付突帯(斜目目) 一次線	条痕→丁草ナデ	条痕	黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	○	○	○	内面にス入付		
50	43	K00_008	9235	E71	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅱ	短文弧文帯等4条	条痕→丁草ナデ	条痕→ナデ	にぶい褐色 褐色	にぶい褐色	良好	○	△	△				
	44	K00_007	8176	E70	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅱ	横位突帯2条+ 短文弧文帯2条	条痕→ナデ	条痕→ナデ	褐色色	にぶい褐色	良好	○	△	○				
	45	K00_036	7236 ほか	E71	Ⅲa	深鉢	胴部	Ⅱ	胎付突帯2条	条痕	条痕	黄褐色+ にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	○	○	△				
	46	K00_180	9274 ほか	E71	Ⅲb	深鉢	口縁→ 胴部	Ⅱ	—	条痕(総位+ 斜位)	横位の条痕	にぶい黄褐色+ 灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	◎	○	○		波状口縁 補修孔、外面 にス入付		
51	47	K00_035	3211	F71	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅱ	斜位の波線文	条痕(横位+ 斜位)	条痕→ナデ	褐色色	にぶい褐色	良好	○	△	△				
	48	K00_038	7116	E65	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅱ	横位・曲線モチーフ の波線	条痕→ナデ	条痕→丁草ナデ	にぶい赤褐色	灰褐色	良好	○	△	△		深溝?		
	49	K00_052	9671, 8986	F71	Ⅲb	深鉢	口縁→ 胴部	Ⅲ	(口唇)筋目	条痕+ナデ	条痕+ナデ	褐色色	褐色	良	○	△	○	○			
	50	K00_051	4183	E73	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅲ	(口唇)筋目	条痕+丁草ナデ	条痕+ナデ	にぶい黄褐色	褐色	普通	○	△	△				
	51	K00_050	8561	F71	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅲ	(口唇)筋目	条痕+ナデ	条痕+ナデ	黄褐色	褐色	普通	○	△	○				
	52	K00_011	5420	E56	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅲ	斜位の短い波線	条痕→ナデ	条痕→ナデ	にぶい褐色	褐色色	良好	○	△	△	△	○		
	53	K00_010	7117	D65	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅲ	横位の短い波線(不 規則)+ 具股連点文	条痕→丁草ナデ	条痕→丁草ナデ	にぶい赤褐色	明赤褐色	良好	○	△	○	○			
	54	K00_040	4267	D73	Ⅳ	深鉢	口縁部	Ⅲ	(口唇)筋目	ナデ	ナデ	褐色	灰黄褐色	良好	○	△	△				
	55	K00_048	9008	E72	Ⅲa	深鉢	口縁部	Ⅲ	(口唇)具股刺突文	条痕+ナデ	条痕	にぶい褐色	灰黄褐色	良好	○	○	△				
	56	K00_043	8242 4261 ほか	E71	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅲ	—	条痕+短い ナデ	条痕+ナデ	褐色	褐色色	良好	○	△	△				
	57	K00_047	4263 4264 ほか	D61	Ⅲa	深鉢	胴部	Ⅲ	—	横位の条痕 +ナデ	条痕+ナデ	褐色	褐色	やや 不良	○	△	△				
58	K00_044	8956	E71	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅲ	—	条痕+ナデ	条痕+ ユビオサエ	褐色	褐色色	良好	○	△	△					
59	K00_045	8653, 8700	E70	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅲ	—	条痕+ナデ	条痕+ ユビオサエ	褐色	にぶい褐色	やや 不良	○	○	○	○		外面下半分 にス入付		
60	K00_046	4116	E72	Ⅲb	深鉢	底部	Ⅲ	—	横位の条痕	条痕	にぶい褐色	褐色	良	○	○			底部外面に 白色土付			
52	61	K00_009	7178	F72	Ⅲa	深鉢	口縁部	Ⅳ	胎付突帯2条+ 短い横位波線	ナデ	条痕+ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	△	○				
	62	K00_061	4256	E73	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅳ	(口唇)筋目+波線 (口縁)波線文	横位の条痕 +ナデ	横位条痕→ ナデ	褐色色	褐色	良好	○	○	○	○			
	63	K00_062	9181 ほか	E71	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅳ	(口唇)筋目+波線 (口縁)波線文	横位条痕後 ナデ	横位条痕→ ナデ	褐色	褐色	良好	○	○	○		外面にス入付		
	64	K00_059	7227, 8547	E71	Ⅲa	深鉢	胴部	Ⅳ	—	条痕→ナデ	条痕→丁草ナデ	ナデ	褐色	良好	○	○	○		外面にス入付		
	65	K00_060	8581 ほか	E71	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅳ	—	条痕→ナデ	条痕→ナデ	横位条痕+ にぶい褐色	にぶい褐色	良好	◎	○	◎				
	66	K00_058	3168, 2150	D49	Ⅲa	深鉢	胴部	Ⅳ	—	条痕→丁草ナデ	条痕→丁草ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	○	○	○		内外にス入付	
	67	K00_020	9185	E71	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅳ	筋目後ナデ消し	条痕→ナデ	条痕	黄褐色+ 明褐色	黄褐色	良好	○	△	○		口縁部にス入付		
	68	K00_057	9007	E72	Ⅲb	小型 深鉢	底部	Ⅳ	—	丁草ナデ	丁草ナデ	淡黄色	黄灰色	良好	△	△	○		底に白色土 付		
	69	K00_056	3044	D62	Ⅱ	深鉢	底部	Ⅳ	—	丁草ナデ	丁草ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	○	△	○	○			
	70	K00_054	8672	E71	Ⅲb	深鉢	底部	Ⅳ	—	丁草ナデ	(内・底) ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	△	△	○	○		底部窪	
	71	K00_053	8217	E71	Ⅳ	深鉢	底部	Ⅳ	—	ナデ	(底)散物 注成(骨?)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	△	◎			底に胎骨の 残存	
	72	K00_055	3012	D58	Ⅱ	深鉢	底部	Ⅳ	—	ナデ	ナデ+ユビ オサエ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	○	○	○			
53	73	K00-187	8207 ほか	E71	Ⅲb	深鉢	口縁→ 胴部	Ⅳ	突帯	条痕→ナデ	条痕	黄褐色	黄褐色	良好					第20表史料 番号		
	74	K00-191	(E70 /) Ⅱ 深鉢	Ⅱ	深鉢	底部	Ⅳ	山伏突起5個 ・ 窪注成	ユビナデ→ 丁草ナデ 窪注成	条痕→丁草ナデ	条痕→ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	良好					滑石		
54	75	K00_015	7555	E70	Ⅲa	深鉢	口縁→ 胴部	Ⅴ	具股腹縁波線文	条痕→丁草ナデ	条痕→丁草ナデ	黄褐色	にぶい褐色	良好	○	○	◎	◎		補修孔 胎土	
	76	K00-188	8528 ほか	D71	Ⅲb	深鉢	口縁部	Ⅴ	(口唇)筋目	純文、ナデ	丁草ナデ	灰黄褐色+ にぶい黄褐色	黄褐色+ にぶい黄褐色	良好	○	◎	◎	◎		76-78頁一巻体 胎元2式	
	77	K00-189	4082 ほか	D71・ E70	Ⅲa/Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅴ	—	純文、ナデ	丁草ナデ	灰黄褐色+ にぶい黄褐色	黄褐色+ にぶい黄褐色	良好	○	◎	◎	◎		76-78頁一巻体 胎元2式	
	78	K00-190	8249	E71	Ⅲb	深鉢	底部	Ⅴ	—	純文 (底)丁草ナデ	丁草ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	◎	◎	◎		76-78頁一巻体 胎元2式(黒土)	

第9表 石器製作跡出土石器観察表

標記番号	掲載番号	実測番号	取上番号	区	層	器種	石材	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
								最大長	最大幅	最大厚		
79	S003	8408	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 端	1.25	1.3	0.3	0.29		
80	S005	8862	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 針	1.4	1.1	0.3	0.25		
81	S002	8407	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 露	1.7	1.25	0.3	0.4		
82	S1002	9061	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 上	1.5	1.3	0.35	0.34		
83	S011	8123	E-72	Ⅲ a	石鏃	玉鏃	1.5	0.95	0.35	0.33		
84	S024	8045	E-72	Ⅲ b	石鏃	HF	1.05	1.1	0.3	0.26		
85	S023	8022	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 露	1.25	1.1	0.3	0.25		
86	S001	8372	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 露	1.35	1.1	0.3	0.32		
87	S1004	9029	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 針	1.2	1	0.2	0.18		
88	S016	8051	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 三	1.2	1.3	0.4	0.45		
89	S009	8350	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 上	1.8	1.25	0.4	0.46		
90	S1007	9149	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 上	1.1	0.95	0.3	0.24		
91	S013	8110	E-72	Ⅲ b	石鏃	HF	1.5	1.15	0.35	0.37		
92	S1005	9114	E-72	Ⅲ b	石鏃	HF	1.1	1.1	0.3	0.2		
93	S101	30083	B T	Ⅱ	石鏃	08 上	2.35	1.5	0.6	1.33		
94	S107	9041	E-72	Ⅲ b	石鏃未製品	08 上	0.95	1.35	0.4	0.44		
95	S106	8427	E-72	Ⅲ b	石鏃未製品	08 露	1.25	1	0.4	0.34		
96	S012	8299	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 底	1.15	1.1	0.2	0.16		
97	S1014	9202	E-71	Ⅲ b	石鏃未製品	08 底	1.75	1.2	0.45	0.85		
98	S015	8089	E-72	Ⅲ b	石鏃	HF	1.6	1.1	0.3	0.42		
99	S014	8093	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 上	1.3	1.2	0.45	0.47		
100	S109	9020	E-72	Ⅲ b	石鏃	08 上	0.8	0.9	0.25	0.14		
101	S1013	9123	E-72	Ⅲ b	異形石鏃	露	1.6	0.7	0.45	0.46		
102	S1012	9015	E-72	Ⅲ b	異形石器	露	1.8	0.9	0.6	0.75		
103	S1008	9011	E-72	Ⅲ b	HF	08 上	1.05	1.8	0.3	0.58		
104	S1009	8854	E-72	Ⅲ b	HF	08 露	1.35	2.05	0.45	0.53		
105	S1015	8776	E-72	Ⅲ b	打製石片	HF	7.8	4.6	1.3	46.14		
106	S1016	8942	E-71	Ⅲ b	磨石	露	11.4	9.8	6.6	950		

第10表 縄文時代後期土器観察表

標記番号	掲載番号	実測番号	取上番号	区	層	器種	部位	分類	文様	調整				色調				胎土				備考				
										外面		内面		外面		内面		焼成	白	黒	赤		黄	灰	青	紫
107	K00_017	4753	E82	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	横位 2 条沈線 + 入り組み沈線文	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	△	△	△	△									
108	K00_085	-	056	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅵ	沈線文	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	○		○	○	○								
109	K00_019	5787	064	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	横位 2 条沈線 + 入り組み沈線文	丁寧なナデ	貰いナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	△	△	△					スス付着					
110	K00_086	5219	059	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	(口縁) 深い割み、口縁に凹線文	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	○	○	○	○					指痕?				
111	K00_064	-	154	397a	深鉢	胴部	Ⅵ	斜位 2 条沈線	ナデ	条痕 + ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	◎	○	○									
112	K00_087	30159	052	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅵ	斜位 4 条平行沈線	ナデ	条痕 + ナデ	明褐色 + にぶい黄褐色	褐色	良好	○	○	○	○					指痕?				
113	K00_070	5471, 3619	E58	Ⅲ	深鉢	口縁部	Ⅵ	胎土結核付、斜位連続刺突文、斜位連続へう割み	条痕後ナデ	条痕後ナデ	明褐色	明赤褐色	良好	○	○	○	○									
114	K00_066	5394, 5480	E56	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅵ	斜位連続爪形文	条痕	条痕	にぶい褐色	灰褐色	良好	○	○	○	○									
115	K00_069	5374, 5402	056	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅵ	斜位連続爪形文	条痕後ナデ	条痕 + ナデ	褐色	褐色	良好	○	○	○	○									
116	K00_068	5381, 5404	056	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	斜位連続爪形文	条痕後ナデ	条痕 + ナデ	褐色	褐色	良好	○	△	○	○					スス付着				
117	K00_016	5109, 5404	E60	Ⅲ	深鉢	口縁部	Ⅵ	上下連続刺突文 + 斜位連続刺突文	条痕後ナデ	条痕後ナデ	暗赤褐色	にぶい赤褐色	良好	○	○											
118	K00_073	5485	E57	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅵ	斜位貝殻線連続刺突文	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良好	○		○	○	○								
119	K00_067	3685	F59	Ⅲ	深鉢	口縁部	Ⅵ	斜位連続爪形文	ナデ	条痕後ナデ	にぶい褐色	黒褐色	良好	○	△	○	○									
120	K00_072	-	064	-	深鉢	口縁部	Ⅵ	斜位刺突文	ナデ	条痕後ナデ	にぶい褐色	灰褐色	良好	○	○	○	△									
121	K00_012	4694	B59	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	斜位 + 横位 4 条の平行沈線	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	○	○	○	○									
122	K00_159	4354, 4604	081	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	上下斜位連続爪形文 + 横位沈線 3 条 + 縦位沈線 2 条	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	○	○	○	○					スス付着				
123	K00_018	4362, 4363	081	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	上下斜位連続爪形文 + 横位刺突文 3 条	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	○	○	○	○									
124	K00_088	4780, 4784	057	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	3 条平行沈線 + 縦溝刺突文	ナデ + ミガキ	ナデ + ミガキ	明赤褐色	灰黄褐色	良好	○	○	○	○									
125	K00_082	4763	058	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	2 条平行沈線	ナデ + ミガキ	ナデ + ミガキ	明赤褐色	灰黄褐色	良好	○	○	○	○									
126	K00_089	4881, 4887	057	Ⅲ a	深鉢	口縁部	Ⅵ	(口縁) 2 条平行沈線 + 縦溝刺突文 (腹部) 割み	ナデ + ミガキ	ナデ + ミガキ	明赤褐色 + にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	良好	○	○	○	○									
127	K00_110	4807	057	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅵ	3 条平行沈線 + 縦溝刺突文 + 縦溝 1 割刺突文	へうナデ + ミガキ	へうナデ + ミガキ	褐色	褐色	良好	○	○	○	○					スス付着				

採掘番号	発掘番号	取上番号	区	層	器種	部位	分類	文様	調整				色調				胎土					備考	
									調整		色調		焼成	白	赤	青	黄	黒	小	備考			
									外面	内面	外面	内面											
128	H00_091	473 ほか	B59	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅱ	2条平行沈線	ヘラナデ+ ミガキ	ヘラナデ+	褐色	黒褐色	良好	○	○	○	○						
129	H00_090	30203	058	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅱ	2条平行沈線+ 縁溝縄文	ヘラナデ+ ミガキ	ヘラナデ+	褐色	灰黄褐色	良好	○	○	○	○						波状口縁
130	H00_083	-	OD45 46	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅱ	2条平行沈線+ 前目+押注文	ナデ	ナデ	褐灰色	にぶい黄褐色	良	○	○	○	○						
131	H00_085	-	064	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅱ	3条沈線+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰褐色	やや 不良	○	○	○	○						
132	H00_084	30100	058	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅱ	横位沈線+ 縄文+前目	ナデ+ ミガキ	象歯+	にぶい褐色	灰褐色	良好	○	○	△	○						
133	H00_028	4066	057	Ⅲa	鉢	胴部	Ⅱ	斜交文+4条平行沈線+ 波状沈線+2条平行沈線	ナデ+ ヘラミガキ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄色	良好	○	○	○	○						外蓋スス付
134	H00_075	4813 4815	057	Ⅲa	深鉢	胴部	Ⅱ	波状沈線+平行沈線 (間に縁溝縄文)	ナデ+ ヘラミガキ	ナデ+ ヘラミガキ	明赤褐色	黄褐色	良好	○	○	○	○						外蓋スス付
135	H00_027	4785 4786	058	Ⅲa	鉢	胴部	Ⅱ	3条沈線+ 縁位沈線+2条平行沈線	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄色	良好	○	○	○	○						外蓋スス付
136	H00_076	4976	057	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅱ	斜交文+4条平行沈線+ 波状沈線+横位沈線	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰褐色	暗灰黄色	良好	○	△	△	△						
137	H00_081	30204	058	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅱ	斜位沈線+2条平行沈線 (間に縁溝縄文)	ナデ+ ミガキ	ナデ	褐灰色	褐灰色	良好	○	△	△	△						◎
138	H00_077	30213	058	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅱ	沈線文+縁溝縄文	ナデ	ナデ	褐灰色	灰黄褐色	良好	○	◎	○	○						◎
139	H00_080	3048 3041	058	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅱ	3条平行沈線 (間に縁溝縄文)	ナデ	ナデ+ ミガキ	褐灰色	褐灰色	良好	○	◎	○	○						
140	H00_078	5372	057	Ⅲa	深鉢	胴部	Ⅱ	横位沈線+ 縦位斜交文+前目	ナデ	ナデ	灰黄褐色	褐色	良好	◎	○	○	○						
141	H00_079	30223	058	Ⅲb	深鉢	胴部	Ⅱ	斜位沈線文+斜交文	ナデ	ナデ+ ミガキ	にぶい褐色	黒褐色	良好	○	○	○	○						
142	H00_026	4968 ほか	857	Ⅳ	深鉢	底部	X	—	ナデ	ナデ+象歯 (底) 敷物圧 痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	○	○								底部に白色 土行層
143	H00_094	7375 7376	069	Ⅲa	深鉢	底部	X	—	ナデ?	ナデ?	褐色	にぶい褐色	不良	◎	○	○	○						底部に白色 土行層
144	H00_095	8167	070	Ⅲb	深鉢	底部	X	—	象歯+ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	○	○	○	○						底部に白色 土行層
145	H00_024	4860	057	Ⅲa	深鉢	底部	X	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい褐色	灰黄褐色	良好	○	△	○	○						
146	H00_023	4752	058	Ⅲa	深鉢	底部	X	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	明赤褐色	灰黄褐色	良好	○	○	○	○						
147	H00_092	6	047	Ⅰ	深鉢	底部	X	—	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	○		○	○						
148	H00_025	5444	857	Ⅱ	深鉢	底部	X	—	ナデ	(底) 敷物 圧痕	褐色	にぶい褐色	良	△	○	○	○						
149	H00_022	5439 ほか	057	Ⅲa	深鉢	底部	X	—	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良	○	○	○	○						接地面に白 色土行層
150	H00_098	-	064	-	フコ	-	Ⅱ	—	打ち欠き		にぶい褐色	灰黄褐色	良好	○	○	○	○						胴部利用
151	H00_100	4700	859	Ⅲa	フコ	-	Ⅱ	—	打ち欠き		褐灰色	灰黄褐色	良好	○	△	○	○						胴部利用
152	H00_099	5116	059	Ⅱ	フコ	-	Ⅱ	—	打ち欠き後 部分的に研磨		にぶい黄褐色	にぶい黄色	良	○	△	○	○						胴部利用
153	H00_096	5250	059	Ⅲa	フコ	-	Ⅱ	—	打ち欠き後 部分的に研磨		褐色	にぶい黄褐色	良好	◎	△	○	○						胴部利用
154	H00_097	-	OD45 46	Ⅰ	フコ	-	Ⅱ	—	打ち欠き後 部分的に研磨		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良			○	○						胴部利用 久ス付

第11表 縄文時代晩期土器観察表

採掘番号	発掘番号	取上番号	区	層	器種	部位	分類	文様	調整				色調				胎土					備考	
									調整		色調		焼成	白	赤	青	黄	黒	小	備考			
									外面	内面	外面	内面											
155	H00_013	5129	E59	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅰ	—	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色+	褐色	良好	○	○	○	○						
156	H00-172	3827	F55	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅰ	—	丁寧な横位ヘラ ミガキ	丁寧な横位ヘラ ミガキ	黒色	褐灰色	良好	○	○								
157	H00_093	5293	E58	Ⅲa	深鉢	底部	Ⅰ	—	丁寧なナデ (底) 丁寧なナデ	丁寧なナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	良好	○	○	◎							
158	H00-173	30164	052	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅰ	1条縦沈線	ナデ	ナデ			良好	○	○	○							

第12表 Ⅱ・Ⅲ層出土石器観察表

採掘番号	発掘番号	取上番号	区	層	器種	石材	流量 (cm)			重量 (g)	備考
							最大長	最大幅	最大厚		
159	S086	5319	E-59	Ⅲa	石鏝	08 西	3	1.4	0.4	1.28	
160	S081	5736	C-65	Ⅱ	石鏝	08	2.4	1.45	0.45	1.36	
161	S082	5114	E-59	Ⅱ	石鏝	08	2.25	1.55	0.3	1.05	
162	S063	6819	D-64	Ⅱ	石鏝	0F	2.05	1.3	0.25	0.63	
163	S067	5780	C-63	Ⅲa	石鏝	08 鼻	1.75	1.4	0.2	0.33	
164	S091	4990	C-56	Ⅲb	石鏝	08 上	1.8	1.35	0.4	0.63	
165	S105	9239	F-71	Ⅲb	石鏝	08 針	1.75	1.05	0.45	0.63	
166	S1006	9367	E-72	Ⅲb	石鏝	08 楯	2.1	1.25	0.35	0.53	
167	S079	8148	E-71	Ⅲb	石鏝	SH	1.65	0.95	0.2	0.23	
168	S103	8930	E-71	Ⅲb	石鏝	08 針	1.35	1.1	0.3	0.26	
169	S1001	9395	E-72	Ⅲb	石鏝	0F	1.25	1.1	0.35	0.28	

標記 番号	標記 番号	登録 番号	取上 番号	区	層	岩種	石材	寸法 (cm)			重量 (g)	備考
								最大長	最大幅	最大厚		
71	170	S080	4676	B-60	Ⅱ	石髓	HF	1.75	1.5	0.35	0.6	
	171	S084	8715	E-70	Ⅲb	石髓	08 磨	2.5	1.4	0.3	0.65	
	172	S004	8866	E-71	Ⅲb	石髓	08 針	1.7	1	0.35	0.34	
	173	S068	8175	E-70	Ⅲb	石髓	08 針	2.3	1.4	0.4	0.74	
	174	S098	9251	E-69	Ⅲb	石髓	08 西	2.7	1.5	0.35	0.92	
	175	S094	8153	F-55	Ⅲb	石髓	08 針	2.45	2.1	0.4	1.35	
	176	S078	5371	E-57	Ⅲb	石髓	HF	2.9	1.45	0.3	0.79	
	177	S065	3782	E-59	Ⅲ	石髓	HF	2.65	1.8	0.25	1.08	
	178	S093	7174	E-64	Ⅲa	石髓	HF	2.7	2.1	0.35	1.1	
	179	S077	31494	C-48	Ⅱ	石髓	貫	3.5	2.3	0.4	2.19	
	180	S089	5240	D-60	Ⅲa	石髓	08 針	1.8	1.65	0.25	0.5	
	181	S092	30374	2T	Ⅱ	石髓	HF	1.85	1.5	0.3	0.83	
72	182	S099	4421	E-71	Ⅲb	石髓	08 磨	1.25	1	0.35	0.29	
	183	S090	9038	E-72	Ⅲb	石髓	08 上	1.5	1.1	0.35	0.41	
	184	S104	8782	E-72	Ⅲb	石髓	08 磨	1.15	0.7	0.2	0.15	
	185	S1010	8323	E-72	Ⅲb	石髓	08 針	1.5	1.2	0.25	0.3	
	186	S108	5172	E-59	Ⅲa	石髓	SH	1.6	2.1	0.3	0.9	
	187	S095	4780	B-59	Ⅲb	石髓	08 磨	2.35	2	0.35	1.21	
	188	S097	8288	E-66	Ⅲb	石髓	AN	1.35	1.45	0.3	0.4	
	189	S006	8904	E-71	Ⅲb	石髓	08 針	1.25	1.2	0.3	0.28	
	190	S102	4100	D-71	Ⅲb	石髓未製品	08 上	0.95	1.2	0.35	0.34	
	191	S096	5781	C-63	Ⅱ	石髓未製品	08 西	1.65	1.45	0.4	0.77	
	192	S1003	9337	E-72	Ⅲb	石髓未製品	HF	1.55	1.45	0.55	0.89	
	193	S100	8703	E-70	Ⅲb	石髓未製品	08 針	2.05	1.65	0.7	1.74	
	194	S020	9222	E-71	Ⅲb	石髓	HF	3.3	6.8	0.75	12.21	
	195	S021	8234	E-71	Ⅲb	石髓	HF	3.9	6.3	1.2	15.34	
73	196	S110	5478	D-57	Ⅲb	石髓	玉髓	3.35	4.55	0.75	8.53	
	197	S022	9427	E-71	Ⅲb	石髓	シルト質 SH	2.3	3.8	0.75	2.52	
	198	S1010	8886	E-71	Ⅲb	石髓	鉄石質	2.35	1.75	0.6	1.75	
	199	S017	7341	E-71	Ⅲa	スクレイパー	SH	6.1	6.55	2.5	114.1	
	200	S018	9456	E-71	Ⅲb	スクレイパー	HF	3.65	6.45	1.2	23.4	
	201	S1027	8210	F-71	Ⅲb	スクレイパー	HF	6.35	8.6	1.3	34	
74	202	S019	9402	E-72	Ⅲb	石髓	HF	6.1	3	0.96	14.97	
	203	S1036	4064	E-71	Ⅲb	HF	08 上	1.8	1.6	0.7	1.89	
	204	S1011	8952	E-71	Ⅲb	使用痕跡片	HF	3.4	6.55	0.95	23.3	
	205	S074	3802	F-57	Ⅱ	HF	HF	6.65	8.9	1.65	60.31	
	206	S1039	7315	E-71	Ⅲa	打製石片	HF	9.5	7.5	1.7	112	
	207	S1040	7229	E-71	Ⅲa	打製石片	SH	9.2	7.9	2.8	254	
	208	S1038	3696	F-59	Ⅲ	打製石片	HF	9	6.5	1.75	104	
75	209	S1041	5481	D-57	Ⅲa	打製石片	SH	9.2	13.2	2.55	256	
	210	S1030	5474	D-57	Ⅱ	磨製石片	HF	13.45	6.3	3.3	390	
	211	S1025	4775	B-60	Ⅲb	磨製石片	HF	15.2	6.2	3.3	410	
	212	S046	3714	E-58	Ⅲ	磨製石片	HF	5.6	5.7	2.5	103.07	
	213	S1031	4791, 4790	B59, C58	Ⅲb	磨製石片	AN	11	5.8	3	197.16	
	214	S036	3812	F-55	Ⅱ	磨製石片	HF	10.7	6.1	2.5	258.41	
	215	S027	4434	D-61	Ⅲb	磨製石片	HF	8.8	7.4	3.5	284.36	
	216	S1026	4800	C-58	Ⅲb	磨製石片	HF	13.3	7.7	4.1	594	
76	217	S1027	8801	U-54	Ⅲb	磨製石片	HF	8.1	6.5	3.5	264	
	218	S042	4585	E-73	Ⅲb	磨製石片	SH	9.8	4	1.3	71.32	
	219	S1039	4972	C-57	Ⅲb	磨製石片	HF	4.4	4.45	1.9	48	
	220	S1043	5252	C-68	Ⅲb	磨製石片	HF	8.6	4.85	1.7	98	
	221	S1042	30089	9-53	Ⅱ	磨製石片	HF	15.9	6.3	1.9	168	
	222	S1028	4947	B-56	Ⅲb	磨製石片	HF	10.6	5	2.1	108	
	223	S1045	5789	C-64	Ⅲa	磨製石片	HF	8.65	4	1.35	70	
	224	S1018	7288	E-71	Ⅲa	磨石	花崗岩	10.1	8.9	4.7	618	
	225	S1019	8223	E-72	Ⅲb	磨石	SA	10.6	7.1	3.9	244	
	226	S1020	8241	E-71	Ⅲb	磨石	SA	11.2	5.7	3.7	292	
	227	S1046	8284	E-67	Ⅲa	磨石・磨石	HF	10.8	6.1	5.5	502	
	228	S030	4179	E-73	Ⅲb	磨石・磨石	SA	12.2	8.1	3.9	493	
77	229	S1022	8641	E-71	Ⅲb	磨石・磨石	AN	11.1	10	6.5	994	
	230	S1024	5001	C-56	Ⅲb	磨石・磨石	AN	5.2	4.3	3.9	118	
	231	S1017	4961	C-60	Ⅲb	磨石・磨石	SA	9.9	6.3	5.5	420	
	232	S1023	8579	E-71	Ⅲb	磨石・磨石	SA	7.1	4.8	4	168	
	233	S047	4107	E-72	Ⅲb	磨石	AN	5.8	2.7	2.3	60.33	
	234	S1021	8161	D-71	Ⅲb	磨石	SA	6.1	4.8	4	138	
	235	S1033	9234	E-71	Ⅲb	石皿	SA	11.2	9	3.2	424	
78	236	S1032	9455	E-71	Ⅲ	石皿	SA	25	23.8	4.5	2836	
	237	S1034	4771	B-59	Ⅲb	石皿	SA	14.9	9.2	5.9	990	
	238	S1035	5297	E-58	Ⅱ	石皿	SA	9.1	7.8	5.5	594	
	239	S1050	5365	D-57	Ⅲa	磨盤	SH	21.4	13.15	4.25	1306	
	240	S1051	4846	C-57	Ⅲa	磨盤	HF	11.6	15.05	4	682	
	241	S1049	7045	F-65	Ⅱ	磨盤	HF	13.7	10.2	3.8	546	
79	242	S1052	30144	E-51	Ⅱ	磨石製品	磨石	8.2	5.5	3.4	34	

第13表 竪穴住居内出土遺物観察表

確認番号	発掘番号	取上番号	区	層	種類	部位	分類	文様	調整					色調		胎土					備考			
									外面	内面	外面	内面	焼成	白	石	赤	黄	黒	小	他				
82	243	1010	3187 3104	F-72	Ⅱ	鉢	口縁部	高橋	(口縁) 斜目 (口縁) 斜目突帯1条	ナデ	丁寧なナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	○	○	○	○	○	○	○	○	○	突帯周辺スス付帯
	244	111	3108	F-72	Ⅱ	鉢	胴部	高橋	斜目突帯	ナデ	ナデ	灰褐色	褐色	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	○	第20発掘跡No.5, 外周スス付帯
	245	09	3146	F-72	Ⅱ	壺	口縁部	高橋	貼付突帯2条	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	○	底径9.0cm 外周スス付帯
	246	112	3084	F-72	Ⅱ	壺	底部	高橋	—	ナデ, ユビオサエ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	○	底径9.0cm 外周スス付帯

第14表 弥生時代・古墳時代出土遺物観察表

確認番号	発掘番号	取上番号	区	層	種類	部位	分類	文様	調整					色調		胎土					備考				
									外面	内面	外面	内面	焼成	白	石	赤	黄	黒	小	他					
83	252	H00_102	-	E67 58	Ⅰ	壺	口縁部	高橋式	—	斜目	ミガキ	丁寧なナデ	褐色	明赤褐色	良好	△	○	○	○	○	○	○	○	赤色胎	
	253	H00_101	-	Q045 45	Ⅰ	壺	口縁部	高橋式	—	斜目	横位ヘラナデ	ナデ	にぶい褐色+ 褐色	褐色	良好	○	○	○	○	○	○	○	○		
	254	H00_105	-	Q045 46	Ⅰ	壺	胴部	高橋式	—	2条平行突帯 斜目	ナデ	ナデ+ ユビオサエ	褐色	にぶい褐色	良	○	○	○	○	○	○	○	○		
	255	H00_103	-	E68	Ⅰ	壺	口縁部	入来1式	—	摩滅	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	不良	○	○	○	○	○	○	○	○	摩滅	
	256	H00_106	-	Q045 46	Ⅰ	壺	胴部	入来1式	—	2条平行突帯	ナデ	ナデ+ ユビオサエ	褐色	褐色	良	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	257	H00_107	30299	052	Ⅱ	壺	胴部	—	—	線刻	丁寧なナデ ナミガキ	ユビオサエ ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	○	線刻
	258	H00_104	-	G51	Ⅰ	壺	口縁部	—	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	褐色	褐色	良	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	259	H00_108	-	E76	Ⅱ	壺	胴部	成川式	(4.5)	—	横位ヘラケ ズリ	ヘラケ ナデ	褐色+褐色	にぶい赤褐色	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	260	H00_178	-	E76	Ⅱ	壺	胴部	成川式	(4.5)	—	摩滅	摩滅	淡褐色	灰白色	良	○	○	○	○	○	○	○	○	○	赤色胎
	261	H00_179	6704	E64	Ⅱ	壺	胴部	成川式	(5.2)	—	横位ナデ	ナデ (内面)ユ ビオサエ	褐色	褐色	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
262	H00_109	-	C49	Ⅱ	壺	底部	成川式	—	—	ナデ	ナデ	(外, 底)褐色	にぶい褐色	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	○		

第15表 中近世遺構内出土遺物観察表

確認番号	発掘番号	遺跡名	取上番号	区	層	種類	部位	文様	法量 (cm)			胎土の色調	胎土の硬さ	胎土の色調	胎土の硬さ	胎土の色調	胎土の硬さ	胎土の色調	胎土の硬さ	胎土の色調	胎土の硬さ	胎土の色調	胎土の硬さ	備考
									口径	底径	高さ													
88	263	14	S01 P02	7415	E-71	Ⅱ	青磁	桜花皿	口～底部	青草文, 見込み に唐線1条	11.4	5.0	3.0	灰白色	青磁胎	オリブ灰色	高台内露胎	龍泉窯系	14C 後半～	18C	—	—	—	明代?
264	19	S002	No.2	—	—	—	薩摩焼	土瓶	口～底部	—	8.0	(肩) 17.6	(口)	にぶい 褐色	鉄胎	黒オリーブ色	外面上位～中位 口縁部胎はぎ	富代川	18C	—	—	—	—	外部胎 に貝目
265	16	S002	No.6	—	—	—	薩摩焼	壺	口～底部	口縁下に浅い 波線1条	29.5	20.6	9.4	赤褐色	鉄胎	黒褐色	口唇部胎はぎ	富代川	18C	—	—	—	—	外部胎 に貝目
266	16	S002	No.9, 19	—	—	—	薩摩焼	鉢	口～底部	口縁下に浅い 波線1条	26.2	12.4	12.1	褐色	鉄胎	オリブ灰色	外面全面	富代川	18C	—	—	—	—	外部胎 に貝目
267	18	S002	No.15	—	—	—	薩摩焼	灯明具	方形	—	4.2	4.0	5.7	にぶい 赤褐色	鉄胎	黒オリーブ色	胴中位以下露胎	富代川	近世～ 近代	—	—	—	—	仏具? 湯舟?
268	23	S002	—	—	—	—	青磁	碗	胴～底部	段落ち	—	5.1	(2.1)	灰白色	青磁胎	灰色 (10/6/1)	高台内一部露胎	龍泉窯系	14C?	—	—	—	—	上田04類
269	17	S002	—	—	—	—	薩摩焼	碗	口～底部	蛇の目胎はぎ	12.4	4.4	6.2	赤褐色	鉄胎	黒オリーブ 褐色	高台露胎	薩摩焼	近世	—	—	—	—	

第16表 中近世遺構内出土遺物観察表

確認番号	発掘番号	遺跡名	取上番号	区	層	種類	部位	時代	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土					備考							
									口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		白	石	赤	黄	黒		小	他					
104	270	22	S002	No.13, 7	—	—	土製品	地持	口縁～胴部	近世	31.6	—	(3.3)	ナデ	型押し後 ナデ	褐色	褐色	良好	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	外周スス付帯 厚丸1.1方角	
	271	21	S002	No.28	—	—	土製品	地持	口縁～胴部	近世	33.0	—	(5.2)	ナデ	型押し後 ナデ	褐色	褐色	良好	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	外周スス付帯	
106	272	02	S005	3895	0-61	Ⅱ	土器類	坪	口～底部	古代	13.0	7.6	3.8	回転ナデ	(底)へう り	灰白色	灰白色	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	
	273	01	S006	3885	E-61	Ⅱ	土器類	壺	底部	中世	—	8.0	(1.3)	回転ナデ	(底)糸切り	黄褐色	黄褐色	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	
108	274	05	S008	P09	7410	A-73	Ⅱ	土器類	壺	口縁～胴部	古代	15.2	—	(5.3)	回転ナデ	回転ナデ後 へうりミガキ	褐色	褐色	良好	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通
	275	08	S008	7409	A-73	Ⅱ	土器類	壺	胴～底部	古代	—	7.0	(3.5)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	
	276	04	S009	7405	A-73	Ⅱ	土器類	壺	底部	古代	—	6.2	(2.3)	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色	黄褐色	良	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	
277	07	S009	P18	7411	A-73	Ⅱ	土器類	深鉢	口縁部	縄文	—	—	(4.3)	糸巻後ナデ	糸巻後ナデ	にぶい褐色 赤褐色	褐色	良好	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	

第17表 古代・中近世出土遺物観察表（土器・土製品）

群	種別	実測番号	取上番号	区	層	種類	器種	部位	寸法 (cm)			調検			色調			胎土			備考				
									口径	口径	器高	外面	内面	内面	焼成	焼成	胎土の色調	胎土の色調	石灰	赤土		黒土	小粒		
116	276	KD_174	-	E76	II	土師器	埴	腹-底面	くびれ 6.4	8.2	(2.8)	ミガキ	ミガキ	淡黄褐色	灰色	良	精練					細内部にスス付着			
	279	KD_175	-	E76	II	土師器	埴	腹-底面	くびれ 1.1	-	-	ロク口調整のユビオサエ	回転ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	良									
	280	KD_176	-	E76	II	土師器	埴	腹-底面	-	4.2	(2.8)	ロク口調整	ロク口調整	淡黄褐色	明褐色	良好	精練						内外面未		
	281	KD_181	3004	G58	II	土師器	土師器	口縁部	-	-	(3.8)	ナデ	ナデ	褐色	褐色	良							口唇部押圧		
	282	KD_182	-	E68	I	土師器	土師器	口縁部	-	-	(2.9)	ケズリ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	良好									
	283	KD_181	-	E76	II	焼埴	焼埴	口縁部	-	-	(2.6)	布目張	ナデ?	淡黄褐色	淡黄褐色	良	精練							△	
	284	KD_111	-	E76	II	焼埴	焼埴	口縁部	-	-	-	布目	ナデ	褐色	褐色	不良								砂粒よく入る	
	285	KD_112	-	-	I	焼埴	焼埴	胴部	-	-	-	ナデ+ユビオサエ+布目	ナデ+ユビオサエ	にみじ褐色	にみじ褐色	良好								砂粒よく入る	
	286	KD_116	-	CD5_46	II	透器	壺	ロー底形	つぶみ 1.6	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色	淡黄色	普通	精練							玉珠つまみ	
	287	KD_117	-	E67_68	I	透器	埴	底面	-	7.2	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色	オリーブ灰色	普通								表面に孔があく	
	288	KD_118	-	CD5_46	I	透器	壺	胴部	-	-	-	平行タタキ	ユビオサエ	灰色	灰色	普通	精練								
	289	KD_119	3813	F55	II	透器	壺	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心内状当て具張	灰色	灰色	普通	普通								
	290	KD_121	3826	F55	II	透器	壺	胴部	-	-	-	平行タタキ	当て具張	にみじ褐色	にみじ褐色	良	普通								
291	KD_122	-	C49	I	透器	壺	胴部	-	-	-	格子目タタキ	当て具張?	自然焼、オリーブ色	にみじ褐色	良	普通									
292	KD_120	-	C49	II	透器	壺	胴部	-	-	-	平行タタキ	同心内状当て具張	褐色	にみじ褐色	普通	普通									
117	293	KD_177	6860	E63	II	土師器	壺	ロー底形	8.2	6.4	1.8	回転ナデ、糸切り	ケズリ	褐色	にみじ褐色	良好	精練							中折	
	294	KD_180	6997	E64	II	土師器	壺	ロー底形	7.6	6.4	1.8	回転ナデ、糸切り	ケズリ	褐色	褐色	良好	精練							外蓋スス付着	
	295	KD_113	3006	G58	II	土師器	壺	ロー底形	7.6	6.0	1.7	回転ナデ、糸切り+糸張	ケズリ	淡黄褐色+灰黄色	淡黄褐色	普通								〇	
	296	KD_114	7164	E64	III	土師器	壺	底面	13.4	8.6	2.5	回転ナデ、糸切り	回転ナデ、糸切り	オリーブ灰色	にみじ褐色	普通									古代末一平蓋
	297	KD_115	-	C67	I	土製品	土師器?	胴部	-	-	-	ナデ+ミガキ	ナデ+ミガキ	褐色	褐色	良好								用途不明	
119	341	KD_150	-	C49	II	土製品	結核	口縁部	-	-	(4.1)	ナデ	回転ナデ	にみじ褐色	褐色	良好								(外) 平行足縁2条	
	342	KD_132	-	-	I	土製品	茶蓋	胴部	-	-	-	ユビオサエ	ナデ	褐色	褐色	良	精練							把手	
	343	KD_185	4442	E61	II	土製品	土人形	胴部	-	-	-	形作り	形作り+ユビオサエ	淡黄褐色	淡黄褐色	良好								黒焼き	
	344	KD_156	-	-	II	土製品	甕道具	底面	(5.2)	-	1.1	形作り	形作り	淡黄褐色	淡黄褐色	良好								陶土	

第18表 古代・中近世出土遺物観察表（陶磁器）

群	種別	実測番号	取上番号	区	層	種類	器種	部位	寸法 (cm)			文様		胎土の色調	釉薬の種類	釉薬の色調	施釉部位	産地	年代	備考
									口径	口径	器高	外面	内面							
117	298	KD_129	30075	G58	II	白磁	碗	底面	-	6.8	(2.6)	-	-	灰白色	白磁釉	灰白色	(内面) (残存部)	中国	16世紀中葉	白磁碗IV層
	299	KD_130	-	E68	I	白磁	碗	口縁部	-	3.2	(2.2)	-	-	灰白色	白磁釉	灰白色	外面全体(下半部)	中国	中世後半	高台内に蓋(「子」)
	300	KD_124	7037	E64	II	黄磁	徳田皿	口縁部	-	-	(2.7)	-	唐草文+平行線	灰白色	黄磁釉	オリーブ灰色	全面(残存部)	龍泉窯系?	14C後半~時代	
	301	KD_123	-	E70	II	黄磁	徳田皿	口縁部	-	-	(2.7)	-	唐草文+平行線	灰白色	黄磁釉	オリーブ灰色	全面(残存部)	龍泉窯系?	15C~16C	
	302	KD_126	30133	D52	II	黄磁	碗	口縁+底面	9.4	4.0	2.1	-	華文様文(ジグザグ状)	灰白色	黄磁釉	オリーブ灰色	外面(下半部)	龍泉窯系?	15C~16C	
	303	KD_125	30135	D52	II	黄磁	碗	口縁+底面	10.9	-	(4.1)	-	-	灰白色	黄磁釉	オリーブ灰色	全面(残存部)	龍泉窯系?	15C~16C	上田E層
	304	KD_127	-	CD5_46	I	黄磁	碗	口縁部	12.2	-	(3.3)	-	-	灰白色	黄磁釉	オリーブ灰色	全面(残存部)	龍泉窯系?	15C~16C	上田D層
	305	KD_128	-	-	I	黄磁	碗	底-底面	-	5.0	(2.9)	-	華文様文の印文	灰白色	黄磁釉	オリーブ灰色	外面高台(基部)	龍泉窯系?	14C?	
	306	KD_182	6986	F65	II	黄磁	碗	底-底面	-	4.0	(3.3)	龍潭弁文	-	灰白色	黄磁釉	オリーブ灰色	高台内面(基部)	龍泉窯系?	15C後半~16C	
	307	KD_138	-	E68	I	黄磁	碗	底面	-	6.0	(1.7)	-	-	灰白色+淡黄褐色	黄磁釉	灰白色	全面	龍泉窯系?	中世後半	
	308	KD_135	-	B67	I	染付	皿	底-底面	-	2.6	(1.5)	-	-	灰白色	コバルト釉?	明褐色	黄付+輪線	漳州窯	16C~17C	小野島B層
	309	KD_136	30405	D52	II	染付	皿	底面	13.8	-	(2.7)	2条の茶線	1条の茶線	灰白色	コバルト釉?	灰白色	全面	漳州窯	16C~17C	小野島B層
	310	KD_134	-	B68	I	染付	碗	底面	-	4.6	(2.7)	唐草文	下に1条の茶線	灰白色	透明釉	灰白色	黄付+見込み以外	漳州窯	16C~17C	蛇の目跡はぎ
311	KD_137	-	C49	II	染付	碗	口縁+底面	15.6	-	(2.8)	1条の茶線	唐草文	灰白色	透明釉	灰白色	全面	中国?	中世後半		
118	312	KD_142	-	C49	I	磁器	皿	口縁+底面	9.2	-	(2.1)	-	四方模文(見込み) 2条	灰白色	(内) 透明釉(外) 磁釉	(内) 灰白色(外) リーズ色	全面	肥前窯(内野山北窯)	17C後半~18C	

第5章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の種類と目的

中津野遺跡台地部の自然科学分析は、「竪穴住居跡内出土土器付着炭化物の放射性炭素年代測定」244と「土器集中内出土土器付着物の放射性炭素年代測定」31、「包含層出土土器付着炭化物の放射性炭素年代」73を平成30年度に行っている。

「竪穴住居跡内出土土器付着炭化物の放射性炭素年代測定」と「土器集中内出土土器付着物の放射性炭素年代測定」では、遺構内埋土から出土した土器を測定することで、遺構の年代や土器型式と年代との関係に関する基礎資料を得ることを目的としている。「包含層出土土器付着炭化物の放射性炭素年代」では、土器型式と年代との関係に関する基礎資料を得ることを目的としている。

また、測定した土器型式は、244は弥生時代前期、31と73は縄文時代前期後葉から中期にかけての土器型式であり、放射性炭素年代測定があまり行われていない時期の土器型式のため、今後の研究資料としての活用も1つの目的である。

なお、平成30年度の自然科学分析は低地部の木製品の樹種同定と遺構内出土遺物の炭素安定同位体分析も合わせて行った。そのため、納品された自然科学分析報告をもとに台地部のみに再編を行い、体裁を整え掲載している。

第2節 中津野遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

中津野遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町中津野に所在し、金峰山地中嶺北麓の台地縁辺、万之瀬川右岸の沖積地から台地上にかけて立地する。昭和25年には台地上から竪穴状遺構とほぼ完形の土器が多数出土し、弥生時代終末の中津野式土器の標式遺跡として知られている。

本業務では、土器付着物の放射性炭素年代測定分析を実施する。

2 試料

試料は、土器付着炭化物4点である。試料の詳細は各分析結果表(第20表)に示す。

3 分析方法

分析試料はAMS法で実施する。材に関しては試料表面の汚れをメス、ピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。土器付着炭化物は、双眼顕微鏡で観察し、埋没中に付着したとみられる植物遺体等を取り除く。

塩酸(HCl)や水酸化ナトリウム(NaOH)を用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸-アルカリ処理)。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.0001M~1Mまで濃度を上げ、試料の状況をみながら処理を進める。1Mの水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合はAAA、濃度を1Mまで上げることができず、薄めた状態で処理した場合にはAaAと記す。

上記した処理後の試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹³C-AMS専用装置を用いて、¹³Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での報告に従う(Stuiver & Polach, 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正は、OxCal4.3.2(Bronk, 2009)を使用し、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線(Intcal13; Reimer et al., 2013)を用いる。暦年較正結果は $1\sigma \cdot 2\sigma$ (1σ は統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲)の値を示す。

4 結果

結果を第20表、第120図に示す。分析の結果、土器付着炭化物は脆弱であったため、アルカリの濃度を薄めた処理を行う(AaA)。試料の測定年代(補正年代)は、竪穴住居No.3108(No.5)(掲載番号244)が $2545 \pm 20\text{BP}$ 、土器集中B-57区 III b層 No.3871(No.6)(掲載番号31)が $4825 \pm 25\text{BP}$ 、土器集中B-57区 III b層 No.3871(No.7)(掲載番号31)が $4885 \pm 25\text{BP}$ 、E-70区 III a層 No.9476(No.8)(掲載番号73)が $4175 \pm 25\text{BP}$ である。

暦年較正は、大気中の¹³C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹³C濃度の変動、及び半減期の違い(¹³Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代はNo. 5 (244) が2749~2508 calBP, No. 6 (31) が5605~5481 calBP, No. 7 (31) が5650~5590 calBP, No. 8 (73) が4832~4622 calBPである。

5 考察

土器付着炭化物についてみると、No. 5 (244) が暦年代で約2700年前、No. 6・No. 7 (31) が約5600年前、No. 8 (73) が約4700年前の値が得られた。調査所見によると、No.5は高橋式土器、No.6、No.7は縄文時代前期末、No.8は縄文時代後期とされる。No.8は若干古い値が得られた。その他は調和する値である。

引用文献

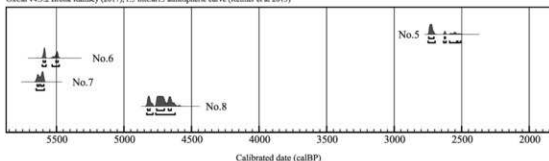
- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon, 51, 337-360.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Halldason H., Hajdas L., Hatte C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) .2006, 針葉樹材の識別 IARAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東陸夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. (Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IARA List of Microscopic Features for Softwood Identification) .
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of 14C Data, Radiocarbon, 19, 355-363.

第20表 放射性炭素年代測定結果

試料	図表番号	遺物番号 (実測番号)	性状/ 備付	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ 13C (‰)	暦年較正年代		Code No.	
							年代値	標準差		
5	244	3108 (黄-11)	壱穴住居跡内 出土土器付着 炭化物	AaA (0.0001M)	2545 ± 20 (2546 ± 21)	-21.39 ± 0.33	σ	cal BC 795 - cal BC 757 2744 - 2706 calBP 63.8	YU- 8624	pai- 11528
								cal BC 679 - cal BC 672 2628 - 2621 calBP 4.4		
								cal BC 800 - cal BC 748 2749 - 2697 calBP 66.6		
								cal BC 685 - cal BC 667 2634 - 2616 calBP 8.4		
								cal BC 640 - cal BC 568 2569 - 2537 calBP 15.2		
								cal BC 580 - cal BC 559 2529 - 2508 calBP 3.2		
6	31	3871 (186)	土器集中出土 土器付着 炭化物	AaA (0.001M)	4825 ± 25 (4826 ± 24)	-22.78 ± 0.54	σ	cal BC 3555 - cal BC 3540 5504 - 5489 calBP 27.2	YU- 8625	pai- 11529
								cal BC 3656 - cal BC 3628 5605 - 5577 calBP 48.0		
								cal BC 3583 - cal BC 3532 5532 - 5481 calBP 47.4		
								cal BC 3649 - cal BC 3633 5598 - 5582 calBP 41.0		
								cal BC 3555 - cal BC 3540 5504 - 5489 calBP 27.2		
								cal BC 3656 - cal BC 3628 5605 - 5577 calBP 48.0		
7	31	3871 (186)	土器集中出土 土器付着炭化物	AaA (0.001M)	4885 ± 25 (4884 ± 24)	-18.59 ± 0.44	2σ	cal BC 3694 - cal BC 3679 5643 - 5628 calBP 24.6	YU- 8626	pai- 11530
								cal BC 3666 - cal BC 3645 5615 - 5594 calBP 43.6		
								cal BC 3701 - cal BC 3641 5650 - 5590 calBP 95.4		
								cal BC 2877 - cal BC 2859 4826 - 4808 calBP 12.6		
								cal BC 2809 - cal BC 2752 4758 - 4701 calBP 41.9		
								cal BC 2722 - cal BC 2702 4671 - 4651 calBP 13.6		
8	73	9476 (187)	土器付着 炭化物	AaA (0.0001M)	4175 ± 25 (4177 ± 24)	-20.32 ± 0.29	σ	cal BC 2883 - cal BC 2837 4832 - 4786 calBP 20.2	YU- 8627	pai- 11531
								cal BC 2816 - cal BC 2673 4765 - 4622 calBP 75.2		
								cal BC 2877 - cal BC 2859 4826 - 4808 calBP 12.6		
								cal BC 2809 - cal BC 2752 4758 - 4701 calBP 41.9		
								cal BC 2722 - cal BC 2702 4671 - 4651 calBP 13.6		
								cal BC 2883 - cal BC 2837 4832 - 4786 calBP 20.2		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定値の±(測定値の68%が範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AaAは、新・アルカリ・微処理を示す。AaAは試料の物質的な、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データベースは、Intcal13を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の高計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である。

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



第120図 暦年較正結果

第6章 総括

第1節 旧石器時代について

中津野遺跡周辺で発掘調査された遺跡では、本遺跡から約1km北西部に山野原遺跡(金峰町:第10図30,18頁)から細石刃文化期の遺物が出土しているのみである。遺跡南側の旧加世田市域においては、春ノ山遺跡(加世田津貫)で縄群9基の遺構及びナイフ形石器・台形石器等の遺物が出土したナイフ形石器文化期の遺跡やナイフ形石器及び細石器の出土した祝原遺跡(加世田川畑)、縄群1基とともに細石器が出土した平田尻遺跡(加世田川畑)などがみられる。

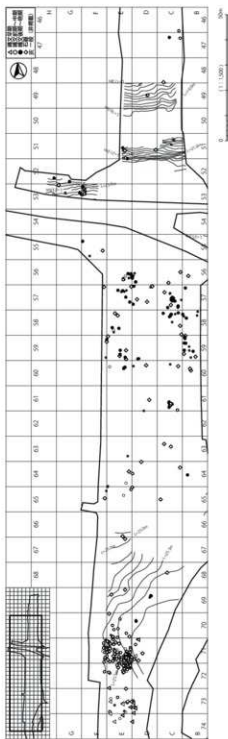
中津野遺跡台地部では、縄群6基、土坑2基、ナイフ形石器、削器、スクレイパー、錐、石核が出土した。金峰町内においては、旧石器時代の遺構が検出されたのは初めてであり、遺物においてもナイフ形石器文化期の出土は初めてである。地形においても当該遺跡は金峰山地中岳の北西麓から伸びる標高30mの舌状台地上に位置し、山野原遺跡は中津野遺跡低地・低湿地部のある沖積地を挟んだ北側の金峰山地から伸びる舌状台地上に位置している。文化期は異なるものの同じ舌状台地上に所在していることが指摘される。

第2節 縄文時代前期～後期について

1 II類～V類土器群について(第121～123図)

縄文時代前期～中期の土器は70～74区を中心に出土している。特にD～F-70～72区では、密集して出土し、74や77～79については集中して出土した土器が接合し、完形となった。ここでは器形がおおよそわかるものを中心に中津野遺跡台地部の縄文時代前期末～中期中葉について考えたい。

当該遺跡出土のII類土器は深溝式の系統の一群である。連点文を描くタイプと突帯を貼付けて文様を構成するタイプの2パターン存在する。41は口唇部内面に深く太い刻み目を施し、口縁部外面に2条の平行貼付突帯の間に3条の波状を呈する貼付突帯を施し、貼付時の指頭圧痕が残る。貼付突帯は雑でやや浮いており、一部分は剥落し、剥落箇所も顕著である。口唇部内面に深い刻みを施すものとしては、上水流遺跡でも出土例(『上水流遺跡4』掲載番号676,137頁)がみられ、条痕文系に分類されている。また、口縁部外面の貼付突帯や器形をみると、突帯の貼付はいわゆる「ミミズばれ状」を呈しており、底部は不明であるが口縁部はやや外反していることから中期前葉頃の「野久尾式」に該当すると考えられる(立神倫史氏御教示)。「野久尾式」は相美氏によると深溝式併行の大隅半島～奄南南部に広がる土器型式で



第121図 縄文時代土器出土状況図

あると指摘される(相美 2006)が、今回本遺跡で出土したことにより、野久尾式の薩摩半島南西部への広がりも指摘できる。しかし、口唇内面からの深い刻みを施すことは薩摩半島南西部での独自性といえるだろう。

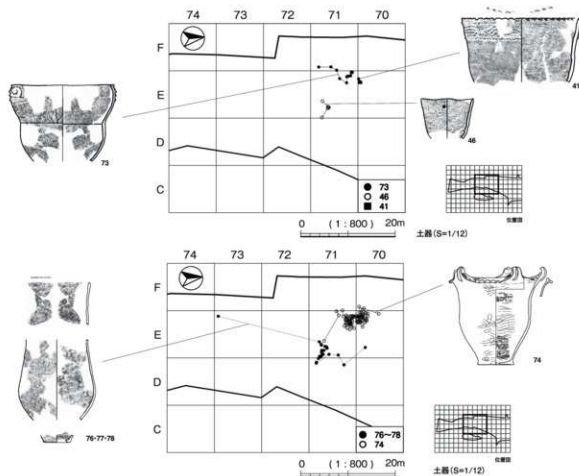
Ⅲ類土器は条痕文系の一群であり、土器集中31もここに入る。31は口唇部に上方から刻目を入れている。自然科学分析(AMS)を行っており、BP4885±25～BP4825±25(約5,600年前)の値が出ている。前期末～中期初頭に当たる。49は口縁部がやや外反し、胴部の張り出しが弱い器形を持つ。口唇部に上方から刻目を入れる。

Ⅳ類土器は春日式系統の一群である。口縁部がキャリバー状によく発達した器形をもつ前谷段階の61・73、春日式後半と考えられる口縁部の内湾がやや弱くなる74が出土している。73は口縁部に渦巻き状の貼付突帯を施す春日式前谷段階(中期中葉)に該当する。自然科学分析でBP4175±25(約4,700年前)の値が出ている。74は5つの山状突起をもち、谷部に深い刻みを施している。胎土は薄手で滑石を含む搬入品である。器形はややキャリバー状を呈し、型式では中期中葉後半の春日式

でも新しい段階のものと考えられる。同じような山状突起を持つものや深い刻みを持つ土器が上焼田遺跡(金峰町)に類例がある。上焼田遺跡のものも滑石混入品である。

V類土器は船元式系統の土器群で、本遺跡からは2個体のみの出土であった。75は口縁部が外反し、胴部はまっすぐ落ちる器形を持つ。口縁部外面に「C」字状の文様を施す。文様形態から船元Ⅰ式段階と考えられ、縄文時代前期末～中期初頭に位置すると考えられる。76～78は船元Ⅱ式と考えられ、縄文を全面に施文し、口唇部にもみ浅い刻目(連点文)を施す。口縁部から胴部への屈曲部が長く寸胴な器形である。薄手で胎土も他の土器と異なることから搬入品と考えられる。

前期末～中期中葉の土器について本遺跡から資料数は少ないものの良好な資料が出土した。それらを時期別にまとめたものが第123図である。前期の曾畑式も少量出土していることから前期～中期中葉まで続く土器群と考えられる。特に野久尾式に比定できるような資料(41)や船元Ⅱ式(76～78)や滑石を含む春日式後半の資料(74)など搬入品が見られる。41は文様形態は野久尾式



第122図 縄文時代中期土器接合図

にみられるが口唇内面の刻みを見ると遺跡周辺のものである可能性もある。

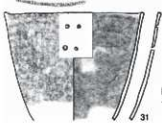





2 後期の土器について (第121・124図)

縄文時代後期の土器は52区～61区を中心に出土している。特に56～61区に集中し、類別に出土地点が異なるという傾向はみられなかった。遺物は後期後半の西平式系統が主体を占める。

3 石器製作跡及びⅡ・Ⅲ層出土石器について

石器製作跡はE-71・72区に位置し(第61・62図)。

第4章では「第4節縄文時代後期・晩期の調査」に記載している。しかし、周辺の土器出土状況を見てみると、縄文時代前期～中期の土器の集中度が高いことが見て取れるため、石器製作跡は本来は前期～中期に該当する可能性も指摘できる。しかしながらⅡ・Ⅲ層は縄文時代前期～晩期の包含層であるため、今回は第4節に記載することにした。同様に「第4章第4節2(3)Ⅱ・Ⅲ層出土石器」も土器の分布域と重ね合わせると70～74区・52区～61区を中心とした2つのまとまりが見られる(第

	在地	搬入品
前期末～中期初頭	 <p>BP4885±25 ～BP4825±25</p>	 <p>75</p>
中期初頭～前葉	 <p>野久尾式?</p> <p>深浦式(鞍谷段階)</p>	 <p>76～78</p> <p>船元Ⅱ式</p>
中期中葉	 <p>春日式前半(前谷段階)</p> <p>BP4175±25</p>	 <p>74</p> <p>春日式後半</p>

第123図 中津野遺跡台地部縄文時代前期末～中期中葉の土器

69・70・121図)。それぞれ前期～中期・後期に属する可能性も指摘できる。

【注】

(1) 中期初期～前葉に位置づけられるもの。特徴は「ミズバれ状」の突帯を施し、突帯の貼付が雑で剥落しているものも目立つ。口縁部は外反あるいはやや内湾し、底部は平底を呈するもの。(相美 2006b)

【引用・参考文献】

鹿児島県教育委員会 1977 『指辺・横峯・上境田遺跡』鹿児島県教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010 『上水流遺跡4』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(150)
 金峰町教育委員会 2003 『上境田A遺跡・上境田B遺跡』金峰町埋蔵

文化財発掘調査報告書(15)

相美伊久雄 2006a 「南九州における縄文時代中期初頭～後葉の土器様相」『鹿児島大学考古学研究室 25 周年記念論集』
 相美伊久雄 2006b 「糸直土器と縄文青土器—南九州における縄文時代前期末～中期前葉土器群の再整理—」『大河』8 大河同人
 相美伊久雄 2013 「琉球列島の九州系縄文中期土器について」『曾根式土器とその前後を考える』第 23 回九州縄文研究会沖縄大会発表要旨・資料集
 堂込秀人 2013 「曾根式土器の展開」『曾根式土器とその前後を考える』第 23 回九州縄文研究会沖縄大会発表要旨・資料集



第 124 図 縄文時代後期晩期土器分布図 (VI類～晩期)

图 版



①遺跡（南西から）と金峰山 ②遺跡を北東から望む

図版 2
調査状況 (1)



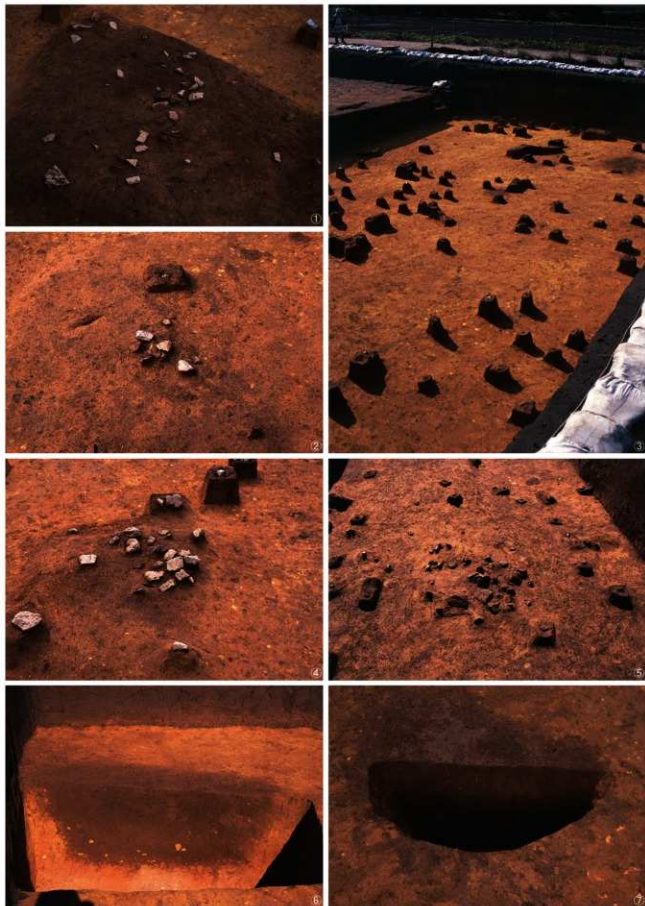
① D～F—62～66区 II層遺物出土状況 ② B・C—63～66区 III層遺物出土状況



① B・C-58～61区 IV層調査狩集状況 ② A・B-64～67区調査終了状況

图版 4

旧石器时代



① 碾群 1 号核出土状况 ② 碾群 2 号核出土状况 ③ D·E—58 区 IX 层遗物出土状况
④ 碾群 3 号核出土状况 ⑤ 碾群 7 号核出土状况 ⑥ 土坑 1 号土层断面 ⑦ 土坑 2 号土层断面



①集石 1号検出状況 ②集石 2号検出状況 ③集石 4号検出状況
④集石 5号検出状況 ⑤集石 3号検出状況 ⑥⑦土器集中検出状況

圖版 6

繩文時代後期



①集石 6 号検出状況 ②土坑 3 号検出状況 ③土坑 3 号完掘状況
④土坑 4 号検出状況 ⑤土坑 4 号半截状況 ⑥石匙 (195) 出土状況 ⑦石器製作跡



竪穴住居跡

(①核出状況 ②③土層断面 ④柱穴半露状況 ⑤完掘状況)

図版 8
中近世 (1)



掘立柱建物跡 1・2・3号 (①検出状況 ②半載状況) ③掘立柱建物跡5号検出状況 ④C・D-49-50区 遺構群検出状況
掘立柱建物跡 (⑤検出状況 ⑥半載状況) ⑦C・D-49-50区 遺構群完掘状況



炉跡1号 (①検出状況 ②半載状況) 炉跡3号 (③検出状況 ④半載状況)
6号土坑 (⑤検出状況 ⑥半載状況 ⑦完掘状況)

图版 10
中近世 (3)



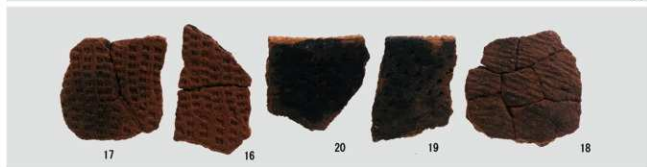
①溝1・2号検出状況 溝2号 (②遺物出土状況 ③E-E' 土層断面) ④溝1・2号完掘状況
溝4・5・6号 (⑤土層断面 ⑥完掘状況) 溝3号 (⑦検出状況 ⑧完掘状況)



溝7号 (①検出状況 ②C-C'土層断面 ③完掘状況)
④道跡2号検出状況 ⑤道跡6号土層断面 ⑥道跡7号検出状況

図版 12

旧石器時代・縄文時代（1）



① 旧石器時代の遺物 ②縄文時代早期の遺物



縄文時代前期～後期の遺物

図版 14

縄文時代 (3)



縄文時代前期～中期の土器



縄文時代前期～中期の土器